

日蓮大聖人御書全集

おんぎくでん まきじょう まきげ

御義口伝（卷上・卷下）

新版
984
〜
1119

おんぎくでん

御義口伝

なんみょうほうれんげきよう

南無妙法蓮華経

おんぎくでん

い

なむ

ぼんご

きみよう

御義口伝に云わく、「南無」とは梵語なり。ここには「帰命」

い になぼう

あ

にん

しゃくそん

きみよう

たてまつ

ほう

と云う。人法これ有り。人とは釈尊に帰命し奉るなり。法

ほけきよう

きみよう

たてまつ

い

き

い

とは法華経に帰命し奉るなり。また云わく、「帰」と云う

しゃくもんふへんしんによ

り き

みよう

ほんもんずいえん

は迹門不変真如の理に帰するなり。「命」とは本門随縁

しんによ

ち もと

きみよう

なんみょうほうれんげきよう

真如の智に命づくなり。「帰命」とは南無妙法蓮華経これな

しゃく い

ずいえん

ふへん

いちねん

じゃく

しょう

り。釈に云わく「随縁・不変は、一念の寂・照なり」。

き われ

しきほう

みよう

われ

しんぼう

また「帰」とは我らが色法なり。「命」とは我らが心法なり。

しきしんふに いちごく
色心不二なるを一極と云うなり。 釈しやくに云わく「一極いちごくに帰せ

しむるが故ゆえに仏乗ぶつじようと云う。

また云いわく、南無妙法蓮華經なんみようほうれんげきようの「南無なむ」とは梵語ぼんご、

「妙法蓮華經みようほうれんげきよう」は漢語かんごなり。 梵漢共時ぼんかんぐじに南無妙法蓮華經なんみようほうれんげきようと

云いうなり。

また云いわく、梵語ぼんごには「薩達磨さつだるま・芬陀梨伽ふんだりきや・蘇多覽そたらん」

と云いう。ここには「妙法蓮華經みようほうれんげきよう」と云いうなり。「薩さつ」とは妙

なり。「達磨だるま」とは法ほうなり。「芬陀梨伽ふんだりきや」とは蓮華れんげなり。「蘇多覽そたらん」

とは經きようなり。九字くじは九尊くそんの仏体ぶつたいなり。九界きゆうかい即そく佛界ぶつがいの表示ひようじな

り。「妙」とは法性なり。「法」とは無明なり。無明・法性

いったい

みようほう

い

れんげ

いんが

にほう

一体なるを妙法と云うなり。「蓮華」とは因果の二法なり。

いんが いったい

きよう

いつさいしゆじよう

ごんごおんじよう

これまた因果一体なり。「経」とは一切衆生の言語音声

きよう

い

しやく

い

こえ

ぶつじ

な

経と云うなり。釈に云わく「声、仏事をなす。これを名づ

きよう

さんぜじようごう

きよう

い

けて経となす」。あるいは三世常恒なるを経と云うなり。

ほうかい

みようほう

ほうかい

れんげ

ほうかい

きよう

法界は妙法なり。法界は蓮華なり。法界は経なり。

れんげ

はちようくそん

ぶつたい

よよ

おも

蓮華とは八葉九尊の仏体なり。能く能くこれを思うべし

いじよう

已上。

でん い

伝に云わく、

じよほんしちか だいじ ほうべんぼんはちか だいじ ひゆほんくか だいじ

序品七箇の大事 方便品八箇の大事 譬喩品九箇の大事

しんげほんろつか だいじ やくそうゆほんごか だいじ じゆきほんしか だいじ

信解品六箇の大事 薬草喩品五箇の大事 授記品四箇の大事

けじようゆほんしちか だいじ ごひやくほんさんか だいじ にんきほんにか だいじ

化城喩品七箇の大事 五百品三箇の大事 人記品二箇の大事

ほっしほんじゆうろつか だいじ ほうとうほんにじゆつか だいじ だいばほんはちか だいじ

法師品十六箇の大事 宝塔品二十箇の大事 提婆品八箇の大事

かんじほんじゆうさんか だいじ あんらくぎようほんごか だいじ ゆじゆつぼんいつか だいじ

勸持品十三箇の大事 安樂行品五箇の大事 涌出品一箇の大事

じゆりようほんにじゆうしちか だいじ ふんべつくだくほんさんか だいじ ずいきほんにか

寿量品二十七箇の大事 分別功德品三箇の大事 随喜品二箇の

だいじ

大事

ほっしくどくほんしか だいじ ふきようほんさんじつか だいじ じんりきほんはちか だいじ

法師功德品四箇の大事 不輕品三十箇の大事 神力品八箇の大事

ぞくるいほんさんか だいじ やくおうほんろつか だいじ みようおんぼんさんか だいじ
囑累品三箇の大事 薬王品六箇の大事 妙音品三箇の大事

ふもんぼんごか だいじ だらにほんろつか だいじ ごんのうほんさんか だいじ
普門品五箇の大事 陀羅尼品六箇の大事 蔽王品三箇の大事

ふげんぼんろつか だいじ むりようぎきようろつか だいじ ふげんぎようごか だいじ
普賢品六箇の大事 無量義経六箇の大事 普賢経五箇の大事

いじよう 已上、二百三十一箇条なり。この外ほかに別伝べつでんこれ有り。つぶさ

しる にこれを記しお訖わんぬ。

おんぎくでんまきじよう
御義口伝卷上

にちれんしよりゆう じよほん 日蓮所立。序品より涌出品に至る。
ゆじゆつぽん いた

じよほんしちか だいじ
序品七箇の大事

だいいち によぜがもん
第一 「如是我聞（かくのごときを我聞きき）」の事
こと

もんく いち い によぜ
文句の一に云わく『如是』とは、所聞の法体を挙ぐ。
しよもん ほつたい あ

がもん のうじ にん
『我聞』とは、能持の人なり。記の一に云わく「故に、始末
いっきよう しよもん たい
の一経を所聞の体となす」。

おんぎくでん い しょもん もん みようじそく
御義口伝に云わく、「所聞」の「聞」は、名字即なり。

ほつたい なんみようほうれんげきよう のうじ のう じ
「法体」とは、南無妙法蓮華経なり。「能持」の「能」の字、

おも つぎ き いち ゆえ しまつ いっきよう
これを思うべし。次に、記の一の「故に、始末の一経」の

釈しやくは、「始し」とは序品じよほんなり、「末まつ」とは普賢品ふげんぼんなり。「法体ほつたい」

とは、心こころということなり。法ほうとは、諸法しよほうなり。諸法しよほうの心こころと

いうことなり。諸法しよほうの心こころとは、妙法蓮華經みようほうれんげきようなり。伝教でんぎようい云

わく「法華經ほけきようを讚ほむといえども、還かえつて法華ほつけの心こころを死ころす」

と。「死し」の字じに心こころを留とどめてこれを案あんずべし。不信ふしんの人は

「如是我聞によぜがもん」の「聞もん」にはあらず。法華經ほけきようの行者ぎようじやは、「如是によぜ」

の体たいを聞きく人と云ひとうべきなり。ここをもつて文句もんぐの一いちに云いわ

く『如是によぜ』とは信順しんじゆんの辞ことばなり。信しんずれば則すなわち所聞しよもんの理會りえ

し、順じゆんずれば則すなわち師資ししの道成みちじようず。詮せんずるところ、日蓮等にちれんとう

の類たぐいをもつて「如是我聞」の者ものと云うべきなり云々。うんぬん

第二 「阿若憍陳如」の事だいに あにやきようじんによ こと

疏しよの一いちに云わく『憍陳如』は、姓せいなり。ここには『火器』かきと翻ほんず。婆羅門種ばらもんしゆなり。その先さき、火ひに事つかう。これによつて族ぞくに命なづく。火ひに二義にぎ有り。照てらすなり、焼やくなり。照てらせすなわば即すなわち闇生やみしようぜず、焼やけば則すなわち物生ものしようぜず。これは『不生』ふしようをもつて姓せいとなす。

御義口伝おんぎくでんに云わく、「火ひ」とは、法性ほつしようの智火ちかなり。火ひの二義にぎとは、一ひとつの「照てらす」は、随縁真如ずいえんしんによの智ちなり。一ひとつ

の「焼く」は、不変真如の理なり。「照」「焼」の二字は、
ほんじやくにもん
本迹二門なり。さて、火の能作としては「照らす」「焼く」
にとく そな なんみようほうれんげきよう
の二徳を具うる南無妙法蓮華経なり。

いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ
今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉るは、生死
やみ て は ねはん ち かみようりよう しょうじそくねはん
の闇を照らし晴らして、涅槃の智火明了なり。生死即涅槃

かいかく すなわ やみしょう
と開覚するを、「照らせば則ち闇生ぜず」とは云うなり。

ぼんのう たきぎ や ぼだい え かげんぜん ぼんのうそくぼだい
煩惱の薪を焼いて、菩提の慧火現前するなり。煩惱即菩提と

かいかく や すなわ ものしょう
開覚するを、「焼けば則ち物生ぜず」とは云うなり。ここ

あん じんによ われ ほけきよう ぎようじや
をもつてこれを案ずるに、「陳如」は我ら法華経の行者の

ぼんのうそくぼだい しょうじそくねはん あらわ うんぬん
煩惱即菩提・生死即涅槃を顕したり云々。

だいさん あじやせおう こと

第三 「阿闍世王」の事

もんぐ いち い あじやせおう みしようおん な

文句の一に云わく『阿闍世王』とは、未生怨と名づく。

い だいきよう い あじやせ みしようおん な

また云わく「大経に云わく『阿闍世とは、未生怨と名づく』

い だいきよう い あじや ふしよう な

と」。また云わく「大経に云わく『阿闍は不生と名づけ、世

おん な

とは怨と名づく』と」。

おんぎくでん い にほんこく いっさいしゆじよう あじやせおう

御義口伝に云わく、日本国の一切衆生は「阿闍世王」

すで しょうぶつ ちち ころ ほけきよう はは がい

なり。既に諸仏の父を殺し、法華経の母を害するなり。

むりようぎきよう い しょうぶつ こくおう きよう ぶにん わごう

無量義経に云わく「諸仏の国王とこの経の夫人と和合して、

とも ぼさつ こ しょう ほうぼう ひと いま はは たいない しょ

共にこの菩薩の子を生ず」。謗法の人、今は母の胎内に処し

ほつけ おんてき

みしょうおん

うえ

ながら法華の怨敵たり。あに「未生怨」にあらずや。その上、

にほんこくとうせい

さんるい

ごうてき

せしやみようおん

よ

おん

な

日本国当世は三類の強敵なり。「世者名怨（世とは怨と名づ

しじ

こころ

とど

あん

にちれんとう

たぐ

く」の四字、心を留めてこれを案ずべし。日蓮等の類い、

じゆうざい

のが

ほうぼう

ひとびと

ほけきよう

しん

しやくそん

き

この重罪を脱れたり。謗法の人々、法華経を信じ釈尊に帰

たてまつ

なん

いぜん

せつぶ

せつも

じゆうざいめつ

し奉れば、何ぞ已前の殺父・殺母の重罪滅せざらんや。

ふぼ

ほけきようふしん

もの

さつがい

ただし、父母なりとも、法華経不信の者ならば、殺害す

ゆえ

ごんきよう

あい

じよう

はは

ごんきようほうべん

しんじつ

べきか。その故は、権教に愛を成す母、権教方便・真実

あき

ちち

さつがい

み

を明らめざる父をば、殺害すべしと見えたり。よつて、文句

もんぐ

の二にに云いわく「観解かんげとは、貪愛とんあいの母はは・無明むみょうの父ちちこれを害がいす

るが故ゆえに逆ぎやくと称しょうす。逆ぎやくは、即ち順すなわなり。非道じゆんを行ひどうじ

て、仏道ぶつどうに通達つうだつす。「観解かんげ」とは、末法まつぽう当とう今こんは題目だいもくの観解かんげな

るべし。子ことして父母ふぼを殺害さつがいするは「逆ぎやく」なり。しかりと

いえども、法華ほけき経きょう不信ふしんの父母ふぼを殺ころしては「順じゆん」となるなり。

ここをもつて「逆ぎやくは、即ちこれ順すなわなり」と釈じやくせり。

今いま、日蓮にちれん等とうの類たぐいは、「阿闍あじゃ世王せおう」なり。その故ゆえは、

南無なんみ妙みょう法ほう蓮華れんげ経きょうの劍つるぎを取とつて、貪愛とんあい・無明むみょうの父母ふぼを害がいして、

教主きょうしゅ釈尊しやくそんのごとく仏身ぶつしんを感得かんとくするなり。「貪愛とんあいの母はは」とは、

かんじほん　さんるい　うち　だいいち　ぞくしゆ　むみよう　ちち
勸持品の三類の中、第一の俗衆なり。「無明の父」とは、

だいに　だいさん　そう　うんぬん
第二・第三の僧なり云々。

だいし　ぶつしよごねん　ほとけ　ごねん
第四　「仏所護念（仏の護念したもうところ）」の事こと

もんぐ　さん　い　ぶつしよごねん　むりようぎしよ
文句の三に云わく『仏所護念』とは、無量義処は、こ

ほとけ　しやうとく　ゆえ　にやらい　ごねん
れ仏の証得したもうところなり。この故に如来の護念し

たもうところなり。下の文に『仏自住大乘（仏は自ら

だいじよう　じゆう　い　かいじ　ほつ
大乘に住したまえり』と云えり。開示せんと欲すといえ

しゆじよう　こん　どん　ひき　よう　もく　つと
ども、衆生の根は鈍なれば、久しくこの要を黙して、務め

すみ　と　ゆえ　ごねん　い
て速やかに説きたまわず。故に『護念』と云う。

記きの三さんに云いわく「昔むかしはいままだ説とかず。故ゆえにこれを名なづ

けて『護ご』となす。法ほうに約やくし、機きに約やくし、皆みな護念ごねんするが故ゆえに

乃至ないし時機じきなおいまだ発ほつせざれば、隠かくして説とかず。故ゆえに『護念ごねん』

と云いう乃至ないしいままだ説とかざるをもつての故ゆえに護ごし、いまだ暢の

べざるをもつての故ゆえに念ねんず。『久默くもく（久ひさしく默もくす）』と云いう

は、昔むかしより今いまに至いたるなり。『斯要しよう（この要よう）』等とうの意ごころ、こ

れを思おもつて知しるべし。』

御義口伝おんぎくでんに云いわく、この「護念ごねん」の体たいにおいては、本迹ほんじやく

二門にもんの首題しゅだいの五字ごじなり。この護念ごねんにおいて、七種しちしゆの護念ごねんこ

れ有り。一には時に約し、二には機に約し、三には人に約し、
四には本迹に約し、五には色心に約し、六には法体に約し、
七には信心に約するなり云々。今、日蓮等の類いは、護念の
体を弘むるなり。

一に時に約すとは、仏、法華經を四十余年の間、い

まだ時至らざるが故に護念したもうなり。二に機に約すと

は、「破法不信故 墜於三悪道（法を破して信ぜざるが故に、

三悪道に墜ちなん）」の故に、前の四十余年の間、いまだ

これを説かざるなり。三に人に約すとは、舍利弗に対して説

かんがためなり。四しに本迹ほんじやくに約やくすとは、護ごをもつて本ほんとな

し、念ねんをもつて迹しやくとなす。五ごに色心しきしんに約やくすとは、護ごをもつ

て色しきとなし、念ねんをもつて心しんとなす。六ろくに法体ほつたいに約やくすとは、

法体ほつたいとは本有常住ほんぬじようじゆうなり、一切衆生いっさいしゆじゆうの慈悲心じひしんこれなり。七しち

に信心しんじんに約やくすとは、信心しんじんをもつて護念ごねんの本ほんとなすなり。

詮せんずるところ、日蓮等にちれんとうの類たぐい、南無妙法蓮華經なんみようほうれんげきようと唱となえ

奉たてまつるは、しかしながら護念ごねんの体たいを開ひらくなり。護ごとは、仏見ぶつけん

なり。念ねんとは、仏ぶつ知ちなり。この知・見けんの二字にじは、本迹ほんじやく両門りやうもん

なり。仏知ぶつちを妙みようと云いうなり。仏見ぶつけんを法ほうと云いうなり。この知見ちけん

たい しゅぎよう
の体を修行するを、
れんげ い
蓮華と云うなり。
いんが たい
因果の体なり。
いんが
因果
の言語は、
ぎんご
経なり。
きよう

しかのみならず、
ほけきよう ぎようじゃ
法華経の行者をば、
さんぜ しよぶつごねん
三世の諸仏護念
したもうなり。
ふげんぼん い
普賢品に云わく「
いっしや いしよぶつごねん いち
一者為諸仏護念（一には

しよぶつ ごねん
諸仏に護念せらるる）」と。「護念」とは、
みようほうれんげきよう
妙法蓮華経なり。

しよぶつ ほけきよう ぎようじゃ ごねん
諸仏の法華経の行者を護念したもうは、
みようほうれんげきよう ご
妙法蓮華経を護
ねん
念したもうなり。
きほういちどう ごねんいつたい
機法一同して護念一体なり。
き さん しゃく
記の三に釈

して「法に約し、
ほう やく
機に約し、
き やく
皆護念するが故に」
みなごねん ゆえ
と云うは、
い

この意なり。
こころ

もんぐ さん い ぶつしよごねん さき じどう
また、文句の三に云わく『仏所護念』とは、前の地動

ずい けつじよう じどう ろくばん わく やぶ あらわ

瑞を決定するなり」。地動は、六番に惑を破ることを表す

みようほうれんげきよう じゆじ もの ろくばん わく やぶ うたが

なり。妙法蓮華經を受持する者は、六番に惑を破ること疑

じんりきほん い おがめつどご おうじゆじしきよう

いなきなり。神力品に云わく「於我滅度後 応受持斯經

ぜにん おぶつどう けつじよう むうぎ われめつど のち まさ

是人於仏道 決定無有疑（我滅度して後において、応にこ

きよう じゆじ ひと ぶつどう けつじよう うたが

の經を受持すべし。この人は仏道において、決定して疑

ぶつじゆうだいじよう

いあることなけん」。『仏自住大乘』とは、これなり。

いちぎ ほとけ しめじよう ごねん じ

また一義に、仏の衆生を護念したもうことは、護と

ゆいがいちにん のういくご われいちにん よ くご

は「唯我一人 能為救護（ただ我一人のみ、能く救護をな

す)、「念ねんとは「每まい自作じさ是念ぜねん (つねに自らこの念ねんを作す)」、

これなり。普賢品ふげんほんに至いたつて「一者いっしやい為諸しよぶつ仏護念ごねん」と説とくなり。

にちれん しょうねんさんじゆうに なんみようほうれんげきよう ぎねん
日蓮にちれんは生年しやうねん三十二さんじゆうにより南無妙法蓮華經なんみようほうれんげきようを護念ぎねんするなり。

だいご げしあびじごく しもあびじごく いた こと
第五 「下至阿鼻地獄 (下阿鼻地獄に至る)」の事

おんぎくでん い じっかいがいじよう もん だいば じようぶつ
御義口伝おんぎくでんに云いわく、十界じっかい皆成がいじようの文もんなり。提婆だいばが成仏じようぶつ、

もん ふんみよう ほうとうほん つぎ だいば じようぶつ と
この文もんにて分明ふんみようなり。宝塔品ほうとうほんの次つぎに提婆だいばが成仏じようぶつを説とくこ

にか かんぎよう ぶん だいば もん とき じようぶつ
とは二箇にかの諫曉かんぎようの分ぶんなり。提婆だいばはこの文もんの時とき、成仏じようぶつせり。

し じ びやくごう い びやくごう こうみよう
この「至し」の字じは白毫びやくごうの行いくことなり。白毫びやくごうの光明こうみようは

なんみようほうれんげきよう じようしあかにたてん かみあかにたてん いた
南無妙法蓮華經なんみようほうれんげきようなり。「上至阿迦尼咤天じようしあかにたてん (上阿迦尼咤天かみあかにたてんに至いた

る)は空諦くうたい、「下至阿鼻地獄」は仮諦げしあびじごく、「白毫光びやくごう (白毫のびやくごう

光)は中道なり。これによつて十界同時の成仏なり。
ひかり ちゆうどう じっかいどうじ じようぶつ

「天王仏」とは、宝号を送るまでなり。されば、依正二報の
てんのうぶつ ほうごう おく えしようにほう

成仏の時は、この品の「下至阿鼻地獄」の文は依報の成仏
じようぶつ とき ほん げしあびじごく もん えほう じようぶつ

を説き、提婆達多の天王如来は正報の成仏を説く。依報・
と だいばだつた てんのうによらい しようほう じようぶつ と えほう

正報、共に妙法の成仏なり。
しようほう とも みようほう じようぶつ

今、日蓮等の類い、聖靈を訪う時、法華経を誦し
いま にちれんとう たぐ しようりよう とぶら とき ほけきよう どくじゆ

南無妙法蓮華経と唱え奉る時、題目の光無間に至つて
なんみようほうれんげきよう とな たてまつ とき だいもく ひかりむけん いた

即身成仏せしむ。回向の文、これより事起こるなり。法華
そくしんじようぶつ えこう もん ことお ほっけ

ふしん ひと だざいむけん むけん だざい だいもく

不信の人は「墮在無間（無間に墮在す）」なれども、題目の

ひかり こうし ほつけ ぎようじや とぶら

光をもつて、孝子、法華の行者として訪わんに、あにこ

ぎ か げしあびじごく もん

の義に替わるべけんや。されば、「下至阿鼻地獄」の文は、

ほとけ ひかり はな だいば じようぶつ にちれん

仏、光を放つて提婆を成仏せしめんがためなりと、日蓮、

すいち たてまつ

推知し奉るなり。

だいろく どうしがこ どうし なに ゆえ こと

第六 「導師何故（導師は何が故ぞ）」の事

しよ い まこと おも せつぼう にゆうじよう よ

疏に云わく「良に以んみれば、説法・入定して能く

ひと みちび すで どうし しよう

人を導けば、既に『導師』と称す」。

おんぎくでん い どうし しゃくそん おんこと

御義口伝に云わく、この「導師」は、釈尊の御事なり。

せつぼう

むりようぎきよう

にゆうじよう

むりようぎしよざんまい

い

「説法」とは無量義経、「入定」とは無量義処三昧に入り

たもうことなり。

せん

どうし

ふた

あく

どうし

詮ずるところ、「導師」において二つあり。悪の導師、

ぜん

どうし

あ

あく

どうし

ほうねん

こうぼう

じかく

善の導師これ有るなり。悪の導師とは、法然・弘法・慈覚・

ちしようとう

ぜん

どうし

てんだい

でんぎようとう

まつぼう

智証等なり。善の導師とは、天台・伝教等これなり。末法

い

いま

にちれんとう

たぐ

ぜん

どうし

せつぼう

に入つては、今、日蓮等の類いは、善の導師なり。「説法」

なんみようほうれんげきよう

にゆうじよう

ほつけじゆじ

けつじようしん

い

とは南無妙法蓮華経、「入定」とは法華受持の決定心に入

よ

ひと

みちび

よ

じ

こころ

とど

ることなり。「能く人を導く」の「能」の字、心を留めて

あん

ゆじゆつぽん

しやうどうしし

しやうどう

し

おな

これを案ずべし。涌出品の「唱導之師（唱導の師）」と同じ

ことなり。せん詮ずるところ、日本国の一切衆生を導かんが

ために説法する人、これなり云々。せつぼう ひと うんぬん

第七 「天鼓自然鳴（天鼓は自然に鳴る）」の事 こと

疏しよに云わく「『天鼓自然鳴』は無問自説を表すなり」。

御義口伝おんぎくでんに云わく、この文は此土・他土の瑞同じくし

て長出ちやうしゆつせるを頌じゆす。「無問自説」とは、釈迦如来、

妙法蓮華経みようほうれんげきやうを無問自説したもうなり。今、日蓮等の類いまいは、

無問自説むもんじせつなり。「念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊」と喚さけ

ぶことは、無問自説むもんじせつなり。三類さんるいの強敵きやうてきの来ることきたは、この故ゆえ

てんく

なんみようほうれんげきよう

じねん

むしようげ

なり。「天鼓」とは、南無妙法蓮華経なり。「自然」とは、無障礙

みよう

とな

おんじよう

なり。「鳴」とは、唱うるところの音声なり。

いちぎ

いつさいしゆじよう

ごごんおんじよう

じざい

むもん

一義に、一切衆生の語言音声を自在に出だすは「無問

じせつ

じせつ

ごくそつ

ざいにん

かしゃく

おん

がき

自説」なり。「自説」とは、獄卒の罪人を呵責する音、餓鬼の

ききん

おんじようとう

いつさいしゆじよう

とん

じん

ち

さんどく

ねんねんとう

飢饉の音声等、一切衆生の貪・瞋・癡の三毒の念々等を

じせつ

い

おんじよう

たい

なんみようほうれんげきよう

自説とは云うなり。この音声の体とは、南無妙法蓮華経な

り。

ほんじやくりようもん

みようほうれんげきよう

ごじ

てんく

てん

本迹両門の妙法蓮華経の五字は「天鼓」なり。「天」

だいいちぎてん

じせつ

じじゆゆう

せつぼう

き

とは、第一義天なり。「自説」とは、自受用の説法なり。記の

三さんに云いわく『無問自説を表す』とは、方便ほうべんの初はじめに三昧さんまいより起たつて舍利弗しゃりほつに告つぐ。広歎こうたん・略歎りやくたん、此土しど・他土たど、寄言きごん・絶言ぜつごん、もしは境きやう、もしは智ち、これ乃すなわち一經いつきやうの根本こんぽん、五時ごじの要津ようしんなり。このこと輕かるからず。この釈しゃくに「一經いつきやうの根源こんげん、五時ごじの要津ようしん」とは、南無妙法蓮華經なんみよほうれんげきやうこれなり云々。うんぬん

方便品八箇の大事ほうべんぼんはつか だいじ

第一だいいち 「方便品」の事ほうべんぼん こと

文句もんぐの三さんに云いわく『方ほう』とは、秘ひなり。『便べん』とは、妙みやう

なり。妙みょうに方ほうに達たつするに、即すなわちこれ真しんの秘ひなり。内衣ないえの裏うら

に無む価げの珠たまを点かくると、王おうの頂ちようじよう上にただ一いっしゆあ珠あ有あると、二にな無な

く別べつ無なし。客かく作さの人ひとを指さすに、これ長ちようじや者この子こにして、また

二にな無なく別べつ無なし。かことばくのごひときひの言ことばは、これ秘ひなり、これ妙みょう

なり。経きようの『唯ゆい我が知ち是ぜ相そう 十方じつぽう仏ぶつ亦やく然ねん (ただ我われのみ、この

相そうを知しれり。十じつぽう方ほうの仏ほとけもまたしかふしなり)』止し止し不ふ須しゆ説せつ 我が

法ほう妙みょう難なん思し (止やみやなん、止とみもちなん。説わくを須ほういほうず。我わが法ほうは

妙みょうにして思おもい難がたし)』のゆえ故ひに、秘ひをもつて『方ほう』

をしやく積くし、妙みょうをもつて『便べん』をしやく積くす。正まさしくこれ今いまの品ほんの

意なり。故に『方便品』と言うなり。

記の三に云わく「第三に秘妙に約して釈すとは、妙を

もつての故に即なり。円をもつて即となし、三つを不即と

なす。故に、さらに不即に対して、もつて即を釈す」。

御義口伝に云わく、この釈の中に「一珠」とは、衣裏珠

即ち頂上珠なり。「客作の人」と「長者の子」と、全く

不同これ無し。詮ずるところ、謗法不信の人は体外の権に

して、法用・能通の二種の方便なり。ここをもつて二無く別

無きにあらざるなり。

いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉るは、

ひみようほうべん たいない ゆえ みようほうれんげきよう だい

これ秘妙方便にして体内なり。故に、「妙法蓮華經」と題し

つぎ ほうべんぼん い

て、次に「方便品」と云えり。

みようらく き さん しゃく ほんじよ すなわ しん ひ

妙樂、記の三に釈して、本疏の「即ちこれ真の秘な

そく えん ほんじよ すなわ しん ひ

り」の「即」を、「円をもつて即となす」と消釈せり。即は

えん ほけきよう べつみよう そく ほんぶそくごく しょほうじつそう

円なれば、法華經の別名なり。即とは、凡夫即極、諸法実相

ほとけ えん いちねんさんぜん そく えん ことば か

の仏なり。円とは、一念三千なり。即と円と、言は替わ

みよう べつみよう いつさいしゆじよう じつそう ほとけ みよう

れども、妙の別名なり。一切衆生、実相の仏なれば、妙

ふしぎ ほうぼう ひと いま し ゆえ

なり、不思議なり。謗法の人、今これを知らざるが故に、

これを「秘」と云う。

い ほうかいさんぜん

また云わく、法界三千を、「秘妙」とは云うなり。秘と

い ひみよう

い ひ

さんぜんられつ

ほか ふしぎ

は、きびしきなり、三千羅列なり。これより外に不思議これ

な だいほうぼう ひと

みようほうれんげきよう じゆじ たてまつ

無し。大謗法の人たりというとも、妙法蓮華經を受持し奉

みようほうれんげきようほうべんぼん

い いま まつぼう い

るところを、妙法蓮華經方便品とは云うなり。今、末法に入

まさ にちれんとう たぐ

みようほうれんげきよう たいない

つて、正しく日蓮等の類いのことなり。妙法蓮華經の体内に

にぜん にんぼう い

みようほうれんげきようほうべんぼん

い

爾前の入法を入るるを、妙法蓮華經方便品とは云うなり。

そくしんじようぶつ

によぜほんまつくきようとう

と

これを即身成仏とも如是本末究竟等とも説く。

ほうべん

じっかい

むみよう

また、「方便」とは、十界のことなり、または無明なり。

みようほうれんげきよう

じつかい

ちようじよう

ほつしよう

ほんのうそく

妙法蓮華経は、十界の頂上なり、また法性なり。煩惱即

ぼだい しょうじそくねはん

菩提・生死即涅槃これなり。

えん

そく

いちねんさんぜん

みよう

そく

「円をもつて即となす」とは、一念三千なり。妙と即

おな

いちじ

いちねんさんぜん

えん

とは、同じものなり。「二字の一念三千」ということは、円

えん

みよう

い

えん

しよほうじつそう

えん

(圓)と妙とを云うなり。円とは、諸法実相なり。円とは、

しゃく

い

えん

えんゆうえんまん

な

えんゆう

しゃくもん

えんまん

釈に云わく「円は円融円満に名づく」。円融は迹門、円満

ほんもん

し

かん

にほう

われ

しきしん

は本門なり。または止と観との二法なり。または我が色心

にほう

の二法なり。

いちじ

いちねんさんぜん

えしんりゆう

ひぞう

くにがまえ

「二字の一念三千」とは、恵心流の秘蔵なり。「□□」

は一念なり、「眞」は三千なり。一念三千とは、不思議とい

いちねん かず さんぜん いちねんさんぜん ふしぎ

うことなり。この妙とは前の三教にいまだこれを説かず。

ゆえ ひ い ゆえ し なんみようほうれんげきよう いっしん

故に「秘」と云うなり。故に知んぬ、南無妙法蓮華経は、一心

ほうべん みようほうれんげきよう くしき じっかい はっしきいげ

の方便なり。妙法蓮華経は、九識なり。十界は、八識已下

こころ とど あん ほう すなわ じっぼう

なり。心を留めてこれを案ずべし。「方」とは即ち十方、

じっぼう すなわ じっかい べん ふしぎ

十方は即ち十界なり。「便」とは、不思議ということなり

うんぬん

云々。

第二 「諸仏智慧甚深無量。其智慧門（諸仏の智慧は甚深無量

だいに しょぶつち えじんじんむりよう ごち えもん しょぶつ ちえ じんじんむりよう

なり。その智慧の門は）」の事

ちえ もん こと

もんぐ さん い じつ たん つぎ ごん たん じつ
文句の三に云わく「まず実を歎じ、次に権を歎ず。実と

しよぶつち え さんしゆ けた ごんじつ ゆえ じよぶつ
は、『諸仏智慧』なり。三種の化他の権実にあらず。故に『諸仏』

い じぎよう じつ あらわ ゆえ ちえ い ちえ
と云う。自行の実を顕す。故に『智慧』と言う。この智慧の

たい すなわ いっしん さんち じんじんむりよう すなわ しようたん
体は、即ち一心の三智なり。『甚深無量』とは、即ち称歎

ことば ほとけ じつち たて により そこ とお あ
の辞なり。仏の実智の豎に如理の底に徹ることを明かす。

ゆえ じんじん い ほうかい へん きわ ゆえ むりよう
故に『甚深』と言う。横に法界の辺を窮む。故に『無量』

い むりよう じんじん たて たか よこ ひろ たと
と言う。無量・甚深にして、豎に高く横に広し。譬えば、根

ふか すなわ えだしげ みなもととお すなわ なが なが
深ければ則ち条茂く、源遠ければ則ち流れ長きがごとし。

じつちすで ごんちれい うんぬん ごち えもん
実智既にしかれば、権智例してしかり云々。『其智慧門』と

すなわ

ごんち

たん

じぎよう

どうぜん

は、即ちこれ権智を歎ずるなり。けだし、これ自行の道前

ほうべん

しんしゆ

ちからあ

ゆえ

な

もん

もん

の方便にして進趣の力有り。故に名づけて門となす。門よ

い

どうちゆう

いた

どうちゆう

じつ

しよう

どうぜん

ごん

い

り入って道中に到る。道中を実と称し、道前を権と謂う

なんげなんにゆう

ごん たん

じ

はか

なり。『難解難入』とは、権を歎ずるの辞なり。謀らずし

りよう

むほう

だいゆう

しちしゆ

ほうべん

しきたく

て了するは、無方の大用なり。七種の方便、測度すること

あた

じゆうじゆう

はじ

げ

じゆうじ

にゆう

しよ

ご

能わず。十住に始めて解し、十地を入となす。初と後と

あ

ちゆうかん

なんじなんご

し

べつ

を挙ぐ。中間の難示難悟は知るべし。しかるに、別して

しようもん

えんがく

し

あた

あ

しゆう

声聞・縁覚の知ること能わざるところを挙ぐることは、執

おも

ゆえ

べつ

は

重きが故に、別してこれを破するのみ」。

記きの三さんに云いわく『豎たてに高たかく横よこに広ひろし』とは、中なかにおい

て法ほつ・譬ひ・合ごうあり。これをもつて後のちを例れいす。今いま、『実じつ』を積しゃく

するに、既すでにあまねく横おう・豎じゆを窮きわむれば、下しもに『権ごん』を積しゃく

るに、理りは応まさに深極じんごくなるべし。下しもに当まさに『権ごん』を積しゃくすべけ

れば、あらかじめその相そうを述のぶ。故ゆえに『云々うんぬん』と註しるす。

『其智慧門』とは、『其』とは乃すなわち前さきの実果じつかの因智いんちを指さす。

もし智慧ちえすなわ即もんち門もんならば、門もんはこれ権ごんなり。もし智慧ちえの門もんな

らば、智ちは即すなわち果かなり。『けだし、これ』等とうとは、この中なかに

すべからく十地じゆうじをもつて『道前どうぜん』となし、妙覚みょうかくを『道中どうちゆう』

となし、証後を『道後』となすべし。故に知んぬ、文の意は
因の位に在り。

御義口伝に云わく、この本末の意、分明なり。中に

「豎に高く横に広し」とは、「豎」は本門なり、「横」は迹門

なり。「根」とは、草木なり。草木は上へ登る。これは迹門

の意なり。「源」とは、本門なり。源は水なり。水は下

へくだる。これは本門の意なり。「条茂し」とは、迹門

十四品なり。「流れ長し」とは、本門十四品なり。「智慧」

とは、一心の三智なり。「門」とは、この智慧に入るところ

のうにゆう もん

さんち たい

なんみようほうれんげきよう

の能入の門なり。「三智の体」とは、南無妙法蓮華経なり。

もん

しんじん

だいに

かん

「門」とは、信心のことなり。ここをもつて第二の巻に

いしんとくにゆう

い

にゆう

もん

おな

「以信得入」と云う。「入」と「門」とはこれ同じきなり。

いま にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

ちえ

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉るを、「智慧」

い

とは云うなり。

ひゆほん

い

ゆいういちもん

いちもん

あ

もん

譬喩品に云わく「唯一門（ただ一門のみ有り）」。門

うもん

くうもん

やくうやくくうもん

ひうひくうもん

において、有門・空門・亦有亦空門・非有非空門あるなり。

うもん

しやう

くうもん

し

やくうやくくうもん

しやうじいちねん

有門は、生なり。空門は、死なり。亦有亦空門は、生死一念

ひうひくうもん

しやう

し

うもん

なり。非有非空門は、生にあらず、死にあらず。有門は、

だいもく もんじ ぐらうもん ごと ばんぼう ぐそく とどこお

題目の文字なり。空門は、この五字に万法を具足して凝ら

ぎ やくうやくうもん ごじ ぐそく ほんじやく ひう

ざる義なり。亦有亦空門は、五字に具足する本迹なり。非有

ひくうもん いちぶ こころ ないしよう ほつけいぜん にじよう

非空門は、一部の意なり。この内証は、法華已前の二乗の

ちえ およ もんぐ さん い しちしゆ ほうべん

智慧の及ばざるところなり。文句の三に云わく「七種の方便、

しきたく あた いま にちれんとう たぐ ちえ

測度すること能わず」。今、日蓮等の類いは、この智慧に

とくにゆう げじゆ じよしよぼさつしゆ しんりきけんごしや

得入するなり。よつて、偈頌に「除諸菩薩衆 信力堅固者

もろもろ ぼさつしゆ しんりきけんご もの のぞ い われ

（諸の菩薩衆の、信力堅固なる者を除く）」と云うは、我

ぎようじや と うんぬん

ら行者のことを説くなり云々。

だいさん ゆいはいちだいじいんねん いちだいじ いんねん

第三 「唯以一大事因縁（ただ一大事の因縁をもつて）」の事

こと

もんぐ し い いち すなわ いちじつそう ご
文句の四に云わく 『一』は則ち一実相なり。五にあ

さん しち く ゆえ いち
らず、三にあらず、七にあらず、九にあらず。故に『一』

い しよう こうはく ご さん しち く ひろ
と言うなり。その性、広博にして、五・三・七・九より博

ゆえ な だい しょぶつしゆつせ ぎしき ゆえ
し。故に名づけて『大』となす。諸仏出世の儀式なり。故に

な じ しゆじよう き あ ほとけ かん ゆえ
名づけて『事』となす。衆生にこの機有つて仏を感じず。故

な いん ほとけ き う おう ゆえ な
に名づけて『因』となす。仏、機を承けて応ず。故に名づ

えん しゆつせ ほんい ほけきよう だい
けて『縁』となす。これを出世の本意となす。

おんぎくでん い いち ほけきよう だい
御義口伝に云わく、「一」とは、法華経なり。「大」と

けごん じ ちゆうげん さんみ ほっけいぜん
は、華嚴なり。「事」とは、中間の三昧なり。法華已前に

も三諦あれども、さんてい 碎けたる珠は宝にあらざるがごとし云々。くだ たま たから うんぬん

また云わく、「二」とは、い いち みよう 妙なり。「大」とは、だい ほう 法なり。

「事」とは、じ れん 蓮なり。「因」とは、いん 華なり。「縁」とは、えん きよう 経な

り云々。うんぬん

また云わく、い われ こうべ みよう のど ほう むね れん 我らが頭は妙なり。喉は法なり。胸は蓮

なり。胎は華なり。足は経なり。この五尺の身、ごしゃく み みようほうれんげきよう 妙法蓮華経

の五字なり。この大事を、ごじ だいじ しゃかによらい しじゆうよねん あいだ おんみつ 釈迦如来、四十余年の間、ごじ だいじ と 隠密し

たもうなり。今経の時、こんきよう ととき と い 説き出だしたもう。この大事を説

かんがために、ほとけ よ い 仏は世に出でたもう。我らが一身は妙法

五字なりと「開かい仏知見ぶつちけん（仏知見を開く）」する時とき、即身成仏そくしんじょうぶつ

するなり。「開かい」とは、信心しんじんの異名いみょうなり。信心しんじんをもって妙法みょうほう

を唱え奉とな たてまつらば、やがて開かい仏知見ぶつちけんするなり。しかるあいだ、

信心しんじんを開く時ひら とき、南無妙法蓮華經なんみょうほうれんげきようと示すしめを、示しめ仏知見ぶつちけん（仏知見

を示す）と云うなり。示す時しめ ときに靈山淨土りょうぜんじょうどの住所じゅうしょと悟りさと、

即身成仏そくしんじょうぶつと悟るさとを、「悟ご仏知見ぶつちけん（仏知見を悟る）」と云うな

り。悟る当体さと とうたい、直至道場じきしどうじょうなるを、「入にゅう仏知見ぶつちけん（仏知見に入る）」

と云うなり。しかるあいだ、信心しんじんの開かい仏知見ぶつちけんをもって正意しょういと

せり。入にゅう仏知見ぶつちけんの「入にゅう」の字じは、迹門しゃくもんの意いは、実相じつそうの理りの

うち きにゆう にゆう い ほんもん こころ りそくほんがく

内に帰入するを、入と云うなり。本門の意は、理即本覺と

い いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ

入るなり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る

ほど もの ほうとう い うんぬん

程の者は、宝塔に入るなり云々。

い かいぶつちけん ほとけ きゆうかいしよぐ

また云わく、「開仏知見」の「仏」とは、九界所具の

ぶつかい ちけん みようほう にじ しかん にじ じやくしやう

仏界なり。「知見」とは、妙法の二字、止觀の二字、寂照

にとく じようじ にほう しきしんいんが せん ちけん

の二徳、生死の二法なり。色心因果なり。詮ずるところ、知見

みようほう きゆうかいしよぐ ぶつしん ほけきやう ちけん ひら

とは、妙法なり。九界所具の仏心を法華經の知見にて開く

おも ほとけ きゆうかい

ことなり。ここをもつてこれを思うに、仏とは九界の

しゆじよう かいかくあらわ こんじん ぶつしん いた

衆生のことなり。この開覺顕れて、今身より仏身に至る

たも

いな

しめ

みようほう

しめ

じぶつちけん

まで持つや否やと示すところが、妙法を示す「示仏知見」

い

していかなのう

うと

とき

によがとうむい

われ

と云うなり。師弟感応して受け取る時、「如我等無異（我が

ひと

こと

さと

ごぶつちけん

ごとく等しくして異なることなし）」と悟るを、「悟仏知見」

い

さと

み

ほうかいさんぜん

ここ

とうたい

ほけきよう

と云うなり。悟つて見れば、法界三千の己々の当体、法華経

ないしよう

い

にゆうぶつちけん

い

ひ

なり。この内証に入るを、「入仏知見」と云うなり。秘す

うんぬん

べし云々。

い

しぶつちけん

はつそう

かい

しよう

また云わく、四仏知見とは、八相なり。「開」とは、生

そう

にゆう

し

そう

ちゆうげん

じ

ご

の相なり。「入」とは、死の相なり。中間の「示」「悟」

ろくそう

げてん

たきたいとう

じぶつちけん

しゆつけ

は、六相なり。下天・託胎等は、「示仏知見」なり。出家・

ごうま じょうどう てんぽうりんとう ごぶつちけん ごんきよう 二ころ

降魔・成道・転法輪等は、「悟仏知見」なり。権教の意は、

しょうじ おんり おし ゆえ しぶつちけん

生死を遠離する教えなるが故に、四仏知見にあらざるなり。

こんきよう とき しょうじ にほう いっしん みようゆう うむ にどう ほんかく

今経の時、「生死の二法は一心の妙用、有無の二道は本覚

しんとく かいかく しぶつちけん い しぶつちけん

の真徳」と開覚するを、四仏知見と云うなり。四仏知見を

さんぜ しょうぶつ いちだいじ おぼ よ しゅつげん

もつて三世の諸仏は一大事と思しめし、世に出現したもう

かいぶつちけん ほけきよう ほうねん しゃへいかくほう

なり。この「開仏知見」の法華経を、法然は「捨閉閣抛」

い こうぼうだいし だいさん れつ けるん ほう 旬

と云い、弘法大師は「第三の劣、戲論の法」とののしれり。

ごぶつごうごう した 切 もの じかくだいし ちしようとう

五仏道同の舌をきる者にあらずや。慈覚大師・智証等は、

あくし つるぎ あた わ おや こうぐ 斬 もの

悪子に剣を与えて我が親の頭をきらする者にあらずや

うんぬん
云々。

また云わく、「一」とは中道、「大」とは空諦、「事」

とは仮諦なり。この円融の三諦は何物ぞ。いわゆる

南無妙法蓮華経これなり。この五字は、日蓮出世の本懐な

り。これを名づけて事となす。日本国の一切衆生の中に

日蓮が弟子檀那と成る人は、「衆生にこの機有つて仏を感

ず。故に名づけて『因』となす」の人なり。それがために

法華経の極理を弘めたるは、「機を承けて応ず。故に名づけ

て『縁』となす」にあらずや。「因」は下種なり。「縁」と

は、三・五の宿縁さんご しゆくえんに帰きするなり。

事じの一念三千いちねんさんぜんは、日蓮にちれんが身みに当あたつての大事だいじなり。「二」いち

とは一念いちねん、「大」だいとは三千さんぜんなり。この三千さんぜんとききたるは、事じの

因縁いんねんなり。「事」じとは衆生世間しゆじようせけん、「因」いんとは五陰世間ごおんせけん、「縁」えん

とは国土世間こくどせけんなり。国土世間こくどせけんの縁えんとは、南閻浮提なんえんぶだいは

妙法蓮華經みようほうれんげきようを弘ひろむべき本縁ほんえんの国くになり。經きように云いわく

「閻浮提内えんぶだいない、広令流布こうりようふ、使不断絶しふだんぜつ（閻浮提内えんぶだいに、うち、ひろ、る、ふ

せしめて、断絶だんぜつせざらしめん）」、これなり云々うんぬん。

第四 「五濁」の事だいし ごとく こと

もんぐ し い 文句の四に云わく 『劫濁』は別の体無し。劫はこれ

ちようじ せつな たんじ しゆじようじよく べつ たいな けん

長時、刹那はこれ短時なり。『衆生濁』は別の体無く、見・

まん かほう と ぼんのうじよく ごどんし き たい

慢の果報を攬る。『煩惱濁』は五鈍使を指して体となす。

けんじよく ごりし さ たい みようじよく しきしん れん

『見濁』は五利使を指して体となす。『命濁』は色心を連

じ さ たい

持するを指して体となす」。

おんぎくでん い にちれんとう たぐ はな

御義口伝に云わく、日蓮等の類はこの「五濁」を離る

がし どあんのん わ ど あんのん こうじよく

るなり。「我此土安穩（我がこの土は安穩）」なれば、「劫濁」

じつそうむさ ぶっしん しゆじようじよく

にあらず。実相無作の仏身なれば、「衆生濁」にあらず。

ぼんのうそくぼだい しようじそくねはん みようし ぼんのうじよく

煩惱即菩提・生死即涅槃の妙旨なれば、「煩惱濁」にあらず。

ごひやくじんてんごう

むしほんぬみ

みようじゆく

ず。五百塵点劫より無始本有の身なれば、「命濁」にあら

しょうじきしゃほうべん

たんせつむじようごう

しょうじき

ほうべん

す

ざるなり。「正直捨方便 但説無上道（正直に方便を捨て

むじようごう

と

ぎようじゃ

けんじゆく

て、ただ無上道を説くのみ）の行者なれば、「見濁」に

あらざるなり。

せん

なんみようほうれんげきよう

きよう

お

詮ずるところ、南無妙法蓮華経を境として起こるとこ

ごじよく

にほんこく

いっさいしゆじよう

ごじよく

しょうい

ろの五濁なれば、日本国の一切衆生、五濁の正意なり。

もんぐ

し

そう

しじよくぞうぎやく

されば、文句の四に云わく「相とは、四濁増劇にして

とき

あつ

しんにぞうぎやく

とうびようお

とんよくぞうぎやく

この時に聚まれり。瞋恚増劇にして刀兵起こり、貪欲増劇

きが お

ぐちぞうぎやく

しつえきお

さんさいお

にして飢餓起こり、愚癡増劇にして疾疫起こる。三災起こ

るが故に、煩惱ゆえ ぼんのうますます隆さかんに、諸見転しよけんうたた熾さかんなり。経きように

「如来にょらい現在げんざい猶多ゆ た怨嫉おんしつ。況滅度きようめつどご後ご（如来にょらいの現げんに在いますすらなおんお怨おん

嫉多しつおほし。いわんや滅度めつどして後のちをや」と云いう、これなり。

法華經ほけきよう不信ふしんの者ものをもつて、五濁ごじよくの障さわり重おもき者ものとす。経きように云い

わく「以五濁いごじよく悪世あくせ 但樂たんぎよう著諸欲じやくくしよよく 如是等衆生によぜとうしゆじよう 終不しゆうふ求ぐ

仏道ぶつどう（五濁ごじよくの悪世あくせには、ただ諸欲しよよくに樂ぎよう著するのみなるを

もつて、かくのごとき等の衆生とう しゆじようは、終ついに仏道ぶつどうを求めず）」

云々うんぬん。「仏道ぶつどう」とは、法華經ほけきようの別名べつみようなり。天台てんだい云いわく「仏道ぶつどう

とは、別べつして今經こんきようを指さす」。

だいご びくびくに うえぞうじょうまん うばそくがまん うばい

第五 「比丘比丘尼 有懐増上慢 優婆塞我慢 優婆夷

ふしん びく びくに ぞうじょうまん いだ あ うばそく

不信（比丘・比丘尼の、増上慢を懐くこと有るもの、優婆塞

がまん うばい ふしん こと

の我慢なるもの、優婆夷の不信なるもの」の事

もんぐ し い じょうまん がまん ふしん

文句の四に云わく『上慢』と『我慢』と『不信』と

ししゅつう あ しゅつけ にしゆ おお どう しゆ

は、四衆通じて有り。ただし、出家の二衆は、多く道を修し

ぜん え あやま しょうか おも じょうまん お

禪を得て、謬つて聖果と謂い、ひとえに上慢を起こす。

ざいぞく きんこう おお がまん お によにん ちあさ

在俗は矜高にして、多く我慢を起こす。女人は智浅くして、

おお じゃへき しょう ふ じけんごか みずか か み

多く邪僻を生ず。『不自見其過（自らその過を見ず）』と

さんしつ こころ おお きず かく とく あ みずか かえり

は、三失、心を覆う。疵を蔵し徳を揚げて、自ら省みる

こと能あたわざれば、これ無慙むざんの人なり。もし自ら過みを見れば、
これ有差うしゆうの僧そうなり。

記きの四しに云いわく『疵きずを蔵かくす』等とうとは、『三失さんしつ』を積しやくす

るなり。『疵きずを蔵かくし徳とくを揚あぐ』は、『上慢じようまん』を積しやくす。『自らみずか

省かえりみること能あたわず』は、『我慢がまん』を積しやくす。『無慙むざんの人』と

は、『不信ふしん』を積しやくす。もし自ら過みずかを見とがば、この三失さんしつ無し。

いまだ果かを証しょうせずといえども、しばらく『有差うしゆう』と名なづく。

御義口伝おんぎくでんに云いわく、この本末ほんまつの積しやくの意こころは、五千ごせんの

上慢じようまんを積しやくするなり。委くわしくは本末ほんまつを見みるべきなり。

「比丘・比丘尼」の二人は、出家なり。共に「増上慢」と

名づく。「疵を蔵し徳を揚ぐ」をもつて本とせり。「優婆塞」

は男なり、「我慢」をもつて本とせり。「優婆夷」は女人な

り、「無慙」をもつて本とせり。この四衆は、今、日本国に

盛んなり。経には「其数有五千（その数五千有り）」とあ

れども、日本国に四十九億九万四千八百二十八人と見えた

り。在世には、五千人、仏の座を立てり。今、末法にては、

日本国の一切衆生、ことごとく日蓮が所座を立てり。

「比丘・比丘尼の増上慢」とは、道隆・良観等にあらず

かまくらじゅう びくにとう

や、また鎌倉中の比丘尼等にあらずや。「優婆塞」とは

さいみょうじ うばい じょうげ によん

最明寺、「優婆夷」とは上下の女人にあらずや。あえて我が

とが し いま にちれんとう たぐ ひぼう

過を知るべからざるなり。今、日蓮等の類いを誹謗して

あくみょう た ふ じけんごか もの だいほうぼう

悪名を立つ。あに「不自見其過」の者にあらずや。大謗法

ざいにん ほつけ みぎ た うたが

の罪人なり。法華の御座を立つこと疑いなきものなり。し

にちれん あ

かりといえども、日蓮に値うこと、これしかしながら

らいぶつじたい ほとけ らい しりぞ

「礼仏而退（仏を礼して退きぬ）」の義なり。この

らいぶつじたい きょうせん ぎ まった しんげ らいたい

「礼仏而退」は軽賤の義なり。全く信解の礼退にあらざ

るなり。これらの衆は「於戒有欠漏（戒において欠漏有り）」

しゆ おかいうけつろ かい けつろあ

もの 者なり。もんぐ 文句の四に云わく「於戒有欠漏」とは、律儀に
とがあ けつ な じょうぐ どうぐ とがあ ろう
失有るをば『欠』と名づけ、定共・道共に失有るをば『漏』
と名づく。』
な

ごせん じょうまん われ そな ごじゆう
この五千の上慢とは、我らの具うるところの五住の
ぼんのう いま ほけきよう あ たてまつ とき まんそくほうかい ひら
煩惱なり。今、法華経に値い奉る時、慢即法界と開いて

らいぶつにたい ぶつ いとくこ ほとけ いとく ゆえ さ
「礼仏而退」するを、「仏威徳故去（仏の威徳の故に去り
ぬ）」と云うなり。「仏」とは、我らの具うるところの仏界
いとく なんみようほうれんげきよう こここ ぶつかい
なり。「威徳」とは、南無妙法蓮華経なり。「故去」とは、「而去

ふこ こころ さい さい ぶんぽん
不去（しかして去って去らず）」の意なり。普賢品の

さらいにこらいなさい
「作礼而去（礼を作して去りにき）」、これを思おもうべきなり。

また云いわく、五千の退座ごせん たいざということ、法華の意ほつけ ところは

ふたいぎ 退ゆえ座なり。その故しよほうじつそうは、諸法実相・略開三頭一りやくかいさんけんいちの開悟かいごなり。

さてその時ときは、「我慢がまん」「増上慢ぞうじょうまん」とは、慢即法界まんそくほうかいと開ひらいて

本有ほんぬ まんきの慢機ごしゆう ほんのうなり。「其数有五千われ ところ」とは、我われらが五住ごじゆう ほんのうの煩惱ぼんのうな

り。もしまた五住ごじゆう ほんのうの煩惱ぼんのう無なしと云いわば、法華ほっけの意ところを失うしない

たり。五住ごじゆう ほんのうの煩惱ぼんのう有ありながら本有ほんぬ じょうじゆう常住いぞと云いう時とき、「其数ごしゆ

有五千うごせん」と説とくなり。断惑だんわくに取り合あわず、そのまま本有ほんぬの

妙法みょうほうの五住ごじゆうと見みれば、「不自見其過ふじけんごか」と云いうなり。

おかいうけつろ

しょうじよう

ごんきよう

たいじしゆびよう

さて、「於戒有欠漏」とは、小乗・権教の対治衆病

かいほう

ぜみようじかい

かい たも

な

の戒法にてはなきなり。「是名持戒（これを戒を持つと名づ

みようほう

ゆえ

けつろ

とうたい

ぜみようじかい

く）の妙法なり。故に欠漏の当体そのまま「是名持戒」

たい

けつろ

ほんぬ

だん

ゆえ

ご

の体なり。しかるに、欠漏をそのまま本有と談ずる故に、「護

しゃくごけし

けし

まも

お

と

もと

惜其瑕疵（その瑕疵を護り惜しむ）」とは説くなり。元よ

いちじよう

みようかい

いちじんごんほうかい

いちねんへんじつほう

いちじん

り一乗の妙戒なれば、「二塵含法界、一念遍十方（二塵に

ほうかい

ふく

いちねん

じつほう

あまね

ゆえ

ぜしようち いしゆつ

法界を含み、一念は十方に遍し）」の故に、「是小智已出

しょうち

い

い

そつじう

じんじん

（この小智はすでに出でぬ）」と云うなり。「糟糠」とは、塵々

ほうぼう

ほんがく

さんじん

ゆえ

ふくとく

とうたい

ほんがくむさ

法々、本覚の三身なり。故にすくなき福德の当体も本覚無作

かくたい
の覚体なり。

ふかんじゆぜほう

ほうう

た

りやくかい

「不堪受是法（この法を受くるに堪えず）」とは、略開

しよほうじつそう

ほつたい

ひら

かいご

の諸法実相の法体を聞いて、そのまま開悟するなり。さて、

しんじそんじや

どんこん

ふんべつ

げせつ

こ

こうかい

身子尊者、鈍根のために分別して解説したまえと請う広開

さん ほうもん

ふかんじゆぜほう

と

三の法門をば、「不堪受是法」と説く。

ほつけ

じつぎ

かえ

み

みようほう

ほつたい

さて、法華の実義に帰って見れば、妙法の法体はさら

のうじゆ

しよじゆ

わす

ふしぎ

みようほう

ほんぼう

じゆう

に能受・所受を忘るるなり。不思議の妙法なり。本法の重

さう

み

ゆえ

ししゆむししよう

しゆ

えだはな

を悟って見るが故に、「此衆無枝葉（この衆に枝葉無し）」

い

ないししよう

じゆんいちじつそう

じつそうげきようむべつほう

と云うなり。かかる内証は「純一実相、実相外更無別法

じゆんいち じつそう

じつそう ほか

べつ ほうな

(純一の実相にして、実相の外にさらに別の法無し)「な

ゆい しょうじつ

もろもろ しょうじつ

あ

せん

れば、「唯有諸貞実(ただ諸の貞実のみ有り)」なり。詮

しょうじつ

しきしん

みょうほう

ひら

ずるところ、「貞実」とは、色心を妙法と開くことなり。

いま にちれんとう

たぐ

なんみょうほうれんげきょう

とな

たてまつ

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉るところを、

ゆい しょうじつ

と

しょう

しょうほうじつそう

ほとけ

「唯有諸貞実」と説くなり。「諸」とは、諸法実相の仏な

しょう

じつかい

しょうじつ

じつかい

しきしん

みょうほう

り。「諸」は、十界なり。「貞実」は、十界の色心を妙法と

い

こんきょう

かぎ

ゆえ

ゆい

い

云うなり。今経に限る故に、「唯」と云うなり。

ごせん

じょうまん

ほか

まつた

ほけきょう

な

ごせん

まんじん

五千の上慢の外、全く法華経これ無し。五千の慢人と

われ

ごだい

ごだい

すなわ

みょうほうれんげきょう

ごせん

は、我らが五大なり。五大は即ち妙法蓮華経なり。五千の

じようまん

がんぽん

むみよう

ゆえ

らいぶつにたい

上慢は、元品の無明なり。故に「礼仏而退」なり。これは

くしき

はっしき

ろくしき

くだ

ぶん

るてんもん

どうだん

ぶつ

い

九識・八識・六識と下る分なり。流転門の談道なり。「仏威

とくこ

かんめつもん

い

とく

徳故去」とは、還滅門なり。しかれば、「威徳」とは、

なんみようほうれんげきよう

ほんめいほんご

ぜんたい

よ

よ

南無妙法蓮華経なり。本迷本悟の全体なり。能く能くこれ

あん

うんぬん

を案ずべし云々。

だいろく

によがとうむい

によがしやくしよがん

わ

ひと

こと

第六 「如我等無異 如我昔所願（我がごとく等しくして異

わ

むかし

しよがん

こと

なることなからしめん。我が昔の所願のごとき」の事

しよ

い

いん

あ

しん

すす

疏に云わく「因を挙げて信を勧む」。

おんぎくでん

い

が

しやくそん

が

しやくそん

が

じつじようぶつ

おん

われ

御義口伝に云わく、「我」とは釈尊、「我実成仏久遠（我

じつ じようぶつ

くおん

ほとけ

ほんもん

しゃくそん

実に成仏してより久遠なり)の仏なり。この本門の釈尊

われ しゅじよう

にやが

が

じゆうによぜ

すえ

は、我ら衆生のことなり。「如我」の「我」は、十如是の末

しちによぜ

くかい

しゅじよう

はじ

さんによぜ

われ

の七如是なり。九界の衆生は、始めの三如是なり。我ら

しゅじよう おや

ほとけ こ

ふ しいつたい

ほんまつくきようとう

衆生は親なり、仏は子なり。父子一体にして、本末究竟等

なり。

われ

じゆりようほん

むさ

さんじん

と

いま

この我らを寿量品に無作の三身と説きたるなり。今、

にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

もの

日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱うる者これなり。

おも

しゃくそん

そうべつ

にがん

ここをもつてこれを思うに、釈尊の総別の二願とは、

われ

しゅじよう

た

ねがい

ゆえ

我ら衆生のために立てたもうところの願なり。この故に、

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

にほんこく

いつさいしゅじよう

われ

南無妙法蓮華經と唱え奉って、日本国の一切衆生を我

じようぶつ

ねがい

成仏せしめんというところの願、しかしながら

によがしやくしよがん

つい いんどう

こしん

わごう

「如我昔所願」なり。終に引導して己身と和合するを、

こんじゃくいまんぞく

いま

すで

まんぞく

こころう

「今者已満足（今、已に満足しぬ）」と意得べきなり。この

こんじゃくいまんぞく

い

じ

よ

「今者已満足」の「已」の字、「すでに」と読むなり。いず

さ

と

しよしやく

れのところを指して「すでに」とは説けるや。およそ所釈

こころ

しよほうじつそう

もん

さ

い

の心は、「諸法実相」の文を指して「すでに」とは云えり。

とうけ

りゆうぎ

なんみようほうれんげきよう

しかりといえども、当家の立義としては、南無妙法蓮華經を

さ

こんじゃいまんぞく

と

こころう

指して「今者已満足」と説かれたりと意得べきなり。

されば、この「如我等無異」の文、肝要なり。「如我昔所願」

ほんいんみよう によがとうむい ほんがみよう みようかく しゃくそん われ

は本因妙、「如我等無異」は本果妙なり。妙覚の釈尊は我

けつにく いんが くだく こつざい しゃく

らが血肉なり。因果の功德は骨髓にあらずや。釈には「因を

あ しん すす いん あ すなわ ほんが いま

挙げて信を勧む」と。「因を挙ぐ」は、即ち本果なり。今、

にちれん とな なんみようほうれんげきよう まつぼういちまんねん

日蓮が唱うるるところの南無妙法蓮華経は、末法一万年の

しゆじよう じようぶつ こんじゃいまんぞく

衆生まで成仏せしむるなり。あに「今者已満足」にあらず

い けんちようごねんしがつにじゆうはちにち はじ とな い

や。「已」とは、建長五年四月二十八日に初めて唱え出だ

だいもく き い ころう みようほう

すところの題目を指して、「已」と意得べきなり。妙法の

だいろうやく いっさいしゆじよう むみよう たいびよう じ うたが

大良薬をもつて一切衆生の無明の大病を治せんこと疑

いなきなり。これを思い遣る時んば満足なり。「満足」とは、

じようぶつ

成仏ということなり。釈に云わく「円は円融円満に名づ

とん とんごくとんそく な

け、頓は頓極頓足に名づく」、これを思うべし云々。

だいしち

おしよぼさつちゆう

しようじきしやほうべん

もろもろ

ぼさつ

なか

第七 「於諸菩薩中 正直捨方便（諸の菩薩の中におい

しようじき ほうべん す

こと

て、正直に方便を捨つ」の事

もんぐ し い

おしよぼさつちゆう

しも

さんく

まさ

文句の四に云わく『於諸菩薩中』より下の三句は、正

じつ あらわ

じじよう

こく

じき

つう

しく実を顕すなり。五乗はこれ曲にして直にあらず。通・

べつ

へん ぼう

しよう

いま

みなか

へん

こく

す

別は偏・傍にして正にあらず。今、皆彼の偏・曲を捨てて、

しようじき

いちじゆう

と

ただ正直の一道のみを説く。

おんぎくでん い 御義口伝に云わく、この「菩薩」とは、九界の第九に

こ ぼさつ 居したる菩薩なり。また一切衆生を「菩薩」と云うなり。

いま にちれんとう たぐ 今、日蓮等の類いなり。また諸天善神等までも、これ「菩薩」

しょうじき ぼんのうそくぼだい しょうじそくねはん なり。「正直」とは、煩惱即菩提・生死即涅槃なり。さて、

いちどう なんみようほうれんげきよう いま まっぼう しょうじき 「一道」とは、南無妙法蓮華経なり。今、末法にして「正直

いちどう ひろ もの にちれんとう たぐ の一道」を弘むる者は、日蓮等の類いにあらずや。

だいほち とうらいせ あくにん もんぶつせついちじよう めいわく ふ しんじゆ はほうだ 第八 「当来世悪人 聞仏説一乘 迷惑不信受 破法墮

あくどう とうらいよ あくにん ほとけ いちじよう と き 悪道（当来世の悪人は、仏の一乗を説きたもうを聞いて、

めいわく しんじゆ ほう は あくどう お こと 迷惑して信受せず。法を破して悪道に墮ちん」の事

おんぎくでん い

とうらいせ

まつぼう

あくにん

御義口伝に云わく、「当来世」とは、末法なり。「悪人」

ほうねん

こうぼう

じかく

ちしようとう

ぶつ

にちれんとう

とは、法然・弘法・慈覚・智証等なり。「仏」とは、日蓮等の

たぐ

いちじよう

みようほうれんげきよう

ふしん

ゆえ

類いなり。「一乗」とは、妙法蓮華経なり。「不信」の故に

さんあくどう

お

三悪道に墮つべきなり。

ひゆほんくか だいじ

譬喩品九箇の大事

だいいち

ひゆほん

こと

第一 「譬喩品」の事

もんぐ

ごい

ひ

ひきよう

ゆ

文句の五に云わく『譬』とは、比況なり。『喩』とは、

ぎようくん

だいひや

ぎようちむへん

き

うご

暁訓なり○大悲息まず、巧智無辺なれば、さらに樹を動か

して風を訓え、扇を挙げて月を喩す。

かぜ おし おうぎ あ つき さと
おんぎくでん い だいいひ はは こ おも じひ

御義口伝に云わく、「大悲」とは、母の子を思う慈悲の

いま にちれんとう じひ しょうあんい かれ

ごとし。今、日蓮等の慈悲なり。章安云わく「彼がために

あく のぞ すなわ かれ おや ぎょうち

悪を除くは、即ちこれ彼が親なり。「巧智」とは、

なんみょうほうれんげきよう しょうむとくどう りゆうぎ ぎょうおなんもんどう

南無妙法蓮華経なり。諸宗無得道の立義なり。「巧於難問答

なんもんどう たく ころ

(難問答に巧みなり)の意なり。「さらに」とは、在世に

つ めつじ こころう き うじ

次いで滅後のことと意得べきなり。「樹を動かす」とは、

ぼんのう かぜ おし すなわ ぼだい おうぎ あ

煩惱なり。「風を訓う」とは、即ち菩提なり。「扇を挙ぐ」

しょうじ つき さと すなわ ねはん いま にちれん

とは、生死なり。「月を喩す」とは、即ち涅槃なり。今、日蓮

とう たぐ なんみょうほうれんげきょう とな たてまつ とき だいびやくごしや の
等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る時、大白牛車に乗つ

て「直至道場（直ちに道場に至る）」するなり。
じきしどうじよう ただ どうじよう いた

記の五に云わく『樹』と『扇』と、『風』と『月』と
き ご い き おうぎ かぜ つき

は、ただ円の教と理とのみなり。また云わく「法説の実相
えん きよう り い ほっせつ じっそう

は、何ぞ隠れ、何ぞ顕れん。長風息むことなく、空月常に
なん かく なん あらわ ながかぜや くうげつつね

懸かれり。この釈これを思うべし。「隠る」とは、死なり。
か しやく おも かく し

「顕る」とは、生なり。「長風」とは、我らが息なり。「空月」
あらわ しょう ながかぜ われ いき くうげつ

とは、心月なり。法華の生死とは、三世常恒にして隠・顕
しんげつ ほっけ しょうじ さんぜじようごう おん けん

これ無し。我らが息風とは、吐くところの言語なり。これ
な われ そくふう は ごんご

なんみようほうれんげきよう

いっしんほうかい

かくげつ

じようじゆう

か

南無妙法蓮華経なり。一心法界の覚月、常住にして懸か

れり。これを指して「ただ円の教と理とのみ」と釈せり。

えん

ほうかい

きよう

さんぜんられつ

り

「円」とは、法界なり。「教」とは、三千羅列なり。「理」

じっそう

いちり

うんぬん

とは、実相の一理なり云々。

だいに

そくきがっしよう

すなわ

た

がっしよう

こと

第二 「即起合掌（即ち起つて合掌す）」の事

もんぐ

ご

い

げぎ

の

そくきがっしよう

み

文句の五に云わく「外儀を叙ぶれば、『即起合掌』は身

りようげ

な

むかし

ごんじつ

に

たなごころ

あ

の領解と名づく。昔は権実を二となす。掌の合わざる

いま

ごんそくじつ

きと

ふた

たなごころ

あ

がごとし。今は権即実と解る。二つの掌の合うがごとし。

こうぶつ

ほとけ

む

むかし

ごん

ぶつじん

『向仏（仏に向かう）』とは、昔は、権も仏因にあらず、

じつ ぶつか
実も仏果にあらず。今は、権即実と解つて大円因を成ず。

いん かなら か おもむ
因は必ず果に趣く。故に『合掌向仏』と言う。

おんぎくでん い
御義口伝に云わく、「合掌」とは、法華經の異名なり。

こうぶつ
「向仏」とは、法華經に値い奉るを云うなり。「合掌」は

しきほう
色法なり、「向仏」は心法なり。色心の二法を妙法と開悟す

かんぎゆやく と
るを、「歡喜踊躍」と説くなり。

がつしよう
「合掌」において、また二つの意これ有り。「合」と

みょう
は妙なり、「掌」とは法なり。また云わく、「合」とは

みょうほうれんげきょう
妙法蓮華經なり、「掌」とは二十八品なり。また云わく、

ごう

ぶっかい

しやう

きゆうかい

きゆうかい

ごん

ぶっかい

「合」とは仏界なり、「掌」とは九界なり。九界は権、仏界

じつ

みようらくだいしい

きゆうかい

ごん

ぶっかい

じつ

は実なり。妙楽大師云わく「九界を権となし、仏界を実と

じつかい

がっしやう

にじ

おき

しんらさんぜん

なす」。十界ことごとく「合掌」の二字に納まつて、森羅三千

しよほう

がっしやう

の諸法は合掌にあらざることなきなり。

そう

さんしゆ

ほっけ

がっしやう

あ

いま

みようほうれんげきやう

総じて、三種の法華の合掌これ有り。今の妙法蓮華経

さんしゆ

ほっけみぶん

けんぜつほっけ

は、三種の法華未分なり。しかりといえども、まず顕説法華

しやうい

でんぎやうだいし

おいちぶつじやう

を正意となすなり。これによつて伝教大師は『於一仏乗

いちぶつじやう

こんぽんほっけ

おし

みようほう

(一仏乗において)』とは、根本法華の教えなり○妙法の

ほか

いっく

よきやう

な

こうぶつ

いちいちもんもん

外、さらに一句の余経すら無し」と。「向仏」とは、一々文々

みなこんじき ぶつたい たてまつ

がつしよう

は皆金色の仏体なりと向かい 奉ることなり。「合掌」の

にじ ほうかい つ じごく がき ここ とうたい

二字に法界を尽くしたるなり。地獄・餓鬼の己々の当体、

ほか さんぜん しょうほう がつしようこうぶつ

その外、三千の諸法、そのまま「合掌向仏」なり。

ほうかい しゃりほつ しゃりほつ

しかるあいだ、法界ことごとく「舍利弗」なり。「舍利弗」

ほけきよう しゃ かうたい り けたい ほつ

とは法華経なり。「舎」とは空諦、「利」とは仮諦、「弗」と

ちゆうどう えんゆうさんたい みようほう しゃりほつ ぼんご

は中道なり。円融三諦の妙法なり。「舍利弗」とは梵語、

しんじ い しんじ じっかい しきしん

ここには「身子」と云う。「身子」とは、十界の色心なり。

しん じっかい しきほう し じっかい しんぼう いま にちれん

「身」とは十界の色法、「子」とは十界の心法なり。今、日蓮

とう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの

等の類い、南無妙法蓮華経と唱え 奉る者は、ことごとく

しやりほつ

しやりほつ

すなわ

しやかによらい

しやかによらい

すなわ

「舍利弗」なり。舍利弗は即ち釈迦如来、釈迦如来は即ち

ほげきよう ほげきよう

すなわ

われ

しきしん

にほう

しんじ

法華経、法華経は即ち我らが色心の二法なり。よつて、身子

ほん

とき

もんしほうおん

ほうおん

き

りようげ

はこの品の時、「聞此法音（この法音を聞く）」と領解せり。

もん

みようじそく

ほうおん

しよほう

おん

しよほう

おん

「聞」とは名字即、「法音」とは諸法の音なり。諸法の音と

みようほう

もんぐ

しやく

とき

ちようふうや

は妙法なり。ここをもつて文句に釈する時、「長風息む

ちようふう

ほうかい

おんじよう

おんじよう

ことなし」と。「長風」とは、法界の音声なり。この音声

しんげほん

いぶつどうしよう

りよういつさいもん

ぶつどう

こえ

を信解品に「以仏道声 令一切聞（仏道の声をもつて、

いつさい

き

い

いつさい

ほうかい

しゅじよう

一切をして聞かしめん」と云えり。「一切」は、法界の衆生

おんじよう

なんみようほうれんげきよう

のことなり。この音声とは、南無妙法蓮華経なり。

だいさん

しん いたいねん

けとくあんのん

しん いたいねん

こころよ

あんのん

第三

「身意泰然、

快得安穩

（身意泰然として、

快く安穩

なることを得たり）」の事

もんぐ

ごい

じゅうぶつ

しん

よろこ

けつ

文句の五に云わく

『従仏』は、

これ身の喜びを結す

もんぼう

くよろこ

けつ

だんしよぎ け

るなり。『聞法』は、これ口の喜びを結するなり。『断諸疑悔

もろもろ

ぎけ だん

い よろこ

けつ

（諸の疑悔を断ず）は、これ意の喜びを結するなり。

おんぎくでん

い

しん いたいねん

ほんのうそくぼだい

しやうじ

御義口伝に云わく、

「身意泰然」とは、

煩惱即菩提・生死

そくねはん

しん

しやうじそくねはん

い

ほんのう

即涅槃なり。「身」とは、

生死即涅槃なり。「意」とは、

煩惱

そくぼだい

じゅうぶつ

にちれん

したが

たぐ

とう

即菩提なり。「従仏」とは、日蓮に従う類い等のことなり。

く よろこ

なんみやうほうれんげきやう

い

よろこ

「口の喜び」とは、南無妙法蓮華経なり。「意の喜び」と

むみよう わくしような ゆえ

は、無明の惑障無きが故なり。ここをもつてこれを思うに、

もん いっしんさんがん いちねんさんぜん われ そくしんじょうぶつ ほうべん

この文は一心三観・一念三千、我らが即身成仏なり。方便

おし たいねん あんのん

の教えは「泰然」にあらず、「安穩」にあらざるなり。「行於

けんきよう たるなんこ けんきよう い るなんおお ゆえ

険逕、多留難故（険逕を行くに、留難多きが故なり）」の

おし

教えなり。

だいし とくぶつぼうぶん ぶつぼう ぶん え こと

第四 「得仏法分（仏法の分を得たり）」の事

おんぎくでん い ぶつぼうぶん しよじゆう いちぶん ちゆうどう

御義口伝に云わく、「仏法分」とは、初住の一分の中道

い しやくもんしよじゆう ほんもんにじゆういじよう

を云うなり。「迹門初住、本門二住已上」と云うことは、

おん じ お ぶん せん ぶん

この「分」の字より起こるなり。詮ずるところ、この「分」

いちじ いちねんさんぜん ほうもん ゆえ じごく じごく ぶん

の一字は一念三千の法門なり。その故は、地獄は地獄の分に

ぶつか しょう ないし さんぜん しょうごここ とうたい ぶん ぶつか

て仏果を証し、乃至、三千の諸法己々の当体の分にて仏果

しょう しんじつ われ そくしんじょうぶつ いま にちれんとう

を証したるなり。真実の我らが即身成仏なり。今、日蓮等

たぐ なんみようほうれんげきよう とな ぶん ぶつか しょう

の類い、南無妙法蓮華経と唱うる分にて仏果を証したるな

ぶん ごんきよう むとくどう ほけきよう じょうぶつ わ

り。「分」とは、権教は無得道、法華経は成仏と分かつと

こころ

意得べきなり。

い ぶん ほんもんじゆりようほん こころ ここ

また云わく、「分」とは、本門寿量品の意なり。己々

ほんぶん ぶん そう しゃくもんしょうじゆうぶんしょう い きようそう

本分の分なり。総じて、迹門初住分証と云うは、教相な

しんじつ しょうじゆうぶんしょう いっきよう きわ

り。真実は初住分証のところにて一経は極まりたるなり。

だいご に じ えてん おの えてん こと
第五 「而自廻転（しかして自ずから廻転す）」の事

き ご い だいろん きよう に じ
記の五に云わく「あるいは大論のごとし。経に『而自

えてん い しんじ き う き ほつしようじねん
廻転』と云うは、身子の記を得るを聞いて、法性自然にし

てん いんが えしよう じた てん あらわ
て転じ、因果・依正・自他ことごとく転ずるを表す」。

おんぎくでん い そうもくじようぶつ しようもん に じ えてん
御義口伝に云わく、草木成仏の証文に「而自廻転」

もん い いちねんさんぜん えしよたいいち じようぶつ と
の文を出だすなり。これ一念三千の依正体一の成仏を説き

きえあ そうもくじようぶつ しようにん にちれんとう たぐ
極めたるなり。草木成仏の証人とは、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう と な たてまつ さ えてん だいもく
南無妙法蓮華経と唱え奉るを指すなり。「廻転」とは、題目

ご じ じ われ きようじや き ご しゃく
の五字なり。「自」とは、我ら行者のことなり。記の五の釈、

よよ 能く能くこれを思うべし云々。
おも うんぬん

第六 「一時俱作（一時にともに作す）」の事
だいろく いちじくさ いちじ こと

御義口伝に云わく、「一時」とは、末法の一時なり。「俱作」
おんぎくでん い いちじ まつぽう いちじ くさ

とは、南無妙法蓮華経なり。「俱」とは、「畢竟住一乘」
なんみょうほうれんげきよう ひつきようじゅういちじよう

（畢竟して一乘に住す）なり。今、日蓮等の類いの所作
ひつきよう いちじよう じゅう いま にちれんとう たぐ しよさ

には題目の五字なり。余行を交えざるなり。また云わく、
だいもく ごじ よぎよう まじ い

十界の語言は、一返の題目をともに作したり。これ、あに
じっかい ごごん いっぺん だいもく な

感応にあらざや。
かんのう

第七 「以譬喻得解（譬喻をもつて解することを得ん）」の
だいしち いひゆとくげ ひゆ げ え

事 こと

止観しかんの五ごに云いわく『智者ちしやは譬たとえに因よる』。この意こころ、徴しるし

有あり」。

御義口伝おんぎくでんに云いわく、この文もんをもつて鏡像きやうぞうの円融三諦えんゆうさんたいの

ことつたを伝つたうるなり。総そうじて、鏡像きやうぞうの譬たとえとは、自浮自影じふじようの

鏡かがみのことかがみなり。この鏡かがみとは、一心いつしんの鏡かがみなり。総そうじて、鏡かがみ

について重々じゆうじゆうの相伝そうでんこれ有あり。詮せんずるところ、鏡かがみの能徳のうとく

とは、万像まんぞうを浮うかぶるを本ほんとせり。妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじは、

万像まんぞうを浮うかべて一法いつぽうも残のこる物ものこれ無なし。

また云わく、鏡かがみにおいて五鏡ごかがみこれ有り。妙みょうの鏡かがみに

は法界ほうかいの不思議ふしぎを浮かべ、法ほうの鏡かがみには法界ほうかいの体たいを浮かべ、

蓮れんの鏡かがみには法界ほうかいの果かを浮かべ、華けの鏡かがみには法界ほうかいの因いんを浮

かべ、経きょうの鏡かがみには万法ばんぼうの言語ごんごを浮かべたり。

また云わく、妙みょうの鏡かがみには華嚴けごんを浮かべ、法ほうの鏡かがみには

阿含あごんを浮かべ、蓮れんの鏡かがみには方等ほうどうを浮かべ、華けの鏡かがみには般若はんによ

を浮かべ、経きょうの鏡かがみには法華ほっけを浮かぶるなり。順逆次第じゆんぎやくしだいし

て意得いごころべきなり。我われら衆生しゆじょうの五体ごたい・五輪ごりん、妙法蓮華みょうほうれんげきょう経きょうと浮

かび出いでたるあいだ、宝塔品ほうとうほんをもつて鏡かがみと習ならうなり。信しん・謗ぼう

の浮うかび様よう、能よく能よくこれを案あんずべし。自浮じふ自影じようの鏡かがみとは、

なんみようほうれんげきよう

うんぬん

南無妙法蓮華經これなり云々。

だいはいち

ゆいいういちもん

いちもん

あ

こと

第八 「唯一門（ただ一門のみ有り）」の事

もんぐ

ごい

ゆいいういちもん

かみ

いしゅじゅほうもん

文句の五に云わく『唯一門』とは、上の『以種々法門

せんじおぶつどう

しゅじゅ

ほうもん

ぶつどう

せんじ

たと

宣示於仏道（種々の法門をもつて、仏道を宣示す）を譬う。

もん

ふた

たくもん

しゃもん

たく

しやうじ

『門』にまた二つあり。宅門と車門となり。宅とは、生死な

もん

しゅつよう

みち

ほうべんきよう

せん

しや

り。門とは、出要の路なり。これは方便教の詮なり。車と

だいじよう

ほう

もん

えんぎよう

せん

は、大乘の法なり。門とは、円教の詮なり。』

おんぎくでん

い

いちもん

ほけきよう

しんじん

御義口伝に云わく、「一門」とは、法華經の信心なり。

しゃ

ほけきよう

ご

なんみようほうれんげきよう

「車」とは、法華経なり。「牛」とは、南無妙法蓮華経なり。

たく

ぼんのう

じしんほつしよう

だいち

しようじしようじ

めぐ

「宅」とは、煩惱なり。自身法性の大地を、生死生死と転り

い うんぬん

行くなり云々。

だいく

こんしさんがい

いま

さんがい

とう

こと

第九 「今此三界（今この三界）」等の事

もんぐ

ごい

つぎ

こんしさんがい

しも

だいに

文句の五に云わく「次に『今此三界』より下、第二に

いちぎようはん

かみ

しよけんしよしゆじよう

いしろうろびようしししよしようしや

み

一行半は、上の『所見諸衆生、為生老病死之所烧煮（見

もろもろ

しゆじよう

しろうろびようし

しようしや

るところの諸の衆生は、生老病死の烧煮するところと

じゆ

だいに

み

ひ

たと

がつ

なる)』を頌して、第二の見るところの火の譬えを合す。

ゆいがいちにん

われいちにん

しも

だいさん

はんげ

かみ

『唯我一人（ただ我一人のみ）』より下、第三に半偈は、上

ぶつけん しい べんさぜねん ほとけ みお すなわ

の『仏見此已、便作是念（仏はこれを見已わつて、便ち

ねん な じゆ きやうにゆうかたたく かたく い

この念を作す）を頌して、『驚入火宅（驚いて火宅に入る）』

がっ

を合するなり。』

おんぎくでん い もん いちねんさんぜん もん いちねん

御義口伝に云わく、この文は一念三千の文なり。一念

さんぜん ほうもん しゃくもん しょう おんにせん せけん あ ほんもん

三千の法門は、迹門には生・陰二千の世間を明かし、本門

こくどせけん あ

には国土世間を明かすなり。

い こんしさんがい もん こくどせけん ごちゆう

また云わく、「今此三界」の文は、国土世間なり。「其中

しゆじよう なか しゆじよう もん ごおんせけん にこんししよ

衆生（その中の衆生）」の文は、五陰世間なり。「而今此処

たしよげんなん ゆいがいちにん いま しよ もろもろ げんなんおお

多諸患難 唯我一人（しかるに今この処は、諸の患難多し。

ただ我一人のみ」の文は、衆生世間なり。

われいちにん
もん
しゅじょうせけん

また云わく、「今此三界」は、法身如来なり。「其中衆生

しつぜごし

なか
しゅじょう

こん
しさんがい
ほっしんによらい

ごちゅうしゅじょう

悉是吾子（その中の衆生は、ことごとくこれ吾が子なり）」

ほうしんによらい

にこんししよ
とう

おうじんによらい

は、報身如来なり。「而今此処」等は、応身如来なり。

信解品六箇の大事

だいいち

しんげほん

こと

第一 「信解品」の事

記の六に云わく「正法華には『信楽品』と名づく。そ

ぎつう

ぎょう

げ

およ

いま

りょうげ

の義通ずといえども、『楽』は『解』に及ばず。今、領解を

明あかす。何なにをもつてか『楽ぎょう』と云いわん。

御義口伝おんぎくでんに云いわく、法華一部二十八品の題号だいごうの中に、

「信解しんげ」の題号だいごう、この品ほんにこれ有り。一念三千も「信」の一字

より起おこり、三世の諸仏さんぜの成道しょうどうも「信」の一字より起おこる

なり。この「信」の字、元品がんぽんの無明むみょうを切る利剣りけんなり。その故ゆえ

は、「信」は、「疑うたがいなきを『信』と曰いう」とて、疑惑ぎわくを断破だんぱ

する利剣りけんなり。「解げ」とは、智慧ちえの異名いみょうなり。「信」は価あたいの

ごとく、「解」は宝たからのごとし。三世の諸仏さんぜの智慧しょうぶつをかうは「信」

の一字いちじなり。智慧ちえとは南無妙法蓮華經なんみょうほうれんげきょうなり。「信」は智慧しんの因ちえ

にして名字みょうじ即すくなり。「信」の外ほかに「解」無なく、「解」の外ほかに「信」

無し。「信」の一字いちじをもつて妙覺みょうかくの種子しゆしと定めたり。今いま、日蓮にちれん

等の類たぐい、南無妙法蓮華經なんみょうほうれんげきようと信受しんじゆ・領納りようのうする故ゆえに、「無上宝聚むじようほうじゆ

不求自得ふぐじとく（無上むじようの宝聚ほうじゆは、求めざるに自おのずから得えたり）」の

大宝珠だいほうじゆを得るなり。信しんは智慧ちえの種たねなり、不信ふしんは墮獄だごくの因いんなり。

また云いわく、「信」は、不変真如ふへんしんによの理りなり。その故ゆえは、

「信」は、「一切法いっさいほうは皆みなこれ仏法ぶつぽうなりと知しる」と体達たいだつして、

実相じつそうの一理いちりと信しんずるなり。「解」は、随縁真如ずいえんしんによなり。自受用智じじゆゆうち

を云いうなり。文句もんぐの九くに云いわく「疑うたがいなきを『信』と曰いう。

みょうりよう

もんぐ ろく い

ちゅうこん ひと

明み了りなるを『解』と曰いう。文句もんぐの六ろくに云いわく「中根ちゅうこんの人ひと、

ひゆ と き

はじ ぎわく は

だいじよう しゅどう い

譬喻ひゆを説とくを聞きいて、初はじめて疑惑ぎわくを破はして大乘だいじようの見道しゅどうに入い

ゆえ

な

しん

すす

だいじよう

しゅどう

い

る。故ゆえに名なづけて『信』となす。進すすんで大乘だいじようの修道しゅどうに入い

ゆえ

な

げ

き ろく い

だい

故ゆえに名なづけて『解』となす。記きの六ろくに云いわく「大だいをもつて

のぞ

すなわ

りようじ

わ

にどう

ぞく

これに望のぞむるに、乃すなわち両字りようじを分わかちて、もつて二道にどうに属ぞくす。

うたが

は

ゆえ

しん

すす

い

げ

な

疑うたがいを破はするが故ゆえに『信』なり。進すすんで入いるを『解』と名なづ

しん

にどう

つう

げ

しゅ

あ

ゆえ

しゅどう

く。『信』は二道にどうに通つうじ、『解』はただ修しゅのみに在あり。故ゆえに修道しゅどう

げ

な

い

を『解』と名なづくと云いう」。

だいに

しゃぶじようせい

ちち

す

じようせい

こと

第二 「捨父逃逝 (父を捨てて逃逝す) の事

もんぐ ろく い しゃぶ じょうせい

文句の六に云わく「捨父逃逝」とは、大を退するを

しゃ むみようおの おお じょう い しょうじ

『捨』となし、無明自ずから覆うを『逃』と曰い、生死に

しゅこう せい

趣向するを『逝』となす」。

おんぎくでん い ちち みつ あ

御義口伝に云わく、「父」において三つこれ有り。

ほけきよう しゃくそん にちれん ほけきよう いっさいしゅじよう ちち

法華経・釈尊・日蓮これなり。法華経は一切衆生の父な

ちち そむ ゆえ るてん ほんぶ しゃくそん いっさい

り。この父に背くが故に、流転の凡夫となる。釈尊は一切

しゅじよう ちち ほとけ そむ ゆえ しょうどう めぐ

衆生の父なり。この仏に背くが故に、つぶさに諸道を輪る

いま にちれん にほんこく いっさいしゅじよう ちち しょうあんだいしい

なり。今、日蓮は日本国の一切衆生の父なり。章安大師云

かれ あく のぞ すなわ ちち しゃくそん おや

わく「彼がために悪を除くは、即ちこれ彼が親なり」。「大

かれ だい

たい

だい

なんみやうほうれんげきやう

むみやう

を退するの「大」は、南無妙法蓮華経なり。「無明」とは、

ぎわく

ほうぼう

おの

おお

ほうねん

こうぼう

じかく

疑惑・謗法なり。「自ずから覆う」とは、法然・弘法・慈覚・

ちしよう

どうりゆう

りようかんとう

あくびく

ほうぼう

とが

おお

智証・道隆・良観等の悪比丘、謗法の失をほしいままに覆

いかくすなり。

だいさん

かぶぐこん

ぐこん

こと

第三 「加復窮困（ますますまた窮困す）」の事

もんぐ

ろく

い

しゅつよう

じゅつ

え

ぐ

文句の六に云わく「出要の術を得ざるをまた『窮』

はつく

ひ

や

ゆえ

こん

となし、八苦の火に焼かるるが故に『困』となす。

おんぎくでん

い

しゅつよう

なんみやうほうれんげきやう

御義口伝に云わく、「出要」とは、南無妙法蓮華経な

じゅつ

しんじん

いま

にちれんとう

たぐ

ぐこん

り。「術」とは、信心なり。今、日蓮等の類い、「窮困」を

めんり 免離することは、法華經を受持し奉るが故なり。また云わ
みょうほう 妙法に値い奉る時は、八苦の煩惱の火、自受用報身
あ たてまつ 奉る時は、八苦の煩惱の火、自受用報身
ちか 智火と開覚するなり云々。
かいかく うんぬん

第四 「心懷悔恨（心に悔恨を懷く）」の事

もんぐ 文句の六に云わく『悔』は父に約し、『恨』は子に約す。
ろく い 文句の六に云わく『悔』は父に約し、『恨』は子に約す。
き 記の六に云わく「父にも『悔恨』あり、子にも『悔恨』あ
ろく い 記の六に云わく「父にも『悔恨』あり、子にも『悔恨』あ
り」。

おんぎくでん 御義口伝に云わく、日本国の一切衆生は「子」のごと
い にほんこく いっさいしゆじょう
にちれん 日蓮は「父」のごとし。法華不信の失によって無間大城
ちち ほっけふしん とが むけんだいじょう

に墮ちて、返つて日蓮を恨みん。また日蓮も、音も惜しまず

ほっけす かにれん うら かにれん こえ お

法華を捨つべからずと云うべきものを、靈山にて悔ゆるこ

あ もんぐ ろく い しんえけこん りようぜん く

とこれ有るべきか。文句の六に云わく『心懐悔恨』とは、昔

ねんご きようしよう おし じようせい むかし

勤ろに教詔せず、訓うることなくして、逃逝せしむる

いた く こ おんぎ おも われ うと

ことを致すことを悔い、子の恩義を惟わずして我を疎んじ

た した うら

他に親しむことを恨む」。

だいご むじようほうじゆ ふぐじとく むじよう ほうじゆ もと おの

第五 「無上宝聚 不求自得（無上の宝聚は、求めざるに自

え こと

ずから得たり）」の事

おんぎくでん い むじよう じゆうじゆう しさい げどう

御義口伝に云わく、「無上」に重々の子細あり。外道

ほう たい

さんぞうきよう

むじよう

げどう

ほう

うじよう

の法に対すれば、三蔵教は無上、外道の法は有上なり。ま

さんぞうきよう

うじよう

つうぎよう

むじよう

つうぎよう

うじよう

べつきよう

むじよう

た三蔵教は有上、通教は無上。通教は有上、別教は無上。

べつきよう

うじよう

えんぎよう

むじよう

にぜん

えん

うじよう

ほつけ

えん

別教は有上、円教は無上。また爾前の円は有上、法華の円

むじよう

しゃくもん

えん

うじよう

ほんもん

えん

むじよう

しゃくもん

は無上。また迹門の円は有上、本門の円は無上。また迹門

じゆうさんぽん

うじよう

ほうべんぽん

むじよう

ほんもんじゆうさんぽん

うじよう

十三品は有上、方便品は無上。また本門十三品は有上、

いっぽんにはん

むじよう

てんだいだいし

しよぐ

しかん

むじよう

げん

一品二半は無上。また天台大師の所弘は、止観は無上、玄・

もん に ぶ

うじよう

いま

にちれんとう

たぐ

こころ

むじよう

文二部は有上なり。今、日蓮等の類いの心は、無上とは

なんみようほうれんげきよう

むじよう

なか

ごくむじよう

南無妙法蓮華経、無上の中の極無上なり。

みようほう

さ

むじようほうじゆ

と

この妙法を指して「無上宝聚」と説きたもうなり。

ほうじゆ

さんぜ

しよぶつ

まんぎようまんぜん

しよはらみつ

たから

あつ

「宝聚」とは、三世の諸仏の万行万善・諸波羅蜜の宝を聚

なんみようほうれんげきよう

むじようほうじゆ

しんろう

な

めたる南無妙法蓮華経なり。この無上宝聚を、辛勞も無く

ぎようく

な

いちごん

う

と

しんじん

ふぐじとく

行功も無く、一言に受け取る信心なり。「不求自得」とは、

じ

じ

じっかい

じっかいおのおのう

しよほう

これなり。「自」の字は十界なり。十界各々得るなり。諸法

じっそう

もん

みようかく

しやくそん

わ

実相これなり。しかるあいだ、この文、妙覚の釈尊は我ら

しゆじよう

こつにく

よ

よ

あん

うんぬん

衆生の骨肉なり。能く能くこれを案ずべし云々。

だいろく

せそんだいおん

せそん

だいおん

こと

第六 「世尊大恩（世尊は大恩まします）」の事

おんぎくでん

い

せそん

しやくそん

だいおん

御義口伝に云わく、「世尊」とは釈尊、「大恩」とは

なんみようほうれんげきよう

しやくそん

だいおん

ほう

おも

南無妙法蓮華経なり。釈尊の大恩を報ぜんと思わば、

ほけきよう じゆじ

すなわ しゃくそん ごおん ほう

法華經を受持すべきものなり。これ即ち釈尊の御恩を報

たてまつ

だいおん だいもく

つぎしも

いけうじ

じ奉るなり。大恩を題目ということは、次下に「以希有事

けう こと

と けうじ

だいもく

(希有の事をもつて)」と説く。「希有事」とは、題目なり。

だいおん

みようほうれんげきよう

しじゅうよねん

あいだひ

たま

のち

この大恩の妙法蓮華經を四十余年の間秘し給いて、後

はちかねん

だいおん

ひら

もんぐ

いち

い

ほうおう

八箇年に大恩を開きたもうなり。文句の一に云わく「法王、

うん

ひら

うん

だいおん

みようほうれんげきよう

うんぬん

いま

運を啓く。「運」とは、大恩の妙法蓮華經なり云々。今、

にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

にほんこく

日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉って、日本国の

いつさいしゆじよう

たす

おも

せそんだいおん

一切衆生を助けんと思は、あに「世尊大恩」にあらずや。

しょうあんだいし

じっしゆ

おん

あ

だいいち

じひ

章安大師、十種の恩を挙げたりしなり。第一には慈悲

もつ ず おん だいに さいしよ げしゆ おん だいさん
もて物に逗する恩、第二には最初に下種する恩、第三には
ちゆうげん ずいちく おん だいし とく かく つたな しめ おん だいご
中間に随逐する恩、第四には徳を隠し拙きを示す恩、第五
ろくおん しよう ほどこ おん だいろく しよう は だい した
には鹿苑に小を施す恩、第六には小を恥じ大を慕わしむ
おん だいしち けごう りようち おん だいはち ふ しけつじよう
る恩、第七には家業を領知せしむる恩、第八には父子決定
おん だいく こころよ あんのん え おん だいじゆう かえ
の恩、第九には快く安穩を得しむる恩、第十には還つて
たり おん じゆうおん すなわ え ざ しつ
もつて他を利する恩なり。この十恩は即ち衣・座・室の
さんき うんぬん
三軌なり云々。

き ろく い しゆくみよう さ
記の六に云わく「宿萌やや割けて、なおいまだ敷栄か
ちようおん おん なに よ ほう せい
ず。長遠の恩、何に由つてか報ずべき」。また云わく「注家
ちゆうけ

はただ『物として施を天地に答えず、子として生を父母に

謝せず。感報ここに亡ざるをもつてなり』とのみ云えり。

輔正記の六に云わく『物として施を天地に答えず』とは、

謂わく、物は天地に由つて生ずといえども、天地の沢を報

ぜんと云わず。子もまたかくのごとし。記の六に云わく「い

わんやまた、ただ我が報をして亡ぜしむることのみに縁る

をや。この恩は報じ回し。輔正記に云わく『ただ我が報を

して亡ぜしむることのみに縁る』とは、意に云わく、ただ

如来の声聞等をして報を亡ざるの理を得しむることのみ

よ
に縁ると。理は謂わく一大涅槃なり。

おんぎくでん

い

じゆうじゆう

しよしやく

あ

御義口伝に云わく、かくのごとく重々の所積これ有

せん

なんみようほうれんげきよう

げしゆ

りといえども、詮ずるところ、南無妙法蓮華経の下種なり。

げしゆ

ゆえ

かげ

かたち

したが

いま

にちれん

下種の故に影の形に随うがごとくしたもうなり。今、日蓮

みようほうれんげきよう

にほんこく

いつさいしゆじようとう

もかくのごときなり。妙法蓮華経を日本国の一切衆生等

あた

さず

しやくそん

じゆうおん

に与え授くるは、あに釈尊の十恩にあらずや。

じゆうおん

すなわ

え

ざしつ

さんき

だいいち

だいに

「十恩は即ち衣・座・室の三軌なり」とは、第一・第二・

だいさん

だいいいしつ

だいい

しつ

ごおん

だいいし

第三は「大慈為室（大慈を室となす）」の御恩なり。第四・

だいが

だいろく

だいいち

にゆうわにんにくえ

にゆうわにんにく

ころも

おん

第五・第六・第七は「柔和忍辱衣（柔和忍辱の衣）」の恩な

り。第八・第九・第十は「諸法空為座（諸法空を座となす）」
の恩なり。第六の小を恥じ大を慕わしむる恩を、記の六に
云わく「故に、頓の後に於いて、便ち小化を垂れ、弾斥淘汰
し、槌砧鍛錬す」。

やくそうゆほんごか だいじ
薬草喻品五箇の大事

だいいち やくそうゆほん こと
第一 「薬草喻品」の事

記の七に云わく「無始の性徳は地のごとく、大乘の
心を発すは種のごとし。一乗の心を発すは草木の芽茎の

ごとし。今、初住に入るは、仏乗の芽茎等を成ずるがごとし。

御義口伝に云わく、法華の心を信ずるは種なり。諸法

実相の内証に入れば仏果を成ずるなり。「薬」とは、九界

の衆生の心法なり。その故は、権教の心は毒草なり。法華

に値いぬれば、三毒の煩惱の心地を三身果満の種なりと

開覚するを、「薬」とは云うなり。今、日蓮等の類い、妙法

の「薬」を煩惱の「草」に受くるなり。煩惱即菩提・生死即

涅槃と覺らしむるを、「喩」とは云うなり。釈に云わく『喩』

とは、ぎょうくん 暁訓なり。やくそうゆ 「薬草喻」とは、われ 我ら行者のぎょうじや ことなり。

第二 この品は述成段なる事

おんぎくでん

い

じゆつ

かしよう

じよう

御義口伝に云わく、「述」とは迦葉なり、「成」とは

しゃくそん

じゆつじよう

にじ

かしよう

しゃくそん いっち

ぎ

釈尊なり。「述成」の二字は、迦葉・釈尊一致する義な

せん

じゆつ

しよけ

りようげ

じよう

ほとけ

いんか

り。詮ずるところ、「述」は所化の領解、「成」は仏の印可

いま にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

りよう

じゆつ

なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と領するは「述」

にちれん

さんたん

じよう

われ

そくしんじようぶつ

と

なり、日蓮が讚嘆するは「成」なり。我らが即身成仏を説

きわ

ほん

じゆつ

じよう

いっちふけい

じゆつじよう

ふに

き極めたる品なり。述・成の一致符契するは、述成不二

そくしんじようぶつ

じゆつじよう

ほうかいさんぜん

かいじようぶつどう

の即身成仏なり。この述成は、法界三千の皆成仏道の

じゆつじよう

述成なり。

だいさん

すいちじしよしよう

いちうしよにん

いちじ

しよしよう

いちう

しよにん

第三

「雖一地所生、一雨所潤（一地の所生、一雨の所潤

とう こと

なりといえども）等の事

おんぎくでん

い

ずいえん

ふへん

お

もん

御義口伝に云わく、随縁・不変の起ころの文な

みようらくだいしい

ずいえん

ふへん

せつ

だいきよう

い

ぼくせき

り。妙楽大師云わく「随縁・不変の説は大教より出で、木石

むしん

ことば

しようしゆう

しよう

だいきよう

いつきよう

無心の言は小宗より生ず。この「大教」とは、一経

そうたい

すいちじしよしよう

とう

じゆうしちじ

さ

の総体にあらず、この「雖一地所生」等の十七字を指すな

り。

いちじしよしよう

いちうしよにん

むしやべつひ

にしよそうもくかくうしやべつ

「一地所生、一雨所潤」は無差別譬、「而諸草木各有差別

もろもろ そうもく おのおのさべつあ うしやべつひ む

(しかも諸の草木に各差別有り)は有差別譬なり。無

しやべつひ ゆえ みよう うしやべつひ ゆえ ほう うんぬん いま にちれん

差別譬の故に妙なり。有差別譬の故に法なり云々。今、日蓮

とう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ うしや お

等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉るは、有差を置くな

にじゆうはつぽん うしやべつ みようほう ごじ むしやべつ

り。二十八品は有差別なり。妙法の五字は無差別なり。

いちじ しやくもん だいぢ いちう ほんもん

「一地」とは、迹門の大地なり。「二雨」とは、本門の

ぎてん いちじ じゆういん しか いちう じゆうかこういん

義天なり。「一地」とは従因至果、「二雨」とは従果向因。

まつぼう いた じゆうかこういん いちう ぐつう いちう

末法に至って従果向因の「二雨」を弘通するなり。「二雨」

だいもく よぎよう まじ じよほん とき うだいほうう

とは、題目に余行を交えざるなり。序品の時は「雨大法雨

だいほう あめ ふ と ほん とき いちうしよにん

(大法の雨を雨らす)と説き、この品の時は「二雨所潤」

と 説けり。二雨所潤は、序品の「雨大法雨」を重ねて仏

と 説きたもうなり。「二地」とは、五字の中の「経」の一字な

り。「二雨」とは、五字の中の「妙」の一字なり。「法蓮華」

の三字は、三千・万法、中にも草木なり。三乗・五乗・七

方便・九法界なり云々。

第四 「破有法王 出現世間（有を破する法王は、世間に

出現す）」の事

御義口伝に云わく、「有」とは、謗法の者なり。「破」

とは、折伏なり。「法王」とは、法華経の行者なり。「世間」

にほんこく

とは、日本国なり。また云わく、「破」は空、「有」は仮、「法王」

ちゅうどう

は中道なり。されば、この文をば釈迦如来の種子と伝うる

そう

さんぜ

しよぶつ

よ

い

もん

よ

なり。総じて、三世の諸仏の世に出ずるは、この文に依る

う

さんがいにじゅうごう

は

うしゅう

は

なり。「有」とは、三界二十五有なり。「破」とは、有執を破

ほうおう

じっかい

しゅじよう

しんぼう

おう

するなり。「法王」とは、十界の衆生の心法なり。「王」と

しんぼう

い

しよほうじつそう

ひら

はうほうおう

は、心法を云うなり。諸法実相と開くを、「破有法王」とは

い

いま

にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

云うなり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る

ほうぼう

うしゅう

だん

しゃかほうおう

な

は、謗法の有執を断じて釈迦法王と成るといふことなり。

はう

にじ

しゃかによらい

しゅし

い

「破有」の二字をもつて、釈迦如来の種子とは云うなり。

また云いわく、「有う」と云いうは、我われらが煩惱ぼんのう・生死しやうじなり。

この煩惱ぼんのう・生死しやうじを捨すてて、別べつに菩提ぼだい・涅槃ねはん有ありと云いうは、

権教ごんきやう・権門ごんもんの心こころなり。今經こんきやうの心こころは、煩惱ぼんのう・生死しやうじをその

まま置おいて菩提ぼだい・涅槃ねはんと開ひらくところを「破は」と云いうなり。「有う」

とは煩惱ぼんのう、「破は」とは南無妙法蓮華經なんみやうほうれんげきやうなり。「有う」は所破しよはな

り、「破は」は能破のうはなり。能破のうは・所破しよは共に実相じつそうの一理いちりなり。序品じよほん

の時は「尽諸有結じんしやうけつ（諸もろもろの有結うけつを尽つくして）」と説とき、この

品ほんには「破有法王はうほうおう」と説とき、譬喻品ひゆほんの時は「皆是我有かいぜがう（皆みなこ

れ我わが有うなり）」と宣のべたり云々うんぬん。

だいご がかんいつさい ふかいびようどう むうひし あいぞうししん がむ

第五 「我観一切 普皆平等 無有彼此 愛憎之心 我無

とんじやく やくむげんげ われ いったい み みなびようどう

貪著 亦無限礙（我は一切を觀ること、あまねく皆平等に

ひし あいぞう こころあ われ とんじやくな

して、彼此・愛憎の心有ることなし。我に貪著無く、また

げんげな こと

限礙無し」の事

おんぎくでん い ろつく もん ごしき がかん

御義口伝に云わく、この六句の文は、五識なり。「我観

いつさい ふかいびようどう くしき むうひし はつしき

一切 普皆平等」とは、九識なり。「無有彼此」とは、八識

あいぞうししん しちしき がむとんじやく

なり。「愛憎之心」とは、七識なり。「我無貪著」とは、六識

やくむげんげ ごしき われ しゅじよう かんぼう だいたい

なり。「亦無限礙」とは、五識なり。我ら衆生の觀法の大体

いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの

なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者は、

あに「我観一切 普皆平等」の九識の修行にあらずや。
がかんいつさい ふかいびようどう くしき しゆぎよう

しかれば、「無有彼此」にあらずや。「愛憎之心」にあらず
むうひし あいぞうししん

や。「我無貪著」にあらずや。「亦無限礙」にあらずや。
がむとんじやく やくむげんげ

授記品四箇の大事
じゆきほんしか だいじ

第一 「授記」の事
だいいち じゆき こと

文句の七に云わく『授』は、これ与の義なり。
もんぐ しち い じゆ よ ぎ

御義口伝に云わく、「記」とは、南無妙法蓮華経なり。
おんぎくでん い き なんみやうほうれんげきよう

「授」とは、日本国の一切衆生なり。不信の者には授けざ
じゆ にほんこく いっさいしゆじよう ふしん もの さざ

るなり、また、これを受けざるなり。今、日蓮等の類い、

なんみょうほうれんげきょう き う

南無妙法蓮華經の記を受くるなり。

い じゆき ほうかい じゆき じごく じゆ

また云わく、「授記」とは、法界の授記なり。地獄の授

き あくいん あくごう じゆき ざいにん さず よ

記は悪因なれば、悪業の授記を罪人に授くるなり。余はこ

じゆん し しょう き あ かなら し

れに準じて知るべきなり。生の記有れば、必ず死す。死

き しょう さんぜじようごう じゆき せん

の記あれば、また生ず。三世常恒の授記なり。詮ずると

ちゆうこん くだいししようもん われ しょうろうびようし しそう

ころ、中根の四大声聞とは、我らが生老病死の四相なり。

かしよう しょう そう かせんねん ろう そう もくれん びよう そう しゅぼだい

迦葉は生の相、迦旃延は老の相、目連は病の相、須菩提は

し そう ほっけ きた しょうろうびようし しそう くだいししようもん

死の相なり。法華に来つて、生老病死の四相を四大声聞と

あらわ

すなわ はつそうさぶつ

しよほうじつそう

ふ ま

顕したり。これ即ち八相作仏なり、諸法実相の振る舞い

き さず

なりと記を授くるなり。

みようほう じゆき

ゆえ

ほうかい

じゆき

れんげ

じゆき

妙法の授記なるが故に、法界の授記なり。蓮華の授記

ゆえ

ほうかいしよほうじよ

きよ

じゆき

ゆえ

しゆじよ

なるが故に、法界清浄なり。経の授記なるが故に、衆生

ごごんおんじよ

さんぜじよご

じゆき

いちごん

じゆき

の語言音声は三世常恒の授記なり。ただ一言に授記すべ

なんみよほうれんげきよ

うんぬん

き南無妙法蓮華経なり云々。

だいに

かしよごみよ

こと

第二 迦葉光明の事

おんぎくでん い

ごうみよ

いつさいしゆじよ

そうご

御義口伝に云わく、「光明」とは、一切衆生の相好な

ごう

じごく

とうねんみよか

すなわ

ほんがくじじゆゆう

ち

り。「光」とは、地獄の灯燃猛火、これ即ち本覚自受用の智

か ないしぶつか おな いま にちれんとう たぐ

火なり。乃至仏果、これに同じ。今、日蓮等の類い、

なんみょうほうれんげきよう こうみよう ほうぼう あんみよう なか さ い

南無妙法蓮華経の光明を謗法の闇冥の中に指し出だす。

すなわ かしよう こうみようによらい かしよう ずだ もと ずだ

これ即ち迦葉の光明如来なり。迦葉は頭陀を本とす。頭陀

とそう い いま まつぼう い よぎよう とそう

は、ここに抖擻と云うなり。今、末法に入つて、余行を抖擻

もつぱ なんみょうほうれんげきよう しゆ しきようなんじ きよう

して、専ら南無妙法蓮華経と修するは、「此経難持（この経

たも がた ぎようずだしゃ ずだ ぎよう もの

は持ち難し）」「行頭陀者（頭陀を行ずる者）」、これなり

うんぬん

云々。

だいさん しゃぜしんい み す お こと

第三 「捨是身已（この身を捨て已わる）」の事

おんぎくでん い もんだん しゃ ふしゃ お

御義口伝に云わく、この文段より捨・不捨の起こりな

てんしゃ

ようしゃ

てんしゃ

ほんもん

ようしゃ

しゃくもん

り。転捨にして永捨にあらず。転捨は本門なり、永捨は迹門

みす

ほんのうそくぼだい

しょうじそくねはん

むね

そむ

なり。この身を捨つるは煩惱即菩提・生死即涅槃の旨に背く

うんぬん

せん

にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

なり云々。詮ずるところ、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と

とな

たてまつ

しゃぜしんい

ふしやくしんみよう

ゆえ

うんぬん

唱え奉るは、「捨是身已」なり。不惜身命の故なり云々。

い

す

み

ほごこ

よ

とき

ほうかい

ごだい

また云わく、「この身を捨す」と読む時は、法界に五大

ほごこ

す

ぎ

み

す

を捨すなり。捨つるところの義にあらず。この身を捨てて

ほとけ

な

ごんもん

ごころ

しゅうじよう

す

仏に成るといふは、権門の意なり。かかる執情を捨つ

しゃぜしんい

と

もん

いちねんさんぜん

ほうもん

るを、「捨是身已」と説くなり。この文は一念三千の法門な

しゃぜしんい

かえ

ほんり

いちねんさんぜん

き

ごころ

り。「捨是身已」とは、「還つて本理の一念三千に帰す」の意

なり。妙楽大師の「当に知るべし、身土は一念の三千なり。
故に、成道の時、この本理に称つて、一身一念法界に遍し」
と釈するは、この意なり云々。

第四 「宿世因縁 吾今当説（宿世の因縁、吾は今当に説く

べし）」の事

御義口伝に云わく、「宿世因縁」とは、三千塵点の昔の

ことなり。下根のために宿世の因縁を説かんとしたことな

り。「因縁」とは、「因」は種なり、「縁」は昔に帰る義な

り。「もとづく」と訓ぜり。大通結縁の下種にもとづくとい

うことを、いんねん 因縁と云うなり。いま 今、にちれんとう 日蓮等の類い、

なんみょうほうれんげきよう なんみょうほうれんげきよう とな とな たてまつ たてまつ もの もの かこ かこ いん いん

南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、過去の因にもとづきたり。

ここをもつて、みょうらくだいしい 妙楽大師云わく「故ゆえに知んぬ、まつだい 末代の一時

にき聞くことを得て、え聞き已おわつて信しんを生しようずることは、じ事、

すべしゆくしゆからく宿種しゆくなるべし。「宿しゆく」とは、だいづう大通の往時おうじなり。

「種しゆ」とは、げしゆ下種げしゆの南無妙法蓮華経なり。げしゆこの下種げしゆにもと

づくを、いんねん 因縁いと云うなり。ほんもん 本門ごころの意は、ごひやくじんてん 五百塵点げしゆの下種げしゆに

もとづくべきなり。しんじつみょうほう 真実妙法いんの因もとに縁げしゆづくを、じようぶつ 成仏いと云う

なり。

けじようゆほんしちか だいじ
化城喩品七箇の大事

だいいち

けじよう

こと

第一 「化城」の事

おんぎくでん

い

け

しきほう

じよう

しんぽう

御義口伝に云わく、「化」とは色法なり、「城」とは心法

しきしん

にほう

むじよう

と

ごんきよう

こころ

なり。この色心の二法を無常と説くは、權教の心なり。

ほけきよう

こころ

むじよう

じようじゆう

と

けじようそくほうしよ

法華經の意は、無常を常住と説くなり。化城即宝処なり。

せん

いま

にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

詮ずるところ、今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え

たてまつ

もの

しきしん

みようほう

ひら

けじようそくほうしよ

い

奉る者、色心を妙法なりと開くを、化城即宝処と云うな

じっかい

みなけじよう

じっかい

おのおのほうしよ

り。十界は皆化城にして、十界は各々宝処なり。

けじよう

きゆうかい

ほうしよ

ぶつかい

けじよう

さ

「化城」は九界なり、「宝処」は仏界なり。化城を去つ

ほうしよ

いた

い

ごひやくゆじゆん

あいだ

ごひやくゆじゆん

て宝処に至ると云うは、五百由旬の間なり。この五百由旬

けんじ

じんじや

むみよう

ぼんのう

ごひやくゆじゆん

みようほう

とは、見思・塵沙・無明なり。この煩惱の五百由旬を妙法

ごじ

ひら

けじようそくほうしよ

い

けじようそくほうしよ

の五字と開くを、化城即宝処と云うなり。化城即宝処とは、

そく

いちじ

なんみようほうれんげきよう

ねんねん

けじよう

ねんねん

ほうしよ

即の一字は南無妙法蓮華経なり。念々の化城、念々の宝処な

り。

われ

しきしん

にほう

むじよう

と

ごんきよう

じようじゆう

我らが色心の二法を無常と説くは権教なり、常住と

と

ほけきよう

むじよう

しゆう

しゆうじよう

めつ

そくめつ

説くは法華経なり。無常と執する執情を滅するを、「即滅

けじよう

すなわ

けじよう

めつ

い

けじよう

ひにく

ほうしよ

化城（即ち化城を滅す）」と云うなり。「化城」は皮肉、「宝処」

ほね

しきしん

にほう

みようほう

かいかく

けじようそくほうしよ

は骨なり。色心の二法を妙法と開覚するを、化城即宝処の

じつたい い

じつたい

むじよう

じようじゆう

ぐじ

そうそく

実体と云うなり。実体とは、無常と常住とは俱時に相即し、

ずい えん

ふへん

いちねん

じやく

しよう

いちねん

随縁・不変は、一念の寂・照なり。一念とは、

なんみようほうれんげきようむぎわつしん

いちねん

そく

いちじ

こころ

とど

南無妙法蓮華経無疑曰信の一念なり。即の一字、心を留め

おも

うんぬん

てこれをおもうべし云々。

だいに

だいつうちしようぶつ

こと

第二 「大通智勝仏」の事

おんぎくでん

い

だいつう

しんおう

ちしよう

しんじゆ

御義口伝に云わく、「大通」は心王なり、「智勝」は心数

だいつう

しやくもん

ちしよう

ほんもん

だいつうちしよう

なり。「大通」は迹門、「智勝」は本門なり。「大通智勝」

われ

いっしん

いま

にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

は、我らが一身なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と

とな たてまつ もの だいつう だいもく とな ちしよう

唱え奉る者は、「大通」なり。題目を唱うるは、「智勝」

ほげきよう ぎようじゃ ち こんしゆう だいち ひやくせんまんばいすぐ

なり。法華経の行者の智は権宗の大智よりも百千万倍勝

ちしよう こころう だい しきほう

れたるところを、「智勝」と心得べきなり。「大」は色法、

つう しんぼう われ しょうじ だいつう い

「通」は心法なり。我らが生死を「大通」と云うなり。こ

しょうじ しんしん ふ ま きねん ちしよう い

の生死の身心に振る舞う起念を、「智勝」とは云うなり。こ

おも なんみようほうれんげきよう とな たてまつ

こをもつてこれを思うに、南無妙法蓮華経と唱え奉る

ぎようじゃ だいつうちしようぶつ じゅうろくおうじ われ しんじゆ

行者は、「大通智勝仏」なり。「十六王子」とは、我らが心数

うんぬん

なり云々。

だいさん しまたいきゆう しまも たいきゆう こと

第三 「諸母涕泣（諸母は涕泣す）」の事

おんぎくでん い しょも しょ じゅうろくにん はは
御義口伝に云わく、「諸母」とは、「諸」は十六人の母

じつぎ も がんぼん むみよう
ということなり。実義には、「母」とは、元品の無明なり。

むみよう お わくしよう しょも い るてん
この無明より起こる惑障を「諸母」とも云うなり。流転の

とき むみよう はは 連 い げんめつ とき むみよう はは ころ
時は無明の母とつれて出で、還滅の時は無明の母を殺すな

むみよう はは ねんぶつ ぜん しんごんとう ひとびと にずいそうし
り。無明の母とは、念仏・禅・真言等の人々なり。「而随送之

したが おく ほうにん き
(しかして随ってこれを送る)」とは、謗人を指すなり。

ついで ほけきよう こうせんる ふ あらわ てんか
しかりといえども、終に法華經の広宣流布顕れて、天下

いちどう ほけきよう ぎようじや な ずいしどうじよう げんよく
一同に法華經の行者と成るべきなり。「随至道場。還欲

しんごん したが どうじよう いた かえ しんごん ほつ
親近(随って道場に至る。還って親近せんと欲す)「これ

なり。

だいし

ご そてんりんじょうおう

そ てんりんじょうおう

こと

第四 「其祖轉輪聖王（その祖、轉輪聖王）」の事

おんぎくでん

い

ほんじしん

ほとけ

もん なら

御義口伝に云わく、本地身の仏とは、この文を習うな

そ

ほうかい

いみよう

ほうべんぼん

そう

しやう

り。「祖」とは、法界の異名なり。これは方便品の相・性・

たい さんによぜ

そ

い

さんによぜ

ほか

体の三如是を、「祖」と云うなり。この三如是より外に

てんりんじょうおう

な

てんりん

しやうじゆういめつ

「轉輪聖王」これ無きなり。「轉輪」とは、生住異滅な

しやうおう

しんぼう

さんによぜ

さんぜ

しよぶつ

り。「聖王」とは、心法なり。この三如是は、三世の諸仏の

ふぼ

いま

にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきやう

とな

たてまつ

父母なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る

もの

さんぜ

しよぶつ

ふぼ

ご そてんりんじょうおう

こん

者は、三世の諸仏の父母にして、「其祖轉輪聖王」なり。金・

銀・銅・鉄とは、金は生、銀は白骨にして死なり。銅は老の相、鉄は病なり。これ即ち開・示・悟・入の四仏知見なり。三世常恒に生死生死とめぐるを、「てんりんじようおう 転輪聖王」と云いなり。このごんご 転輪聖王出現の時の輪宝とは、我われらが吐くとはころの言語音声なり。この音声の輪宝とは、なんみやうほうれんげきやう 南無妙法蓮華経なり。ここをもつて「平等大慧」とは云いなり。

第五 「十六王子」の事

御義口伝に云わく、「十」とは十界なり、「六」とは六根

おう

しんのう

こ

しんじゆ

すなわ

なり、「王」とは心王なり、「子」とは心数なり。これ即ち

じつそう

いちり

だいつう

こ

いま

にちれんとう

たぐ

実相の一理の大通の子なり。今、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

もの

じゅうろくおうじ

はつぼう

南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、「十六王子」なり。「八方

さぶつ

われ

はつく

ぼんのうそくぼだい

ひら

うんぬん

に作仏す」とは、我らが八苦の煩惱即菩提と開くなり云々。

だいろく

そくめつけじよう

すなわ

けじよう

めつ

こと

第六 「即滅化城（即ち化城を滅す）」の事

おんぎくでん

い

われ

めつ

とうたい

けじよう

御義口伝に云わく、我らが滅する当体は「化城」なり。

めつ

めつ

み

けじよう

ふめつ

めつ

ちけん

この滅を滅と見れば、「化城」なり。不滅の滅と知見するを、

ほうしよ

い

じゆりようほん

にじつふめつど

「宝処」とは云うなり。これ寿量品にしては「而実不滅度（し

じつ

めつど

と

めつ

けん

めつ

かも実には滅度せず」とは説くなり。滅という見を滅する

を、「滅」と云うなり。三権即一実の法門、これを思うべし。

あるいは「即滅化城」とは、謗法の寺塔を滅することなり。

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、化城

即宝処なり。我らが居住の山谷曠野、皆、皆常寂光の宝処

なり云々。

第七 「皆共至宝所（皆共に宝所に至る）」の事

御義口伝に云わく、「皆」とは、十界なり。「共」とは、

「如我等無異（我がごとく等しくして異なることなし）」な

り。「至」とは、極果の住処なり。「宝所」とは、靈山な

にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの いちどう
り。日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、一同
かいぐしほうしよ ぐ いちじ にちれん ぐう ととき ほうしよ
に「皆共至宝所」なり。「共」の一字は、日蓮に共する時は宝所
いた ふぐう あびだいじよう お うんぬん
に至るべし。不共ならば阿鼻大城に墮つべし云々。

ごひやくで しほんさんか だいじ
五百弟子品三箇の大事

だいいち えり ころも うら こと
第一 「衣裏（衣の裏）」の事

おんぎくでん い ほん むげ ほうしゆ ころも うら
御義口伝に云わく、この品には無価の宝珠を衣の裏に

か と せん にちれんとう たぐ
繋ぐることを説くなり。詮ずるところ、日蓮等の類い、
なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの いちじようみようほう ちほう
南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、一乘妙法の智宝を

しんじゆ 信心受するなり。しんじん 信心をもつて衣ころもの裏うらにかくと云うなり。繫い

だいに すいしゆに が さけ よ ふ こと
第二 「醉酒而臥（酒に酔って臥す）」の事

おんぎくでん い 御義口伝に云わく、「酒しゆ」とは、無明むみようなり。無明むみようは謗法ほうぼう

が なり。「臥が」とは、謗法ほうぼうの家いえに生まるることなり。三千塵点さんぜんじんてん

とうしよ あくえん さけ の ごどう ろくどう よ めぐ
の当初とうしよに悪縁あくえんの酒さけを呑んで、五道ごどう・六道ろくどうに酔よい廻めぐつて、今いま、

ほうぼう いえ ふ すい ふしん かく しん
謗法ほうぼうの家いえに臥ふしたり。「酔すい」とは不信ふしんなり、「覺かく」とは信しんな

いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう となた たてまつ とき むみよう
り。今いま、日蓮等にちれんとうの類たぐい、南無妙法蓮華經なんみようほうれんげきようと唱となえ奉たてまつる時とき、無明むみよう

さけの酒醒さけめたり。

い しゆ じゆうじゆう あ ごんきよう さけ ほけきよう
また云わく、「酒しゆ」に重々じゆうじゆうこれ有り。權教ごんきようは酒さけ、法華經ほけきよう

は醒めたり。本迹相對する時、迹門は酒なり、始覺の故なり。

り。本門は醒めたり、本覺の故なり。また本迹二門は酒なり。

り、南無妙法蓮華經は醒めたり。酒と醒むるとは相離れざるなり。

酒は無明なり、醒むるは法性なり。法は酒なり、

妙は醒めたり。妙法と唱うれば無明・法性体一なり。止

のーに云わく「無明・塵勞は、即ちこれ菩提なり」。

第三 「身心遍歡喜（身心はあまねく歡喜す）」の事

御義口伝に云わく、「身」とは、生死即涅槃なり。「心」とは、

煩惱即菩提なり。「遍」とは、十界同時なり。「歡喜」とは、

ほうかいどうじ かんぎ

かんぎ うち

さんぜしよぶつ

とは、法界同時の歡喜なり。この歡喜の内には三世諸仏の

かんぎおき

いま にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

歡喜納まるなり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え

たてまつ

がそくかんぎ

われ

すなわ

かんぎ

しやくそんかんぎ

奉れば、「我則歡喜（我は則ち歡喜す）」とて、釈尊歡喜

かんぎ

ぜんあくとも

かんぎ

じっかい

したもうなり。「歡喜」とは、善惡共に歡喜するなり。十界

どうじ

ふか

おも

うんぬん

同時なり。深くこれを思うべし云々。

にんきほんにか だいじ

人記品二箇の大事

だいいち

がく 一 むがく

こと

第一 「学・無学」の事

おんぎくでん

い

がく

むち

むがく

御義口伝に云わく、「学」とは、無智なり。「無学」と

は、有智なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉

るは、「学・無学」の人に、「如我等無異（我がごとく等し

くして異なることなし）」の記を授くるにあらずや。色法は

無学なり、心法は学なり。また、心法は無学なり、色法は学

なり。学・無学の人は日本国の一切衆生なり。智者・愚者

おしなべて、南無妙法蓮華経の記を説いて「而強毒之（し

かも強いてこれを毒す）」するなり。

第二 「山海慧自在通王仏」の事

御義口伝に云わく、「山」とは、煩惱即菩提なり。「海」

しょうじそくねはん

え

われ

は

ごんご

とは、生死即涅槃なり。「慧」とは、我らが吐くところの言語

じざい

むしようげ

つうおう

じっかいごぐ

なり。「自在」とは、無障礙なり。「通王」とは、十界互具・

ひやつかいせんによ

いちねんさんぜん

百界千如・一念三千なり。

い

せん

しやくもん

ごころ

かい

また云わく、「山」とは、迹門の意なり。「海」とは、

ほんもん

ごころ

え

みようほう

ごじ

いま

にちれんとう

本門の意なり。「慧」とは、妙法の五字なり。今、日蓮等の

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

もの

せんかい え じざい つう

類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、「山海慧自在通

おうぶつ

まった

ほか

われ

ぎようじや

ほか

あなん

王仏」なり。全く外にあらざるなり。我ら行者の外に「阿難」

な

あなん

かんぎ

いちねんさんぜん

かいかく

これ無きなり。「阿難」とは歡喜なり。一念三千の開覚なり

うんぬん

云々。

ほつしほんじゅうろつか だいじ
法師品十六箇の大事

だいいち ほつし こと
第一 「法師」の事

おんぎくでん い ほう
御義口伝に云わく、「法」とは、諸法なり。「師」とは、

しよほうただ し な しんらさんぜん しよほうただ し な
諸法直ちに師と成るなり。森羅三千の諸法直ちに師と成り

でし いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう
弟子となるべきなり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と

とな たてまつ もの ほつし なか だいほつし しよほうじつそう かいかく
唱え奉る者は、法師の中の大法師なり。諸法実相の開覚

あらわ み じごく とうねんみようか ないしぶつか いた
顕れて見れば、地獄の灯燃猛火、乃至仏果に至るまで、こ

ぐそく いちねんさんぜん ほつし い ほう
とごとく具足して一念三千の法師なり。また云わく、「法」

とは題目、「師」とは日蓮等の類いなり。

だいに じょうじゅだいがん みんなしゅじょうこ しょうおあくせ こうえん しきよう だいがん

第二 「成就大願、愍衆生故、生於惡世、広演此經（大願

じょうじゅ しゅじょう あわ ゆえ あくせ う ひろ

を成就して、衆生を愍れむが故に、惡世に生まれて、広く

きよう の こと

この經を演ぶ」の事

おんぎくでん い だいがん ほつけぐつう みんなしゅじょう

御義口伝に云わく、「大願」とは、法華弘通なり。「愍衆生

こ にほんこく いっさいしゅじょう しょうおあくせ ひと

故」とは、日本国の一切衆生なり。「生於惡世」の人とは、

にちれんとう たぐ こう なんえんぶだい しきよう

日蓮等の類いなり。「広」とは、南閻浮提なり。「此經」と

だいもく いま にちれんとう たぐ なんみょうほうれんげきよう とな たてまつ

は、題目なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉

るなり。

だいさん

によらいしよけん

ぎょうによらいじ

によらい

つか

によらい

じ

第三

「如来所遣、

行如来事（如来に遣わされて、

如来の事

を行ず）」の事

ぎょう

こと

を行ず）」の事

おんぎくでん

い

ほつけ

ぎょうじゃ

によらい

つか

きた

御義口伝に云わく、法華の行者は如来の使いに来れり。

によらい

しゃか

によらいじ

なんみょうほうれんげきょう

によらい

「如来」とは釈迦、「如来事」とは南無妙法蓮華経なり。「如来」

じっかいさんぜん

しゅじょう

いま

にちれんとう

たぐ

とは、十界三千の衆生のことなり。今、日蓮等の類い、

なんみょうほうれんげきょう

とな

たてまつ

しんじつ

おんつか

うんぬん

南無妙法蓮華経と唱え奉るは、真実の御使いなり云々。

だいし

よによらいぐしゆく

によらい

しゆく

こと

第四 「与如来共宿（如来とともに宿す）」の事

おんぎくでん

い

ほつけ

ぎょうじゃ

なんによとも

によらい

御義口伝に云わく、法華の行者は、男女共に「如来」

ほんのうそくぼだい

しやうじそくねはん

いま

にちれんとう

たぐ

なり。煩惱即菩提・生死即涅槃なり。今、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの よによらいぐしゆく もの

南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、「与如来共宿」の者なり。

ふだいし しゃく い ちようちようほとけ お せきせきほとけ

傳大士の釈に云わく「朝々仏とともに起き、夕々仏と

ふ じ じ じようどう じ けんぽん うんぬん

ともに臥す。時々成道し、時々顛本す」云々。

だいご ぜほけきようぞう じんこゆおん むにんのうとう ほけきよう くら

第五 「是法華経蔵、深固幽遠、無人能到（この法華経の蔵

じんこゆおん ひと よ いた な こと

は、深固幽遠にして、人の能く到るもの無し」の事

おんぎくでん い ぜほけきようぞう だいもく じんこ

御義口伝に云わく、「是法華経蔵」とは、題目なり。「深固」

ほんもん ゆおん しゃくもん むにんのうとう

とは、本門なり。「幽遠」とは、迹門なり。「無人能到」と

ほうぼう いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ

は、謗法なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉

もの むにんのうとう もの うんぬん

る者は、「無人能到」の者にあらざるなり云々。

だいろく

もんぼうしんじゆ

ずいじゆんふぎやく

ほう

き

しんじゆ

ずいじゆん

第六

「聞法信受、

随順不逆

（法を聞いて信受し、

随順し

さか

こと

て逆らわず」の事

おんぎくでん

い

もん

みようじそく

ほう

御義口伝に云わく、「聞

」とは、名字即なり。「法」と

だいまく

しんじゆ

じゆじ

ずいじゆんふぎやく

は、題目なり。「信受」とは、受持なり。「随順不逆」とは、

ほんじやくにもん

ずいじゆん

いま

にちれんとう

たぐ

本迹二門に随順するなり。今、日蓮等の類い、

なんみょうほうれんげきよう

とな

たてまつ

もの

南無妙法蓮華経と唱え奉る者のことなり。

だいしち

え

ざ

しつ

こと

第七 「衣」「座」「室」の事

おんぎくでん

い

え

ざ

しつ

ほつ

ぼう

おう

御義口伝に云わく、「衣」「座」「室」とは、法・報・応の

さんじん

くう

け

ちゆう

さんたい

しん

く

い

さんごう

いま

三身なり。空・仮・中の三諦、身・口・意の三業なり。今、

にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの さんき

日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、この三軌

いちねん じようじゆ え にゆうわんにくえ にゆうわんにく

を一念に成就するなり。「衣」とは、「柔和忍辱衣（柔和忍辱

ころも とうじやくにんにくがい まさ にんにく よろい き

の衣）」「当著忍辱鎧（当に忍辱の鎧を著るべし）」、これ

ざ ふしやくしんみよう しゆぎよう くう ざ こ

なり。「座」とは、不惜身命の修行なれば、空の座に居す

しつ じひ じゆう ひろ ゆえ はは こ

るなり。「室」とは、慈悲に住して弘むる故なり。母の子を

おも いちねん さんき ぐそく

思うがごとくなり。あに一念に三軌を具足するにあらずや。

だいはい よくしやしよけたい おうとうちようしきよう もろもろ けたい す

第八 「欲捨諸懈怠 应当聽此経（諸の懈怠を捨てんと欲

ま さ きよう き こと

せば、应当にこの経を聴くべし）」の事

おんぎくでん い しよけたい しじゆうよねん ほうべん

御義口伝に云わく、「諸懈怠」とは、四十余年の方便の

きょうぎょう

みなけたい きょう

しきょう

だいもく

経教なり。ことごとく皆懈怠の経なり。「此経」とは、題目

いま にちれんとう たぐ なんみょうほうれんげきょう とな たてまつ

なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉るは、

すなわ しようじん おうとうちようしきょう

これ即ち精進なり。「应当聴此経」はこれなり。応に日蓮

きょう き い うんぬん

にこの経を聞くべしと云えり云々。

だいく ふもんほけきょう こぶつちじんのん ほけきょう き

第九 「不聞法華経 去仏智甚遠（法華経を聞かずんば、仏

ち さ とお こと

智を去ること、はなはだ遠し）」の事

おんぎくでん い ふもん ほうぼう じようぶつ ち

御義口伝に云わく、「不聞」とは、謗法なり。成仏の智

とお いま にちれんとう たぐ なんみょうほうれんげきょう

を遠ざかるべきなり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と

とな たてまつ もの ぶつちかいご もの じようぶつ ちか ゆえ

唱え奉る者は、仏智開悟の者にして、成仏の近きが故な

り。

だいじゆう

にやくせつ しきようじ

うにんあつくめ

かとうじようがしやく

ねんぶつこ

第十

「若説此経時

有人悪口罵

加刀杖瓦石

念仏故

おうにん

きよう と

とき ひとあ

あつく の

とうじよう

応忍（もしこの経を説かん時、人有つて悪口し罵り、刀杖

がしやく

くわ

ほとけ

ねん

ゆえ

まさ

しの

こと

瓦石を加うとも、仏を念ずるが故に応に忍ぶべし」の事

おんぎくでん

い

しきよう

だいもく

あつく

御義口伝に云わく、「此経」とは、

題目なり。「悪口」

は、口業なり。「加刀杖」は、身業なり。この身・口の二業

くごう

かとうじよう

しんごう

しん

く

にごう

は、意業より起こるなり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経

いぎよう

お

いま にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

と唱え奉る者は、仏勅を念ずるが故に、「応忍」とは云う

とな

たてまつ

もの

ぶつちよく

ねん

ゆえ

おうにん

い

なり。

なり。

だいじゅういち

ぎゅうしやうしんじによ

くやうおほつし

しやうしんじじよ

第十一 「及清信士女

供養於法師（および清信士女は、

ほつし くやう

こと

法師を供養す」の事

おんぎくでん

い

じによ

なんによ

ほつし

御義口伝に云わく、「士女」とは、男女なり。「法師」

にちれんとう

たぐ

しやうしん

ほけきやう

しんじん

もの

とは、日蓮等の類いなり。「清信」とは、法華経に信心の者

いま にちれんとう

たぐ

なんみやうほうれんげきやう

とな

たてまつ

もの

なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者こ

うんぬん

しよてんぜんじんとう

なんによ

あらわ

ほけきやう

れなり云々。これ、諸天善神等、男女と顕れて法華経の

ぎやうじや

くやう

きやうもん

行者を供養すべしという経文なり。

だいじゅうに

にやくにんよくかあく

とうじやうぎゆうがしやく

そくけんへんげにん

いし

第十二 「若人欲加惡 刀杖及瓦石 則遣變化人 為之

さえ

ひと

あく

とうじやう

がしやく

くわ

ほつ

すなわ

作衛護（もし人、惡・刀杖および瓦石を加えんと欲せば、則

へんげ ひと つか
ち変化の人を遣わして、これがために衛護と作さん」の事
えご な こと

おんぎくでん い へんげにん たつ くちしゅご はちまん
御義口伝に云わく、「変化人」とは、竜の口守護の八幡

だいぼさつ いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ
大菩薩なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉

もの しゅぎ
る者を守護すべしという経文なり。
きようもん

だいじゅうさん にやくしんこんほっし そくとくぼさつどう ほっし しんこん
第十三 「若親近法師 速得菩薩道（もし法師に親近せば、

すみ ぼさつ どう う こと
速やかに菩薩の道を得）」の事

おんぎくでん い しんこん しんじゆ いみよう ほっし
御義口伝に云わく、「親近」とは、信受の異名なり。「法師」

にちれんとう たぐ ぼさつ ぶつか う したじ
とは、日蓮等の類いなり。「菩薩」とは、仏果を得る下地な

り。

いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの
今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者の
ことなり。

だいじゅうし ずいじゆんぜ し がく ざいじゆん がく こと
第十四 「随順是師学（この師に随順して学す）」の事

おんぎくでん い ぜし にちれんとう たぐ
御義口伝に云わく、「是師」とは、日蓮等の類いなり。

がく なんみようほうれんげきよう ざいじゆん しんじゆ うんぬん
「学」とは南無妙法蓮華経なり。「随順」とは、信受なり云々。

だいじゅうご し がく こと
第十五 「師」「学」の事

おんぎくでん い にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう がく
御義口伝に云わく、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と学

もの いちねんさんぜん し がく とも ほうかいさんぜん し がく
する者は一念三千なり。「師」も「学」も共に法界三千の師学

なり。

だいじゅうろく

とくけんごうじやぶつ

ごうしや

ほとけ

み

う

第十六

「得見恒沙仏（恒沙の仏を見たてまつることを得）」

こと

の事

おんぎくでん

い

けんごうじやぶつ

けんほうとう

御義口伝に云わく、「見恒沙仏」とは、「見宝塔」とい

ごうしやぶつ

たほう

たほう

うことなり。「恒沙仏」とは、「多宝」のことなり。多宝の

た

ほうかい

ほう

いちねんさんぜん

かいご

ほうかい

「多」とは法界なり、「宝」とは一念三千の開悟なり。法界

たほうぶつ

み

けんごうじやぶつ

い

ゆえ

ほっしほん

を多宝仏と見るを、「見恒沙仏」と云うなり。故に、法師品

つぎ

ほうとうほん

きた

げ

ぎよう

しよう

ほっし

の

もの

の次に宝塔品は来るなり。解・行・証の法師の乗り物は

ほうとう

うんぬん

いま

にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

宝塔なり云々。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え

たてまつ

みようげ

みようぎよう

みようしよう

ふしぎ

げ

ふしぎ

ぎよう

奉るは、妙解・妙行・妙証、不思議の解・不思議の行・

不思議ふしぎの証得しょうとくなり。真実しんじつ一念三千の開悟いちねんさんぜん かいごなり云々。うんぬん

この「恒沙ごうじゃ」というは、悪あくを滅めつし善ぜんを生しょうずる河かわなり。

「恒沙ごうじゃ仏ぶつ」とは、一々文々皆金色いちいちもんみなこんじきの仏体ぶつたいなり。「見けん」の字じ、

これを思おもうべし。仏見ぶつけんということなり。「随順ずいじゆん」とは、仏知見ぶつちけん

なり。「得見とくけん」の「見けん」の字じと「見宝塔けんほうとう」の「見けん」とは、依正えしょう

の二報にほうなり。「得見恒沙とくけんごうじゃ」の「見けん」は正報しょうほうなり、「見宝塔けんほうとう」

の「見けん」は依報えほうなり云々。うんぬん

宝塔品二十箇の大事ほうとうほんにじゅうか だいじ

第一 「宝塔」の事だいいち ほうとう こと

もんぐ ほんぐ 文句の八に云わく「前ぜん仏ぶつすでに居こし、今こん仏ぶつ並び座ざす。
とうぼう 当仏もまたしかなり。」

おんぎくでん い ほう ごおん とう 御義口伝に云わく、「宝」とは、五陰なり。「塔」とは、

わごう ごおんわごう ほうとう い 和合なり。五陰和合をもつて「宝塔」と云うなり。この五陰

わごう みようほう ごじ み 和合とは、妙法の五字なりと見る、これを「見」とは云う

いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、

けんほうとう 「見宝塔」なり。

だいに うしつぼう しつぼうあ こと 第二 「有七宝（七宝有り）」の事

おんぎくでん い しつぼう もん しん かい じよう しん 御義口伝に云わく、「七宝」とは、聞・信・戒・定・進・

しゃ ざん い ずじょう しちけつ いま にちれんとう たぐ

捨・慙なり。また云わく、頭上の七穴なり。今、日蓮等の類

なんみようほうれんげきょう とな たてまつ うしつぼう ぎようじゃ

い、南無妙法蓮華経と唱え奉るは、「有七宝」の行者な

うんぬん

り云々。

だいさん しめんかいすい しめん みない こと

第三 「四面皆出（四面に皆出だす）」の事

もんぐ はち い しめんすいこう しめん か い

文句の八に云わく『四面出香（四面に香を出だす）』

したい どうふう しとく か ふ

とは、四諦の道風、四徳の香を吹くなり。

おんぎくでん い しめん しょうろうびようし

御義口伝に云わく、「四面」とは、生老病死なり。四相

われ いっしん とう しょうごん われ しょうろうびようし

をもつて我らが一身の塔を莊嚴するなり。我らが生老病死

なんみようほうれんげきょう とな たてまつ

に南無妙法蓮華経と唱え奉るは、しかしながら「四徳の香

しとく か

を吹くふなり。「南無なむ」とは楽波羅蜜、らくはらみつ「妙法みょうほう」とは我波羅蜜、がはらみつ

「蓮華れんげ」とは浄波羅蜜、じょうはらみつ「経きょう」とは常波羅蜜なり云々。じょうはらみつ うんぬん

第四 「出大音声だいし（大音声を出だす）の事こと」

御義口伝おんぎくでんに云わく、我ら衆生の朝夕吐くところの

言語ごんごなり。「大音声だいおんじょう」とは、権教ごんきょうは小音声しょうおんじょう、法華経ほけきょうは

大音声だいおんじょうなり。二十八品にじゅうはつぽんは小音声しょうおんじょう、題目だいもくは大音声だいおんじょうなり。総そう

じて、「大音声だいおんじょう」とは、「大だい」は法界ほうかいなり。法界ほうかいの衆生の言語ごんご

を妙法みょうほうの音声おんじょうと沙汰さたするを、「大音声だいおんじょう」とは云うなり。今いま、

日蓮等にちれんとうの類たぐい、南無妙法蓮華経なんみょうほうれんげきょうと唱え奉るとな たてまつは、「大音声だいおんじょう」

なり。また云わく、「大」とは空諦、「音声」とは仮諦なり、

「出」とは中道なり云々。

第五 「見大宝塔住在空中（大宝塔の空中に住せるを見

る）」の事

御義口伝に云わく、「見大宝塔」とは、我らが一身なり。

「住在空中」とは、我ら衆生、終に滅に帰することなり。

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉って信心に

住する処、「住在空中」なり。虚空会に住するなり。

第六 「国名宝浄。彼中有仏、号曰多宝（国を宝浄と名

づく。彼の中に仏有し、号づけて多宝と曰う」の事

おんぎくでん

い

ほうじょうせかい

われ

はは

たいない

御義口伝に云わく、「宝浄世界」とは、我らが母の胎内

うぶつ

しよほうじつそう

ほとけ

たほうぶつ

なり。「有仏」とは、諸法実相の仏なり。ここをもつて多宝仏

い

たいない

ぼんのう

い

ぼんのう

おでい

なか

と云うなり。胎内とは、煩惱を云うなり。煩惱の淤泥の中に

しんによ

ほとけ

われ

しゆじよう

いま

にちれんとう

たぐ

真如の仏あり。我ら衆生のことなり。今、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

とうたいれんげ

ほとけ

い

南無妙法蓮華経と唱え奉るを、当体蓮華の仏と云うなり

うんぬん

云々。

だいしち

おじつほうこくど

うせつほけきようしよ

が

しとうみよう

いちようぜきようこ

第七 「於十方国土、有説法華経処、我之塔廟為聴是経故、

ゆげんごぜん

いさししようみよう

さんごんぜんざい

じつぼう

こくど

涌现其前、為作証明、讚言善哉（十方の国土において、

ほけきよう と ところあ とうみよう きよう き

法華經を説く処有らば、我が塔廟はこの經を聴かんがた

ゆえ まえ ゆげん

しょうみよう

な

ほ

めの故に、その前に涌現して、ために証明と作って、讚め

よ こと

て善きかなと言わん」の事

おんぎくでん

い

じつぼう

じつかい

ほけきよう

御義口伝に云わく、「十方」とは、十界なり。「法華經」

われ しゅじよう るてん じゅうにいんねん

ごんご

おんじよう

とは、我ら衆生の流轉の十二因縁なり。よつて言語の音声

さ ぜんざい

ぜんあくふに

じゃしょういちによ

いま

を指すなり。「善哉」とは、善悪不二・邪正一如なり。今、

にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

ところ

たほうゆ

日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る処を、多宝涌

げん い

現と云うなり。

だいほち

なん

さい

ほつぼう

しい

じようげ

こと

第八 「南・西・北方・四維・上下」の事

おんぎくでん い しほう しい じょうげ がつ じつぼう
御義口伝に云わく、四方・四維・上下、合して十方な

すなわ じつかい じつかい しゅじょうとも さんどく ひかり あ
り。即ち十界なり。十界の衆生共に三毒の光これ有り。

びやくごう い いっしんちゆうどう ち え いま にちれん
これを「白毫」と云うなり。一心中道の智慧なり。今、日蓮

とう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ じつかいどうじ ひかり
等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉るは、十界同時の光

さ しょほうじつそう こうみよう ゆえ
指すなり。諸法実相の光明なるが故なり。

だいく かくさいほうけまんきく おのおのほうけ も もろて み こと
第九 「各齋宝華満掬（各宝華を齋ち掬に満つ）」の事

おんぎくでん い ほうけ がっしょう いちねんさんぜん
御義口伝に云わく、「宝華」とは、合掌、一念三千の

しょひよう かく じつかい まん いちじ いちねんさんぜん
所表なり。「各」とは、十界なり。「満」の一字を一念三千と

こころう いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ
心得べし。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る

ほとけ ほうけ たてまつ

は、**仏に宝華を奉るなり。**宝華は即ち宝珠なり。宝珠は

ほうけ すなわ ほうしゆ

ほうしゆ

すなわ いちねんさんぜん

がつしやういきやうしん よくもんぐそくどう

がつしやう

即ち一念三千なり。「合掌以敬心 欲聞具足道（合掌し

きやうしん

ぐそく どう き

ほつ

敬心をもつて、具足の道を聞きたてまつらんと欲す）、こ

うんぬん

れなり云々。

だいじゆう

によきやくけんやくかいだいじやうもん

けんやく さ

だいじやう

もん

第十 「如却関鑰開大城門（関鑰を却けて、大城の門を

ひら

こと

開くがごとし）」の事

ほちゆう

し い

かいとうけんぶつ

とう

ひら

ほとけ

補註の四に云わく「この『開塔見仏（塔を開いて仏を

み

しよひやうあ

なん

すなわ

かいとう

見る）』は、けだし所表有るなり。何となれば則ち『開塔』

すなわ

かいごん

ごん

ひら

けんぶつ

すなわ

けんじつ

は、即ち『開権（権を開く）』なり。『見仏』は、即ち『顕実

じつ あらわ

さきん しょう

まさ のち お

(実を顕す)』なり。これまた前を証し、また將に後を起

によきやくけんやく

きやく

じよ

さわ

こさんとするのみ。『如却関鑰』とは、『却』は除なり。障

のそ

きうこ

あらわ

い

ほっしん

だいじ

わく

は

り除こり機動くことを表す。謂わく、法身の居士、惑を破

り あらわ

どう ま

しょう そん

し理を顕し、道を増し生を損ずるなり。

おんぎくでん

い

けんやく

ほうぼう

むみよう

御義口伝に云わく、「関鑰」とは、謗法なり、無明なり。

かい

われ

じようぶつ

だいじようもん

われ

しきしん

「開」とは、我らが成仏なり。「大城門」とは我らが色心

にほう

だいじよう

しきほう

もん

くち

の二法なり。「大城」とは、色法なり。「門」とは、口なり。

いま にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

とき

むみよう

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る時、無明の

わくしょうさ

こしん

しゃか

たほうじゆう

けんやく

惑障却けて、己心の釈迦・多宝住するなり。「関鑰」とは、

むみよう

かい

ほつしよう

やく

みよう

いちじ

無明なり。「開」とは、法性なり。「鑰」とは、妙の一字な

てんだい

ひみつ

おうぞう

ひら

しよう

みよう

り。天台云わく「秘密の奥蔵を発く。これを称して妙と

みよう いちじ

やく

こころう

きようもん

なす」。妙の一字をもつて「鑰」と心得べきなり。この経文

ほうぼうふしん

けんやく

さ

こしん

ほとけ

ひら

は、謗法不信の関鑰を却けて己心の仏を開くということな

かいぶつちけん

ぶつちけん

ひら

おも

うんぬん

り。「開仏知見（仏知見を開く）」、これを思うべし云々。

だいじゆういち

しょうしよだいしゆかいざいこくう

もろもろ

だいしゆ

おさ

みなこくう

第十一 「撰諸大衆皆在虚空（諸の大衆を撰めて、皆虚空

お

こと

に在きたもう）」の事

おんぎくでん

い

だいしゆ

ちようしゆ

かいざいこくう

御義口伝に云わく、「大衆」とは、聴衆なり。「皆在虚空」

われ

し

そう

いま

にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とは、我らが死の相なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経

とな たてまつ もの しょうじそくねはん かいかく かいぎいこくう

と唱え奉る者は生死即涅槃と開覚するを、「皆在虚空」と

と しょうじそくねはん ひしやう だいち しきほう

説くなり。生死即涅槃と被摂するなり。「大地」とは色法な

こくう しんぼう しきしんふに こころう こくう

り、「虚空」とは心法なり。色心不二と心得べきなり。「虚空」

じやつ(じうじ)

とは寂光土なり。

い れんげ きやう だいち

また云わく、「虚空」とは蓮華なり。経とは「大地」

みやうほう てん こくう れんげ ちゆう いっさいしゆじやう

なり。妙法は「天」なり。「虚空」とは中なり。一切衆生

うち ぼさつ れんげ ぎ みやうほうれんげきやう と

の内、菩薩、蓮華に座するなり。これを妙法蓮華経と説か

きやう い にやくぎいぶつぜん れんげけしやう ぶつぜん あ

れたり。経に云わく「若在仏前、蓮華化生（もし仏前に在

れんげ けしやう

らば、蓮華に化生せん）」。

だいじゅうに

ひによだいふう

すいしょうじゆし

たと

おおかせ

しょうじゆ

えだ

第十二

「譬如大風

吹小樹枝

(譬えば大風の小樹の枝を

ふ

吹くがごとし)」の事

こと

おんぎくでん

い

げじゆ

によしょうりようち

しょうりよう

御義口伝に云わく、この偈頌の「如清涼池（清涼の

いけ

ひによだいふう

ねんだいこか

おお

こか

池のごとし)」と「譬如大風」と「燃大炬火（大いなる炬火を

とも

さんじん

なか

ひによだいふう

だいもく

燃す)」とは三身なり。その中に「譬如大風」とは、題目の

ごじ

すいしょうじゆし

しやくぶくもん

いま

にちれんとう

五字なり。「吹小樹枝」とは、折伏門なり。今、日蓮等の

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

おおかせ

ふ

類い、南無妙法蓮華経と唱え奉るは、大風の吹くがごとく

なり。

だいじゅうさん

にやくうのうじ

そくじぶっしん

よ

たも

第十三 「若有能持 則持仏身（もし能く持つことあらば、

すなわ ぶっしん たも こと

則ち仏身を持つ」の事

おんぎくでん い ほけきよう たも たてまつ わ み

御義口伝に云わく、**法華經を持ち奉る**とは、**我が身は**

ぶっしん たも そく いちじ しょうぶつふに かみ

仏身なりと持つなり。「則」の一字は生仏不二なり。上の

のうじ じ ぼんぷ たも たい みようほう ごじ

「能持」の「持」は、凡夫なり。持つ体は妙法の五字なり。

ぶっしん たも い いちいちもんもんなこんじき ぶつたい ゆえ

「仏身を持つ」と云うは、一々文々皆金色の仏体の故なり。

ぶっしん たも わ み ほか ほとけな たも い

さて、仏身を持つとは、我が身の外に仏無しと持つを云う

りそく ぼんぷ くきようそく ほとけ にな そく じ

なり。理即の凡夫と究竟即の仏と二無きなり。即の字は、

そく ゆえ しょうふに ゆえ うんぬん

「即の故に初後不二なり」の故なり云々。

だいじゆうし しきようなんじ きよう たも がた こと

第十四 「此經難持（この經は持ち難し）」の事

おんぎくでん い 御義口伝に云わく、この法華経を持つ者は、難に値わん

こころえ たも ほけきよう たも もの なん あ そくいしつとく むじようぶつどう すなわ

と心得て持つなり。されば、「則為疾得 無上仏道（則ち

と むじよう ぶつどう え じようぶつ いま にちれんとう たぐ

これ疾く無上の仏道を得ん」の成仏は、今、日蓮等の類い、

南無妙法蓮華経と唱え奉る、これなり云々。うんぬん

南無妙法蓮華経と唱え奉る、これなり云々。

だいじゆうご がそくかんぎ しょぶつやくねん われ すなわ かんき しょぶつ

第十五 「我則歡喜 諸仏亦然（我は則ち歡喜す。諸仏も

こと

またしかなり）」の事

おんぎくでん い が しのう しょぶつ

御義口伝に云わく、「我」とは、心王なり。「諸仏」と

しんじゆ ほけきよう たも たてまつ とき しのう しんじゆ どうじ

は、心数なり。法華経を持ち奉る時は、心王・心数、同時

かんき

に歡喜するなり。

また云いわく、「我が」とは、凡夫ぼんぷなり。「諸仏しよぶつ」とは、三世さんぜの諸仏しよぶつなり。今いま、日蓮等にちれんとうの類たぐい、南無妙法蓮華經なんみようほうれんげきようと唱となえて歡喜かんきする、これなり云々。うんぬん

第十六 「読持此經どくじしきよう（この經きようを讀み持よつ）」の事こと

御義口伝おんぎくでんに云いわく、五種ごしゆの修行しゆぎようの「読誦どくじゆ」と「受持じゆじ」との二行にぎようなり。今いま、日蓮等にちれんとうの類たぐい、南無妙法蓮華經なんみようほうれんげきようと唱となえ奉たてまつるは、「読どく」なり。この經きようを持たもつは、「持じ」なり。「此經しきよう」

とは、題目だいもくの五字ごじなり云々。うんぬん

第十七 「是真ぜしんぶつし仏子しんぶつし（これ真しんの仏子ぶつし）」の事こと

おんぎくでん い ほんぎくでん ほうきぎょう ぎょうじや しん しゃかほうおう
御義口伝に云わく、法華經の行者は真に釈迦法王の

みこ おうい っ しつぜごし
御子なり。しかるあいだ、王位を継ぐべきなり。「悉是吾子

(ことごとくこれ吾が子なり)の「子」と、「是真仏子」

の「子」と、能く能く心得合わすべきなり。今、日蓮等の

たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの しゃかほうおう みこ
類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者は、釈迦法王の御子な

り。

だいじゆうはち ぜ しょてんにん せけん しげん もろもろ てん にん せけん
第十八 「是諸天人 世間之眼(これ諸の天・人の世間の

まなこ 眼なり)の事

おんぎくでん い せけん にほんこく げん
御義口伝に云わく、「世間」とは、日本国なり。「眼」

ぶつちけん

ほけきよう

しよてんせけん

げんもく

まなこ

とは、仏知見なり。法華経は諸天世間の眼目なり。眼とは

なんみようほうれんげきよう

ぜしよてんにん

せけんしげん

い

南無妙法蓮華経なり。「是諸天人 世間之眼」。また云わく

ぜしよぶつげんもく

しよぶつ

げんもく

うんぬん

まなこ

抉

「是諸仏眼目（これ諸仏の眼目なり）」云々。この眼をくじ

もの

ぜん ねんぶつ

しんごんしゆうとう

まなこ

めき

いま

る者は、禅・念仏・真言宗等なり。眼とは目聞きなり。今、

にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

しよてんせけん

日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉るは、諸天世間の

まなこ

うんぬん

眼にあらずや云々。

だいじゆうく

のうしゆゆせつ

よ

しゆゆ

と

こと

第十九 「能須臾説（能く須臾も説く）」の事

おんぎくでん

い

のう

いちじ

おも

せつ

御義口伝に云わく、「能」の一字、これを思うべし。「説」

なんみようほうれんげきよう

いま

にちれんとう

たぐ

のうしゆゆ

とは、南無妙法蓮華経なり。今、日蓮等の類いは、「能須臾

説」の行者なり云々。

だいにじゆう しきようなんじ きよう たも がた こと

第二十 「此経難持（この経は持ち難し）」の事

おんぎくでん い きようもん さんがく とも つた

御義口伝に云わく、この经文にて三学を俱に伝うるな

こくうふどうかい こくうふどうじよう こくうふどうえ さんがく とも つた

り。「虚空不動戒・虚空不動定・虚空不動慧の三学を俱に伝

な みようほう い かい しきほう じよう

うるを、名づけて妙法と曰う」と。「戒」とは色法なり、「定」

しんぼう え しきしんにほう ふ ま く とも

とは心法なり、「慧」とは、色心二法の振る舞いなり。「俱（俱

じ なんみようほうれんげきよう いちねんさんぜん だん つた

に）」の字は、南無妙法蓮華経の一念三千なり。「伝（伝う）」

まつほうばんねん さ いま にちれんとう たぐ

とは、末法万年を指すなり。今、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう とな たてまつ ごんきよう むどくどう ほげきよう

南無妙法蓮華経と唱え奉り、権教は無得道、法華経は

しんじつ しゆぎよう

かい

ひ

ふせ

あく

とど

真実と修行する、これは「戒」なり。「非を防ぎ悪を止む」

ぎ たも

ぎようじや

けつじようむうぎ

けつじよう

うたが

の義なり。持つところの行者、「決定無有疑（決定して疑

ぶつたい

さだ

じよう

いあることなけん）の仏体と定むる、これは「定」なり。

さんぜ しょうぶつ

ちえ

いっぺん

だいもく

じゆじ

え

三世の諸仏の智慧を一返の題目に受持する、これは「慧」

さんがく

ひにくこつ

さんじん

さんたい

さんき

さんちとう

なり。この三学は皮肉骨・三身・三諦・三軌・三智等なり。

だいはだつたほんはちか

だいじ

提婆達多品八箇の大事

だいいち

だいはだつた

こと

第一 「提婆達多」の事

もんぐ

はち

い

ほんじ

しょうりよう

しゃく

てんねつ

文句の八に云わく「本地は清涼にして、迹に天熱を

しめ
示す。

おんぎくでん い だいば ほんじ もんじゆ ほんじ
御義口伝に云わく、「提婆」とは、本地は文殊なり。「本地

しょうりよう しい しゃく だいば い しゃく
は清涼なり」と云えばなり。迹には提婆と云う。「迹に

てんねつ しめ しょうりよう みず しょうじそく
天熱を示す」これなり。「清涼」は水なり、これは生死即

ねはん てんねつ ひ ほんのうそくぼだい いま
涅槃なり。「天熱」は火なり、これは煩惱即菩提なり。今、

にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ ほんのうそく
日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉るは、煩惱即

ぼだい しょうじそくねはん
菩提・生死即涅槃なり。

だいば みようほうれんげきよう べつみよう かこ とぎ あし
「提婆」は妙法蓮華経の別名なり。過去の時に「阿私

せんニン あしせんニン みようほう いみよう あ
仙人」なり。「阿私仙人」とは、妙法の異名なり。「阿」と

は無の義なり。「私無きの法」とは、妙法なり。文句の八

に云わく「私無きの法をもつて衆生に灑ぐ」と云えり。

「阿私仙人」とは、法界三千の別名なり。故に私無きな

り。一念三千これを思うべし云々。

第二「若不違我、当為宣説（もし我に違わずんば、当にた

めに宣説すべし）」の事

御義口伝に云わく、妙法蓮華経を宣説すること、汝は

我に違わずして宣説すべしということなり。「若」の字は

汝なり。天台云わく「法を受けて奉行す」。今、日蓮等の類

い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者は、日蓮に違わずして

せんぜつ

なんみようほうれんげきよう とな たてまつ

もの

にちれん

たが

うんぬん

宣説すべきなり。「阿私仙人」とは、南無妙法蓮華經なり云々。

だいさん

さいかきゆうすい

しゅうしんせつじき

このみ

と

みず

く

たきぎ

第三 「採菓汲水、拾薪設食（菓を採り水を汲み、薪を

ひろ

じき

もう

こと

拾い食を設く」の事

おんぎくでん

い

さいか

ちぼんのう

きゆうすい

御義口伝に云わく、「採菓」とは、癡煩惱なり。「汲水」

とんぼんのう

しゅうしん

しんぼんのう

せつじき

とは、貪煩惱なり。「拾薪」とは、瞋煩惱なり。「設食」と

まんぼんのう

しも

はつしゆ

きゆうじ

あ

ほか

は、慢煩惱なり。この下に八種の給仕これ有り。この外に

みようほうれんげきよう

でんじゆ

な

いま

にちれんとう

たぐ

妙法蓮華經の伝受これ無きなり。今、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

すなわ

せんざいきゆうじ

南無妙法蓮華經と唱え奉るは、即ち千歳給仕なり。これ

すなわ いちねんさんぜん

とん じん ち まん たいじ

即ち一念三千なり。貪・瞋・癡・慢を対治するなり。

だいし じょうぞんみょうほうこ しんしんむ げげん こころ みょうほう そん

第四 「情存妙法故 身心無懈倦（情に妙法を存せるが

ゆえ しんしん げげん な

こと

故に、身心に懈倦無し」の事

おんぎくでん

い

しんしん

にじ

しきしん

みょうほう

御義口伝に云わく、「身心」の二字、色心は妙法なり

でんじゆ

にちれんとう

たぐ

なんみょうほうれんげきよう

とな

たてまつ

と伝受するなり。日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉

そくしんじようぶつ

しんしんむげん

しんしんものう

つて即身成仏す。「身心無倦（身心倦きことなし）」とは、

いちねんさんぜん

うんぬん

一念三千なり云々。

だいご

が おお かいちゆうゆい

せんぜつみょうほけきよう

われ

かいちゆう

第五 「我於海中唯常宣説妙法華経（我は海中において、

つね

みょうほけきよう

せんぜつ

こと

ただ常に妙法華経のみを宣説す」の事

おんぎくでん い が おんぎくでん い
御義口伝に云わく、「我」とは、文殊なり。「海」とは、

しょうじ かい ゆい ゆい いういちじょうほう いちじょう ほう
生死の海なり。「唯」とは、「唯有一乘法（ただ一乗の法の

あ じょう じゅう し せつ ぼう つね じゅう
み有り）」なり。「常」とは、「常住此説法（常にここに住

ほう と みようほけきよう ほうかい ごんごおんじよう
して法を説く）」なり。「妙法華経」とは、法界の言語音声

いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ
なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る、

しょうじ かいすなわ しんによ たいかい が ほうかい
これなり。生死の海即ち真如の大海なり。「我」とは、法界

ちえ もんじゆ うんぬん
の智慧なり、文殊なり云々。

だいろうく ねんしはっさい ねんはじ はっさい こと
第六 「年始八歳（年始めて八歳）」の事

おんぎくでん い はっさい はっかん だいば
御義口伝に云わく、「八歳」とは、八卷なり。提婆は

おんぎくでん い はっさい はっかん だいば
御義口伝に云わく、「八歳」とは、八卷なり。提婆は

じごくかい

りゆうによ

ぶっかい

じっかいごご

地獄界なり、竜女は仏界なり。しかるあいだ、十界互具・

ひやつかいせんによ

いちねんさんぜん

百界千如・一念三千なり。

い

はっさい

ほけきようはっかん

われ はっく

また云わく、「八歳」とは、法華経八卷なり。我ら八苦

ぼんのう

そう

ほけきよう

じようぶつ

はっさい

こころう

の煩惱なり。総じて、法華経の成仏は八歳なりと心得べし。

はっく

すなわ

はっかん

はっく

はっかん

すなわ

はっさい

りゆうによ

八苦は即ち八卷なり。八苦・八卷は、即ち八歳の竜女と

あらわ

顕るるなり。

いちぎ

い

はっさい

歳

八

よ

一義に云わく、「八歳」のことは「たまをひらく」と読

たま

りゆうによ

いっしん

ひらく

さんぜん

むなり。「歳」とは、竜女の一心なり。「八」とは、三千な

さんぜん

ほっけ

はっかん

はっさい

り。三千とは、法華の八卷なり。よつて、「八歳」とは

かいぶつちけん ぶつちけん ひら

しよひよう

ちえりこん

「開仏知見（仏知見を開く）」の所表なり。「智慧利根」よ

のうじぼだい よ ぼだい いた

ほつけ きにゆう

り「能至菩提（能く菩提に至れり）」まで、法華に帰入する

なか しんねんくえん こころ おも くち の

なり。この中に「心念口演（心に念い口に演ぶ）」とは、口業

しいわげ しい わげ いごう かつのう

なり。「志意和雅（志意は和雅なり）」とは、意業なり。「悉能

受持、深入禅定（ことごとく能く受持し、深く禅定に入

る）」とは、身業なり。三業即三徳なれば、三諦法性なり。

また云わく「心念」とは、一念なり。「口演」とは、三千な

り。「悉能受持」とは、竜女、法華経を受持するの文なり。

「歳」とは、如意宝珠なり、妙法なり。「八」とは、色心を

妙法と開くなり。

だいしち ごんろん みこつ ごんろん

第七 「言論未訖（言論いまだ訖わらず）」の事

おんぎくでん い もん むみようそくほつししよう みようもん

御義口伝に云わく、この文は無明即法性の明文なり。

ゆえ ちしやく なんもん ことば お りゆうによ

その故は、智積の難問の言いまだ訖わらざるに、竜女、

さんぎようはん げ こた なんもん こころ べつきよう こころ

三行半の偈をもつて答うるなり。難問の意は別教の意

むみよう りゆうによ こた えんぎよう こころ ほつしよう

なり、無明なり。竜女の答えは円教の意なり、法性な

ちしやく がんぼん むみよう りゆうによ ほつしよう によん

り。智積とは、元品の無明なり、竜女とは、法性の女人な

むみよう そく ほつしよう ほつしよう そく むみよう

り。よつて、無明に即する法性、法性に即する無明なり。

いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ ごんろん

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉るは、「言論

みこつ

未訖みこつなり。「時とき」とは、上かみのことの末すえ、末すえのことの始めはじな

とき

むみよう

ほつしようどうじ

とき

なんみようほうれんげきよう

り。「時とき」とは、無明・法性同時の時なり。南無妙法蓮華經

とな

たてまつ

とき

と唱え奉る時なり。

ちしやくぼさつ

がんぼん

むみよう

い

ふしんしによ

智積菩薩を元品の無明と云うことは、「不信此女ふしん（この

むすめ

しん

ふしん

にじ

ふしん

ぎわく

女を信ぜず）の不信の二字なり。「不信」とは、疑惑なり。

ぎわく

こんぼんむみよう

い

りゆうによ

ほつしよう

い

疑惑を根本無明と云うなり。竜女を法性と云うことは、

がせんだいじようきよう

われ

だいじよう

おし

ひら

もん

「我闡大乘教（我は大乘の教えを闡く）」の文なり。

りゆうによ

りゆう

ちち

によ

はつさい

むすめ

「竜女」とは、「竜」は父なり、「女」は八歳の娘な

りゆうによ

にじ

ふしどうじ

じようぶつ

ゆえ

り。「竜女」の二字は、父子同時の成仏なり。その故は、

じりゆうおうによ　とき　りゆうおう　むすめ　もん　すで　りゆうおう

「時竜王女（時に竜王の女）」の文これなり。既に「竜王

によ　い　りゆうおう　ちち　によ　はっさい　こ

女」と云うあいだ、「竜王」は父なり、「女」とは八歳の子な

むすめ　じようぶつ　ほん　ちち　りゆう　じようぶつ

り。されば、女の成仏はこの品にあり。父の竜の成仏は

じよほん　あ　うはちりゆうおう　はちりゆうおうあ　もん

序品にこれ在り。「有八竜王（八竜王有り）」の文これな

ふしどうじ　じようぶつ　じよほん　いつきよう

り。しかりといえども、父子同時の成仏なり。序品は一経

じよ　ゆえ

の序なる故なり。

うもんじようぼだい　き　ぼだい　じよう　りゆうによ

「又聞成菩提（また聞いて菩提を成ず）」とは、竜女

ちしやく　せ　ちよび　わ　じようぶつ　ほとけ

が智積を責めたる言なり。されば、ただ我が成仏をば仏

ごぞんち　うもんじようぼだい　ゆいぶつとうししようち

のみ御存知あるべしとて、「又聞成菩提　唯仏当証知（ま

た聞いて菩提ぼだいを成じようずること、ただ仏ほとけのみ当まさに証知しようちしたも

うべし」と云いえり。「苦衆生くしゆじよう（苦くの衆生しゆじよう）」とは、別べつして

女人にょにんのことなり。この三行半さんぎようはんの偈げは、一念三千いちねんさんぜんの法門ほうもんなり。

「遍照へんじよう於十方おじつぽう（あまねく十方じつぽうを照てらしたもう）」とは、十界じっかい

なり。

殊ことには、この八歳はっさいの竜女りゆうによの成仏じようぶつは、帝王持経ていおうじきようの先祖せんぞ

り。人王にんのうの始めはじめは、神武天皇じんむてんのうなり。神武天皇じんむてんのうは地神五代ちじんごだいの

第五だいごの鵜萱葺うがやふきあえずのみこと不合尊みこの御子みこなり。この葺不合尊ふきあえずのみことは豊玉姫とよたまひめの

子こなり。この豊玉姫とよたまひめは沙竭羅竜王しゃがらりゆうおうの女むすめなり。八歳はっさいの竜女りゆうによ

あね
の姉なり。しかるあいだ、先祖は法華經の行者なり。甚深、
じんじんうんぬん
甚深云々。

されば、この提婆の一品は、一天の腰刀なり。無明・
だいば いっぽん いってん こしがたな むみよう

煩悩の敵を切り、生死愛著の繩を切る秘法なり。漢高
ぼんのう かたき き しょうじあいじやく なわ き ひほう かんこう

三尺の劍も一字の智劍に及ばざるなり。妙の一字の智劍
さんじやく つるぎ いちじ ちけん およ みよう いちじ ちけん

をもって、生死・煩悩の繩を切るなり。
しょうじ ぼんのう なわ き

提婆は火炎を顕し、竜女は大蛇を示し、文殊は智劍を
だいば かえん あらわ りゆうによ だいじゃ しめ もんじゆ ちけん

顕すなり。よって、不動明王の尊形と口伝せり。提婆は我
あらか ぶどうみようおう そんぎよう くでん だいば われ

らが煩悩即菩提を顕すなり。竜女は生死即涅槃を顕すな
ぼんのうそくぼだい あらわ りゆうによ しょうじそくねはん あらわ

もんじゅ

みょうとく

ほん

ぼんのう

しやうじ

り。文殊をば、ここには「妙徳」と翻ずるなり。煩惱・生死

ぐそく

とうほん

のうけ

具足して当品の能化なり。

だいはち

ういちほうしゅ

ひと

ほうしゅあ

こと

第八 「有一宝珠（一つの宝珠有り）」の事

もんぐ

はち

い

いち

たま

けん

えんげ

う

文句の人に云わく「一とは、珠を献じて円解を得るこ

あらわ

とを表す」。

おんぎくでん

い

いち

みょうほうれんげきやう

ほう

御義口伝に云わく、「一」とは、妙法蓮華経なり。「宝」

みょうほう

ゆう

しゅ

みょうほう

たい

みょう

ゆえ

とは、妙法の用なり。「珠」とは、妙法の体なり。妙の故

しんぼう

ほう

ゆえ

しきほう

しきほう

しゅ

しんぼう

に心法なり。法の故に色法なり。色法は「珠」なり、心法は

ほう

みょうほう

しきしんふに

いちねんさんぜん

しよひやう

「宝」なり。妙法とは色心不二なり。一念三千の所表と

りゆうによ ほうしゆ たてまつ

して、竜女の宝珠を奉るなり。釈しゃくに「円解えんげを得ること

あらわ い いちねんさんぜん りゆうによ て たも とき

を表す」と云うは、一念三千なり。竜女が手に持てる時は、

しょうとく ほうしゆ ほとけう と たも とき しゆとく ほうしゆ

性得の宝珠なり。仏受け取り給う時は、修得の宝珠なり。

なか あ しゆしやうふ に じんしつ と

中に有るは修性不二なり。「甚疾じんしつ（はなはだ疾し）」とは、

とんごく とんそく とんしやう ほうもん そくいしつとく むじやうぶつどう すなわ

頓極・頓速・頓証の法門なり。「則為疾得 無上仏道（則

と むじやう ぶつどう え

ちこれ疾く無上の仏道を得ん）」なり。

じんりき じん しんぽう りき しきほう

「神力」とは、「神」は心法なり、「力」とは色法なり。

かんが じやうぶつ わ じやうぶつ み しやりほつ りゆうによ

「観我成仏（我が成仏を観よ）」とは、舍利弗の竜女が

じやうぶつ おも ひがごと わ じやうぶつ み せ

成仏と思うは僻事なり、我が成仏ぞと観よと責めたるな

観かんに六即ろくそくの観かんこれ有りあ。ここもとの観かんは、名字即みょうじそくの観かんと
こころこころ　ゆえ　なんみようほうれんげきよう　き

心得こころべきなり。その故ゆえは、南無妙法蓮華經なんみようほうれんげきようと聞きけるところ

いちねん　どうじよう　ざ　じようぶつむな

を、「一念いちねんも道場どうじように坐ざすれば、成仏じようぶつ虚むなしからざるなり」と

い　へんじようなんし　へん　なんし　な　りゆうによ　ほんじ

云いえり。「変成へんじよう男子なんし(変じて男子なんしと成なる)」とは、竜女りゆうにょも本地ほんじ

なんみようほうれんげきよう

は南無妙法蓮華經なんみようほうれんげきようなり。その意こころ、經文きようもんに分明ふんみようなり。

かんじほんじゆうさんか　だいいじ
勸持品十三箇の大事

だいいち　かんじ　こと
第一 「勸持」の事

おんぎくでん　い　かん　けた　じ　じぎよう
御義口伝おんぎくでんに云いわく、「勸かん」とは化他けた、「持じ」とは自行じぎような

り。南無妙法蓮華経は、自行・化他に亘るなり。今、日蓮等

の類い、南無妙法蓮華経を勧めて持たしむるなり。

第二 「不惜身命（身命を惜しまず）」の事

御義口伝に云わく、「身」とは色法、「命」とは心法な

り。事・理の不惜身命これ有り。法華の行者、田畠等を奪

わるるは、理の不惜身命なり。命根を断たるるをば、事の

不惜身命と云うなり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経

と唱え奉る者は、事・理共に値うなり。

第三 「心不実故（心は不実なるが故に）」の事

おんぎくでん い しんふじつこ ほっけさいだいいち
御義口伝に云わく、「心不実故」とは、「法華最第一」

きようもん だいさん よ さいいごじよう もつと かみ
の経文を「第三」と読み、「最為其上（最もこれその上な

きようもん さいいごげ よ ほけきよう いちねんさんぜん
り）の経文を「最為其下」と読んで、法華経の一念三千を

けごん だいにちとう あ ほっけ そくしんじようぶつ だいにちきよう と
華嚴・大日等にこれ有り、法華の即身成仏を大日経に取

い みな しんふじつこ いま にちれんとう たぐ
り入るるは、これらは皆「心不実故」なり。今、日蓮等の類

なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの しんじつ うんぬん
い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、「心実」なるべし云々。

だいし きようじゆんぶつ い ぶつ い きようじゆん こと
第四 「敬順仏意（仏意に敬順す）」の事

おんぎくでん い ほけきよう じゆん きようじゆんぶつ い
御義口伝に云わく、法華経に順ずるは、「敬順仏意」

なり。 「意」 い なんみようほうれんげきよう いま にちれんとう
とは、南無妙法蓮華経これなり。今、日蓮等の

たぐ 類い、南無妙法蓮華經と唱え奉るは、「敬順仏意」の意
なり。

第五 「作師子吼（師子吼を作す）」の事

御義口伝に云わく、「師子吼」とは、仏の説なり。説法

とは法華、別しては南無妙法蓮華經なり。

「師」とは師匠授くるところの妙法、「子」とは弟子受

くるところの妙法、「吼」とは師弟共に唱うるところの音声

なり。「作」とは、「おこす」と読むなり。末法にして

南無妙法蓮華經を作すなり。

だいろく

によほうしゆぎよう

ほう

しゆぎよう

こと

第六 「如法修行（法のごとく修行す）」の事

おんぎくでん

い

によほうしゆぎよう

ひと

てんだい

みようらく

御義口伝に云わく、「如法修行」の人とは、天台・妙楽・

でんぎようとう

いま

にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

伝教等なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉

によほうしゆぎよう

うんぬん

るは、「如法修行」なり云々。

だいしち

うしよむ

ちにん

むち

ひとあ

こと

第七 「有諸無智人（諸の無智の人有り）」の事

おんぎくでん

い

いちもんふつう

だいぞく

あつく

めりとう

御義口伝に云わく、一文不通の大俗なり。悪口・罵詈等、

ふんみよう

にほんこく

ぞく

しよ

い

分明なり。日本国の俗を、「諸」と云うなり。

だいはち

あくせちゆうびく

あくせ

なか

びく

こと

第八 「悪世中比丘（悪世の中の比丘）」の事

おんぎくでん

い

あくせちゆうびく

あくせ

まつぼう

御義口伝に云わく、「悪世中比丘」の「悪世」とは末法

びく

ほうぼう

こうぼうとう

ほつけ

しやうち

なり、「比丘」とは謗法たる弘法等これなり。法華の正智を

す ごんきよう

じゃち

もと

いま

にちれんとう

たぐ

捨てて権教の邪智を本とせり。今、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

もの

しやうち

なか

だいしやうち

南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、正智の中の大正智なり。

だいく

わくうあれんにや

あれんにや

あ

こと

第九 「或有阿練若（あるいは阿練若に有り）」の事

おんぎくでん

い

だいさん

びく

りようかんと

によ

御義口伝に云わく、第三の比丘なり、良観等なり。「如

ろくつうらかん

ろくつう

らかん

ひと

おも

六通羅漢（六通の羅漢のごとし）の人の人と思ふなり。

だいいじゆう

じさしきようてん

みずか

きようてん

つく

こと

第十 「自作此經典（自らこの經典を作る）」の事

おんぎくでん

い

ほけきよう

しよさ

よ

ぼう

御義口伝に云わく、「法華経を所作して読む」と謗すべ

きようもん

うんぬん

しという経文なり云々。

だいじゆういち

い ししよきようごん

によとうかいぜぶつ

かる

第十一

「為斯所軽言

汝等皆是仏

（これの軽んじて、

なんだち

みな

ほとけ

い

こと

「汝等は皆これ仏なり」と言うところとならん」の事

おんぎくでん

い

ほけきよう

ぎようじゃ

あなど

い

ほとけ

御義口伝に云わく、法華経の行者を蔑り、生き仏と

い

きようもん

かる

こころ

そし

云うべしという経文なり。これは軽んずる心をもつて謗

いま

にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

もの

るなり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者

い

を云うべきなり。

だいじゆうに

あつきにゆうごしん

あつき

み

い

こと

第十二 「悪鬼入其身（悪鬼はその身に入る）」の事

おんぎくでん

い

あつき

ほうねん

こうぼうとう

御義口伝に云わく、「悪鬼」とは、法然・弘法等これな

にゆうごしん

こくおう

だいじん

ばんみんとう

り。「入其身」とは、国王・大臣・万民等のことなり。

いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの
今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者を、

あだ 怨むべしということなり。「鬼」とは、「奪命者（命を奪う
もの だつくどくしゃ くどく うば もの い ほけきよう

者）」にして、「奪功德者（功德を奪う者）」と云うなり。法華経
さんぜ しょぶつ みようこん きよう いっさい もろもろ ぼさつ

は三世の諸仏の命根なり。この経は一切の諸の菩薩の
くどく おさ おんきよう

功德を納めたる御経なり。

第十三 「但惜無上道（ただ無上道を惜しむのみ）」の事
だいじゅうさん たんしゃくむじようどう むじようどう お こと

おんぎくでん い むじようどう なんみようほうれんげきよう
御義口伝に云わく、「無上道」とは、南無妙法蓮華経こ

れなり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経を惜しむことは、
いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう お

命根よりも惜しきことなり。
みようこん お

これによつて結ぶ処に、「仏自知我心（仏は自ら我が
心を知ろしめせ）」と説かれたり。法華經の行者の心中を
ば、教主釈尊、御存知有るべきなり。「仏」とは釈尊、「我
心」とは、今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る
者なり。

あんらくぎようほんごか だいじ
安樂行品五箇の大事

だいいち
第一 「安樂行品」の事

おんぎくでん い みようほうれんげきよう あんらく ぎよう
御義口伝に云わく、妙法蓮華經を安樂に行ぜんこと、

まつぼう

いま にちれんとう たぐ

しゆぎよう

みようほうれんげきよう

末法において、今、日蓮等の類いの修行は、妙法蓮華経を

しゆぎよう

なんきた

あんらく

こころう

修行するに、難来るをもつて安楽と意得べきなり。

だいに

いつさいほうくう

いつさい

ほう

くう

こと

第二 「一切法空（一切の法は空なり）」の事

おんぎくでん い

しも

じゆうはつくう

あ

御義口伝に云わく、この下において十八空これ有り。

じゆうはつくう

たい

なんみようほうれんげきよう

じゆうはつくう

十八空の体とは、南無妙法蓮華経これなり。十八空は、

みようほう

いずれも妙法のことなり。

だいさん

うしよなんもん

ふ

いししようじようほうとう

なんもん

あ

第三 「有所難問、不以小乘法答（難問するところ有らば、

しようにじよう

ほう

こと

とう

こと

小乗の法をもつて答えず）」等の事

おんぎくでん い

たいじ

とき

ごんきよう

えつう

御義口伝に云わく、対治の時は、権教をもつて会通す

いっさいしゅち

なんみょうほうれんげきよう

いっさい

べからず。「一切種智」とは、南無妙法蓮華經なり。「一切」

ばんぶつ

しゅち

ばんぶつ

たね

みょうほうれんげきよう

は万物なり、「種智」は万物の種なり、妙法蓮華經これな

り。

い

いっさいしゅち

われ

いっしん

いっしん

また云わく、「一切種智」とは、我らが一心なり。一心

ばんぼう

そうたい

おも

とは万法の総体なり、これを思うべし。

だいし

むもふい

かとうじようとう

ふい

とうじよう

くわ

第四 「無有怖畏 加刀杖等 (怖畏し、刀杖を加えられる

とうあ

こと

等有ることなし)の事

おんぎくでん

い

しやつけ

ぼさつ

とうじよう

なん

あ

御義口伝に云わく、迹化の菩薩に刀杖の難これ有るべ

きようもん

からずという経文なり。

かんじほん

まつぼう

ほっけ

ぎょうじゃ

ぎゅうかとうじょうしや

勸持品には、末法の法華の行者に「及加刀杖者（お

とうじょう

くわ

もの

さくさくけんひんずい

ひんずい

よび刀杖を加うる者）」数々見擯出（しばしば擯出せられ

ほん

な

かれ

まつぼう

しゃくぶく

しゆぎよう

ん」とあり。この品にはこれ無し。彼は末法の折伏の修行、

ほん

ぞうぼう

しやうじゆ

しゆぎよう

ゆえ

うんぬん

この品は像法の摂受の修行なるが故なり云々。

だいご

うにん

らいよくなんもんしや

しよてんちゆうや

ひとあ

きた

なんもん

第五 「有人、来欲難問者、諸天昼夜（人有り、来つて難問

ほつ

しよてん

ちゆうや

とう

こと

せんと欲せば、諸天は昼夜に）等の事

おんぎくでん

い

まつぼう

ほっけ

ぎよう

もの

御義口伝に云わく、末法において法華を行ずる者をば、

しよてん

しゆご

あ

じやういほうこ

つね

ほう

ゆえ

諸天の守護これ有るべし。「常為法故（常に法のための故に）」

ほう

なんみようほうれんげきよう

の「法」とは、南無妙法蓮華経これなり。

ゆじゅつぼんいつか だいじ

涌出品一箇の大事

だいいち

しょうどうし

しょうどう

し

こと

第一 「唱導之師（唱導の師）」の事

おんぎくでん

い

ゆじゅつ

いっぼん

ほんげ

御義口伝に云わく、涌出の一品は、ことごとく本化の

ぼさつ

ほんげ

ぼさつ

しよさ

なんみようほうれんげきよう

菩薩のとなり。本化の菩薩の所作は、南無妙法蓮華経な

しょう

どう

にほんこく

いっさいしゅじよう

り。これを「唱」といふなり。「導」とは、日本国の一切衆生

りようぜんじようど

いんどう

まつぼう

どうし

ほんげ

かぎ

を靈山浄土へ引導することなり。末法の導師とは本化に限

し

い

るといふを「師」と云ふなり。

しだいぼさつ

しやく

とき

しよ

く

う

この四大菩薩のことを釈する時、疏の九を受けて

ふしようき く い きよう しどうしあ いま しとく あらわ
輔正記の九に云わく「経に四導師有りとは、今、四徳を表

す。『上行』は我を表し、『无边行』は常を表し、『浄行』
じようぎよう が あらわ むへんぎよう じよう あらわ じようぎよう

は浄を表し、『安立行』は楽を表す。ある時には、一人
じよう あらわ あんりゆうぎよう らく あらわ とき いちにん

にこの四義を具す。二死の表に出ずるを『上行』と名づ
だん じよう きわ こ むへんぎよう じよう ごじゆう くるい

け、断・常の際を踰ゆるを『无边行』と称し、五住の垢累
こ ゆえ じようぎよう な どうじゆ とくまじ

を超ゆるが故に『浄行』と名づけ、道樹にして徳円かな
ゆえ あんりゆうぎよう い

るが故に『安立行』と曰うなり。いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、
みなじゆ るるい

皆地涌の流類なり。

また云わく、い火は物ひを焼くをもつて行とし、ぎよう水は物みずを

きよ浄むるをもつて行とし、かぜ風は塵垢じんくを払うをもつて行とし、ぎようまた云わく、

だいち大地は草木そうもくを長ずるをもつて行とするなり。ぎよう四菩薩しぼさつの利

やく益しぼさつこれなり。ぎよう四菩薩ふどうの行は不同なりといえども、ともに

みよう妙法蓮華經しゆぎようの修行なり。

しぼさつこの四菩薩かほうは「下方」に住するが故ゆえに、しやく釈ほつしように「法性

えんの淵底げんしゆう、ごくじ玄宗の極地い」と云えり。かほう「下方」をもつて住処じゆうしよと

かほうす。「下方」しんりとは真理なり。ふしようき輔正記いに云わく「『下方』かほうとは、

ししようこう生公いの云わく『理りに住するなり』と』云々。うんぬんこの理りの住処じゆうしよ

よりあらわ 顕いれ出いざるを、事じと云いうなり。

また云いわく、千草万木、地涌じゆの菩薩ぼさつにあらずせんそうばんぼくというこ

となし。されば、地涌じゆの菩薩ぼさつを本化ほんげと云いえり。本ほんとは、過かこ去こ

久遠くおん五百塵点ごひやくじんてんよりりやくの利益りやくとして、無始無終むしむしゆうの利益りやくなり。こ

の菩薩ぼさつは本法所持ほんぽうしよじの人ひとなり。本法ほんぽうとは、南無妙法蓮華經なんみようほうれんげきような

り。この題目だいもくは、必かならず地涌じゆの所持しよじの物ものにして、迹化しやつけの菩薩ぼさつ

の所持しよじにあらず。この本法ほんぽうの体たいより用ゆうを出いだして、止觀しかんと弘ひろ

め、一念三千いちねんさんぜんと云いう。総そうじて大師だいし・人師にんしの所しよしやく積みようほうも、この妙法みようほう

の用ゆうを弘ひろめ給たもうなり。

この本法を受持するは、信の一字なり。元品の無明を
対治する利剣は、信の一字なり。「疑いなきを信と曰う」の
釈、これを思うべし云々。

御義口伝卷上

弘安元年戊寅正月一日

執筆 日興

御義口伝卷下

日蓮所立。寿量品より開結二経に至る。

じゆりようほんにじゆうしちか だいじ

寿量品二十七箇の大事

だいいち

なんみようほうれんげきようによらいじゆりようほんだいいじゆうろく

こと

第一 「南無妙法蓮華経如来寿量品第十六」の事

もんぐく

く

い

によらい

じつぼうさんぜ

しよぶつ

にぶつ

文句の九に云わく『如来』とは、十方三世の諸仏、二仏、

さんぶつ

ほんぶつ

しやくぶつ

つうじう

べつ

ほんじさんぶつ

べつじう

三仏、本仏・迹仏の通号なり。別しては本地三仏の別号な

じゆりよう

せんりよう

じつぼうさんぜ

しよぶつ

くどく

せんりよう

り。『寿量』とは、詮量なり。十方三世の諸仏の功德を詮量

ゆえ

じゆりようほん

い

す。故に『寿量品』と云う。

おんぎくでん

い

ほん

だいまく

にちれん

み

あ

御義口伝に云わく、この品の題目は日蓮が身に当たる

だいじ

じんりきほん

ふぞく

大事なり。神力品の付嘱これなり。

によらい

しやくそん

そう

じつぼうさんぜ

しよぶつ

べつ

「如来」とは釈尊、総じては十方三世の諸仏なり、別

しては本地ほんじの無作むさの三身さんじんなり。今いま、日蓮等にちれんとうの類たぐいの意いは、

総じては「如来」とは一切衆生じゅうじやうなり、別しては日蓮にちれんの弟子でし

檀那だんななり。されば、無作むさの三身さんじんとは、末法まつぽうの法華經ほけきやうの行者ぎやうじやな

り。無作むさの三身さんじんの宝号ほうごうを、「南無妙法蓮華經なんみようほうれんげきやう」と云いうなり。

寿量品じゆりやうほんの事じの三大事さんだいごととは、これなり。

ろくそく はいりゆう とき ほん によらい りそく ほんぷ

六即ろくそくの配立はいりゆうの時は、この品ほんの如来によらいは理即りそくの凡夫ほんぷなり。

頭こうべに南無妙法蓮華經なんみようほうれんげきやうを頂戴ちゆだいし奉たてまつる時とき、名字みやうじそく即そくなり。その

故ゆえは、始めて聞きくところの題目だいもくなるが故ゆえなり。聞きき奉たてまつつ

て修行しゆぎやうするは、觀行かんぎやうそく即そくなり。この觀行かんぎやうそく即そくとは、事じの一念いちねん

て修行しゆぎやうするは、觀行かんぎやうそく即そくなり。この觀行かんぎやうそく即そくとは、事じの一念いちねん

て修行しゆぎやうするは、觀行かんぎやうそく即そくなり。この觀行かんぎやうそく即そくとは、事じの一念いちねん

て修行しゆぎやうするは、觀行かんぎやうそく即そくなり。この觀行かんぎやうそく即そくとは、事じの一念いちねん

て修行しゆぎやうするは、觀行かんぎやうそく即そくなり。この觀行かんぎやうそく即そくとは、事じの一念いちねん

て修行しゆぎやうするは、觀行かんぎやうそく即そくなり。この觀行かんぎやうそく即そくとは、事じの一念いちねん

て修行しゆぎやうするは、觀行かんぎやうそく即そくなり。この觀行かんぎやうそく即そくとは、事じの一念いちねん

て修行しゆぎやうするは、觀行かんぎやうそく即そくなり。この觀行かんぎやうそく即そくとは、事じの一念いちねん

さんぜん ほんぞん かん

わくしよう ふく

そうじそく

三千の本尊を觀ずるなり。さて、惑障を伏するを、相似即

いと云うなり。化他に出ずるを、分真即と云うなり。無作の三

身の仏なりと究竟したるを、究竟即の仏とは云うなり。

総じて伏惑をもつて寿量品の極とせず。ただ凡夫の

当体、本有のままを、この品の極理と心得べきなり。無作

の三身の所作は何物ぞという時、南無妙法蓮華経なり云々。

第二 「如来秘密・神通之力（如来の秘密・神通の力）」の

事

御義口伝に云わく、無作の三身の依文なり。この文に

おんぎくでん い むさ しんじん えもん もん

だいによらいひみつ じんずうしりき によらい ひみつ じんずう ちから

さんじん しよさ なにもの とき なんみようほうれんげきよう うんぬん

とうたい ほんぬ ほん ごくり こころう ぼんぶ

ぶくわく じゆりようほん ごく

くきよう くきようそく ほとけ

ぶくわく じゆりようほん ごく

さんぜん ほんぞん かん わくしよう ふく そうじそく

おいて重々の相伝これ有り。「神通之力」とは、我ら衆生

じゆうじゆう そうでん あ じんずうしりき われ しゆじよう
ささほつほつ ふ ま じんずう い ごくそつ

の作々発々と振る舞うところを、「神通」と云うなり。獄卒の

罪人を呵責する音も、皆「神通之力」なり。生住異滅森羅三千

ざいにん かしゃく おと みな じんずうしりき しようじゆういめつしんらさんぜん
とうたい じんずうしりき たい いま にちれんとう たぐ

の当体、ことごとく「神通之力」の体なり。今、日蓮等の類

こころ そくしんじようぶつ かいかく によらいひみつ じんずうしりき

いの意は、即身成仏と開覚するを、「如来秘密・神通之力」

い じようぶつ ほか じんずう ひみつ

とは云うなり。成仏するより外の「神通」と「秘密」とは

な むさ さんじん いちじ

これ無きなり。この無作の三身をば、一字をもつて得たり。

え

いわゆる「信」の一字なり。よつて、経に云わく

しん いちじ きよう い

「我等当信受仏語（我らは当に仏の語を信受したてまつ

がごうとうしんじゆぶつご われ まさ ほとけ みこと しんじゆ

るべし)。 「信受」の二字に意を留むべきなり。

だいさん がじつじょうぶついらい むりようむへん われ じつ じょうぶつ

第三 「我実成仏已来、無量無辺（我は実に成仏してより

このかた むりようむへん とう こと

已来、無量無辺なり) 等の事

おんぎくでん い が しゃくそん くおんじつじょうどう

御義口伝に云わく、「我」とは、釈尊の久遠実成道な

りということ説かれたり。しかりといえども、当品の意

と ほうかい しゆじょう じっかいここ さき とうほん こころ

は、「我」とは、法界の衆生なり。十界己々を指して「我」

い じつ むさ さんじん ほとけ さだ

と云うなり。「実」とは、無作の三身の仏なりと定めたり。

ひつ い じょう のうじょう しょじょう

これを「実」と云うなり。「成」とは、能成・所成なり。

じょう ひら も ほうかい むさ さんじん ほとけ ひら

「成」は開く義なり。法界は無作の三身の仏なりと開き

たり。「仏ぶつ」とは、これを覚知かくちするを云いうなり。「已い」とは、

過去かこなり。「来らい」とは、未来みらいなり。「已来いらい」の言ことばの中に現在なは

有あるなり。我実がじつと成ひらけたる仏ほとけにして、已いも来らいも、無量むりようなり

無辺むへんなり。百界ひゃつかい千如せんによ・一念いちねん三千さんぜんと説とかれたり。「百ひやく」「千せん」

の二字にじは、「百ひやく」は百界ひゃつかい、「千せん」は千如せんによなり。これ即すなわち事じの

一念いちねん三千さんぜんなり。

今いま、日蓮等にちれんとうの類たぐい、南無妙法蓮華經なんみようほうれんげきようと唱となえ奉たてまつる者ものは、

寿量品じゆりようほんの本主ほんしゆなり。総そうじては、迹化しやつけの菩薩ぼさつ、この品ほんに手てを

つけ、いろう綺げき綺にあらざるものなり。彼かれは迹ひやくひようほんり表本裏か、

ほんめんしゃくり

これは本面迹裏なり。しかりといえども、しかも当品は末法

とうほん まっぼう

ようほう

の要法にあらざるか。その故は、この品は在世の脱益なり。

ゆえ

ほん

ざいせ

だつちやく

だいまく ごじ

とうこん

げしゆ

ざいせ

だつちやく

題目の五字ばかり当今の下種なり。しかれば、在世は脱益、

めつご げしゆ

げしゆ

まっぼう

せん

うんぬん

滅後は下種なり。よつて、下種をもつて末法の詮となす云々。

だいし

によらいによじつちけんさんがいしそう

むうしようじ

によらい

によじつ

さんがい

第四 「如来如実知見三界之相、無有生(如来は如実に三界

そう ちけん

しようじあ

こと

の相を知見するに、生死有ることなし)の事

おんぎくでん

い

によらい

さんがい

しゆじよう

御義口伝に云わく、「如来」とは、三界の衆生なり。こ

しゆじようじゆりようほん

まなこあ

じつかいほんぬ

じつ

の衆生寿量品の眼開けてみれば、十界本有と実のごとく

ちけん

さんがいしそう

しようろうびようし

ほんぬ

しようじ

知見せり。「三界之相」とは、生老病死なり。本有の生死と

みれば、「無有生死」なり。生死無ければ、退出も無し。た

しょうじな

むうしょうじ

しょうじな

たいしゆつ

な

だ生死無きのみにあらざるなり。生死を見て厭離するを、迷

い しかく い

ほんぬ しょうじ ちけん

いと云い、始覚と云うなり。さて、本有の生死と知見するを、

さと

い ほんがく い

いま にちれんとう たぐ

悟りと云い、本覚と云うなり。今、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう

とな たてまつ

とき ほんぬ しょうじ ほんぬ たいしゆつ

南無妙法蓮華経と唱え奉る時、本有の生死、本有の退出と

かいかく

開覚するなり。

また云わく、「無」も「有」も、「生」も「死」も、「若退

たい

にやくしゆつ

しゆつ

ざいせ

めつご

(もしは退)も「若出(もしは出)」も、「在世」も「滅後」

みなほんぬじようじゆう

ふ ま

む

ほうかい

も、「ことごとく皆本有常住の振る舞いなり。「無」とは、法界

どうじ みようほうれんげきよう ふ ま ほか な う
同時に妙法蓮華經の振る舞いより外は無きなり。「有」とは、

じごく じごく
地獄は地獄のありのまま、十界本有の妙法の全体なり。「生」
じっかいほんぬ みようほう ぜんたい
じゆりよう

とは、妙法の生なれば、随縁なり。「死」とは、寿量の死
みようほう しょう ずいえん し じゆりよう し

なれば、法界同時に真如なり。「若退」の故に滅後なり、
ほうかいどうじ しんによ にやくたい ゆえ めつご

「若出」の故に在世なり。されば、「無」「死」「退」「滅」
にやくしゆつ ゆえ ざいせ む し たい めつ

は空なり、「有」「生」「出」「在」は仮なり、「如来如実」
くう う しょう しゆつ ざい け にょらいによじつ

は中道なり。「無」「死」「退」「滅」は無作の報身なり、「有」
ちゆうどう む し たい めつ むさ ほうしん う

「生」「出」「在」は無作の応身なり、「如来如実」は無作の
しょう しゆつ ざい むさ おうじん にょらいによじつ むさ

法身なり。この三身は我が一身なり。「一身即三身を名づけ
ほっしん さんじん わ いっしん いっしんそくさんじん な

て『秘』となすひとは、これなり。「三身即一身を名づけてさんじんそくいっしん な

『密』となすみつもこの意なり。しかれば、無作の三身の当体むさ さんじん とうたい

蓮華の仏とは、日蓮が弟子檀那等なり。南無妙法蓮華經のれんげ ほとけ にちれん でしだんなとう なんみやうほうれんげきやう

宝号を持ち奉るが故なり云々。ほうごう たも たてまつ ゆえ うんぬん

第五 「若仏久住於世、薄徳之人不種善根、貧窮下賤、貪著だいご にやくぶつくじゆうおせ はくとくしにんふしゆぜんこん びんぐげせん とんじやく

五欲、入於憶想妄見網中（もし仏久しく世に住せば、薄徳ごよく にゆうおおくそうもうけんもうちゆう ほとけひさ よ じゆう はくとく

の人は善根を種えず、貧窮・下賤にして、五欲に貪著し、ひと ぜんこん う びんぐ げせん ごよく とんじやく

憶想・妄見の網の中に入りなん」の事おくそう もうけん あみ なか い こと

御義口伝に云わく、この經文は、仏世に久しく住しおんぎくでん い きやうもん ほとけよ ひさ じゆう

たまわば、薄徳はくとくの人は善根ぜんこんを殖ううべからず。しかるあいだ、

もうけんもうちゆう

と

せん

はくとく

「妄見網中」と説とかれたり。詮せんずるところ、この「薄徳」

ざいせも

しゆじよう

いま

めつご

にほんこく

う

とは、在世ざいせに漏もれたる衆生しゆじよう、今いま、滅後めつごの日本国にほんこくに生まれた

ねんぶつ

ぜん

しんごんとう

ほうぼう

ふしゆぜんこん

り。いわゆる念仏ねんぶつ・禅ぜん・真言等しんごんとうの謗法ほうぼうなり。「不種善根」と

ぜんこん

だいまく

ふしゆ

たも

もの

は、「善根」は題目だいまくなり。「不種」とは、いまだ持たざる者ものな

おくそう

しゃへいかくほう

だいさん

れつ

とう

り。「憶想」とは、「捨閉閣抛」第三だいさんの劣れつ等とう、かくのごと

おくそう

もう

ごんきよう

もうご

きようぎよう

けん

きの憶想おくそうなり。「妄」とは、権教ごんきよう、妄語もうごの経教きようぎようなり。「見」

じゃけん

ほつけさいだいいち

いち

だいさん

み

は、邪見じゃけんなり。「法華最第一」の「一」を「第三」と見るが

じゃけん

もうちゆう

ほうぼうふしん

いえ

いま

にちれんとう

邪見じゃけんなり。「網中」とは、謗法不信ほうぼうふしんの家いえなり。今いま、日蓮等にちれんとうの

たぐ 南無妙法蓮華經と唱え奉る者は、かかる「妄見」
類い、
南無妙法蓮華經と唱え奉る者は、かかる「妄見」

の経、「網中」の家を離れたる者なり云々。

第六 「飲他毒薬、薬発悶乱、宛転于地（他の毒薬を飲み、

薬発し悶乱して、地に宛転す）」の事

御義口伝に云わく、「他」とは、念仏・禅・真言の謗法の

比丘なり。「毒薬」とは権教方便なり、法華の良薬にあら

ず。故に悶乱するなり。「悶」とは、いきたゆるなり。寿量品

の命なきが故に、悶乱するなり。「宛転于地」とは、阿鼻地獄

へ入るなり云々。

「諸子飲毒（諸の子は毒を飲む）」のことは、釈に云

しよし おんどく もろもろ こ どの の

じやし ほう しんじゆ

わく「邪師の法を信受するを、名づけて『飲毒』となす」。

しよし

ほうぼう

おんどく

みだ

だいにちとう

ごんぼう

「諸子」とは、謗法なり。「飲毒」とは、弥陀・大日等の権法

いま にちれんとう たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉るは、

どく

毒を飲まざるなり。

だいしち

わくしつほんしん

わくふしつしや

ほんしん

うしな

第七 「或失本心、或不失者（あるいは本心を失えるもの、

うしな

もの

こと

あるいは失わざる者あり）」の事

おんぎくでん

い

しつほんしん

ほうぼう

ほんしん

御義口伝に云わく、「失本心」とは、謗法なり。「本心」

げしゆ

ふしつ

ほけきよう

ぎようじや

しつ

とは、下種なり。「不失」とは、法華經の行者なり。「失」

とは、本有る物を失うことなり。今、日蓮等の類い、

なんみょうほうれんげきよう とな たてまつ ほんしん うしな うんぬん

南無妙法蓮華経と唱え奉るは、本心を失わざるなり云々。

だいはいち どうしわごう よしりようぶく つ ふる わごう こ あた

第八 「擣篋和合、与子令服（擣き篋い和合して、子に与え

て服ましむ）の事

おんぎくでん い きようもん くう け ちゆう さんたい かい

御義口伝に云わく、この経文は空・仮・中の三諦、戒・

じよう え さんがく しき こう みみ りようやく どう くうたい

定・慧の三学なり。色・香・美味の良薬なり。「擣」は空諦

なり、「篋」は仮諦なり、「和合」は中道なり。「与」は授与

なり、「子」は法華の行者なり。「服」というは受持の義な

り。これを「此大良薬、色・香・美味、皆悉具足（この大良薬

し ほつけ ぎようじや ぶく じゆじ ぎ

しだいりようやく しき こう みみ かいしつぐそく だいりようやく

り。これを「此大良薬、色・香・美味、皆悉具足（この大良薬

は、色・香・美味、みな具足せり」と説かれたり。「皆悉」

しき こう みみ ぐそく かいしつ
にじ まんぎようまんぜん しよはらみつ ぐそく だいりようやく

の二字は、万行万善・諸波羅蜜を具足したる大良薬たる

南無妙法蓮華経なり。「色・香」等とは、「一色一香も中道

にあらざることなし」にして草木成仏なり。されば、題目

しき こう とう そうもくじようぶつ だいもく

の五字に一法として具足せずということなし。もし服する

ごじ いっぽう ぐそく ふく

者は、「速除苦惱(速やかに苦惱を除く)」なり。されば、妙法

の大良薬を服する者は、貪・瞋・癡の三毒の煩惱の病患を

そくじよくのう すみ くのう のぞ みようほう
だいりようやく ふく もの とん じん ち さんどく ほんのう びようげん

除くなり。法華の行者、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、

諍法の供養を受けざるは、貪欲の病を除くなり。法華の

のぞ ほつけ ぎようじや なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの
ほうぼう くのう とう ほんのう びようげん ほうけ

諍法の供養を受けざるは、貪欲の病を除くなり。法華の

ほうぼう くのう とう ほんのう びようげん ほうけ

諍法の供養を受けざるは、貪欲の病を除くなり。法華の

ぎようじや

めり

にんにく

ぎよう

しんに

やまい

のぞ

行者は、罵詈せらるれども忍辱を行ずるは、瞋恚の病を除

ほけきよう

ぎようじや

ぜじんおぶつどう

けつじようむうぎ

くなり。法華経の行者は、「是人於仏道 決定無有疑（この

ひと ぶつじう

けつじよう

うたが

人は仏道において、決定して疑いあることなけん」と

じようぶつ

し

ぐち

ぼんのう

じ

だいらようやく

成仏を知るは、愚癡の煩惱を治するなり。されば、大良薬

まつぼう

じようぶつ

かんろ

いま

にちれんとう

たぐ

は末法の成仏の甘露なり。今、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

だいらようやく

ほんしゆ

南無妙法蓮華経と唱え奉るは、大良薬の本主なり。

だいく

どつけじんにゆう

しつほんしんこ

どつけ

ふか

い

ほんしん

うしな

第九 「毒氣深入、失本心故（毒氣は深く入って、本心を失

ゆえ

こと

えるが故に）」の事

おんぎくでん

い

どつけじんにゆう

ごんきよう

ほうぼう

御義口伝に云わく、「毒氣深入」とは、権教の謗法の

しゅうじょうふか

い

もの

ほつけ

だいろうやく

執情深く入りたる者なり。これによつて法華の大良薬を

しんじゆ

ふく

は

い

にい

信受せざるなり。服せしむといえども吐き出だすは、「而謂

ふみ

うま

おも

美

い

もの

不美（しかも美からずと謂う）」とて、むまからずと云う者

いま にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

もの

なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、

にいふみ

もの

「而謂不美」の者にあらざるなり。

だいじゆう

ぜこうろうやく

こんるざいし

によかしゆぶく

もつうふさい

よ

第十 「是好良薬、今留在此。汝可取服。勿憂不差（この好

ろうやく

いまとぞ

お

なんじ

と

ふく

い

き良薬を、今留めてここに在く。汝は取つて服すべし。差え

うれ

こと

じと憂うることなかれ」の事

おんぎくでん

い

ぜこうろうやく

きようぢよう

御義口伝に云わく、「是好良薬」とは、あるいは経教、

あるいは舍利なり。しやり さて、末法にては南無妙法蓮華経なり。まつぽう

「好」とは、三世の諸仏の好み物は題目の五字なり。「今留」こう さんぜ しよぶつ この もの だいもく ごじ こんる

とは、末法なり。「此」とは、一閻浮提の中には日本国なり。まつぽう し いちえんぶだい なか にほんこく

「汝」とは、末法の一切衆生なり。「取」は、法華経を受持なんじ まつぽう いっさいしゆじよう しゆ ほけきよう じゆじ

する時の儀式なり。「服」とは、唱え奉ることなり。服すとき ぎしき ぶく とな たてまつ ふく

るより無作の三身なり。始成正覚の病患差ゆるなり。今、むさ さんじん しじようしようがく びようげんい いま

日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る、これなり。にちれんとう たぐ なんみやうほうれんげきよう とな たてまつ

第十一 「自我得仏来（我は仏を得てより来）」の事だいじゆういち じ がとくぶつらい われ ほとけ え このかた こと

御義口伝に云わく、一句三身の習いの文と云うなり。おんぎくでん い いっくさんじん なら もん い

じ きゅうかい ぶっかい じっかい

「自」とは、九界なり。「我」とは、仏界なり。この十界は

ほんぬむさ さんじん きた ほつけ い じ が え

本有無作の三身にして来る仏なりと云えり。自も我も得た

ほとけきた じっかいほんぬ みようもん が ほっしん ぶつ

る仏来れり。十界本有の明文なり。「我」は法身、「仏」

ほうしん らい おうじん さんじん むしむしゆう こぶつ

は報身、「来」は応身なり。この三身、無始無終の古仏にし

じとく むじようほうじゆ ふぐじとく むじよう ほうじゆ もと

て「自得」なり。「無上宝聚 不求自得（無上の宝聚は、求め

おの え おも すなわ

ざるに自ずから得たり）「これを思うべし。しからば則ち

ほん おんじゆ あらわ せつ なが しよきよう た いま にちれん

「本の遠寿を顕す」の説は永く諸教に絶えたり。今、日蓮

とう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ じ がとくぶつらい

等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉るは、「自我得仏来」

ぎようじや うんぬん

の行者なり云々。

だいじゅうに

いどしめじょうこ

ほうべんげんねはん

しゆじょう

ど

第十二 「為度衆生故 方便現涅槃（衆生を度せんがため

ゆえ

ほうべん

ねはん

げん

こと

の故に、方便もて涅槃を現ず」の事

おんぎくでん

い

ねはんぎょう

ほけきょう

い

御義口伝に云わく、涅槃経は法華経より出でたりとい

きょうもん

すで

ほうべん

と

うんぬん

う経文なり。既に「方便」と説かれたり云々。

だいじゅうさん

じょうじゅうしせつぼう

つね

じゅう

ほう

と

第十三 「常住此説法（常にここに住して法を説く）」

こと

の事

おんぎくでん

い

じょうじゅう

ほけきょう

ぎょうじや

御義口伝に云わく、「常住」とは、法華経の行者の

じゅうしよ

し

しゃばせかい

せんごくこうや

き

住処なり。「此」とは、娑婆世界なり。山谷曠野を指して

しと

せつぼう

いっさいしゆじょう

ごごんおんじょう

「此」とは説きたもう。「説法」とは、一切衆生の語言音声、

ほんぬ じじゅうゆうち せつぼう まつぼう い せつぼう

本有の自受用智の説法なり。末法に入つて「説法」とは、

なんみょうほうれんげきょう いま にちれんとう たぐ せつぼう

南無妙法蓮華経なり。今、日蓮等の類いの説法これなり。

だいじゅうし じ がぎゅうしゅそう くしゅつりようじゆせん とき われ しゅそう

第十四 「時我及衆僧 俱出靈鷲山（時に我および衆僧は、

りようじゆせん い こと

ともに靈鷲山に出ず）」の事

おんぎくでん い りようぜん いちえ げんねん

御義口伝に云わく、「靈山の一会、儼然としていまだ散

もん じ かんのうまつぼう とき

らず」の文なり。「時」とは、感応末法の時なり。「我」と

しやくそん ぎゆう ぼさつ しようしゆ しゅそう と

は釈尊、「及」とは菩薩、聖衆を「衆僧」と説かれたり。

く じっかい りようじゆせん じやつこうど

「俱」とは、十界なり。「靈鷲山」とは、寂光土なり。「時」

が ぎゆう しゅそう りようじゆせん い

に「我」も「及」も「衆僧」も、ともに靈鷲山に出ずる

なり。秘ひすべし、秘ひすべし。本門事ほんもんじの一念三千いちねんさんぜんの明文みょうもんなり。

ごほんぞん もん あらわ

い

御本尊はこの文を顕し出だしたもうなり。されば、「俱く」

ふへんしんによ

り

しゆつ

ずいえんしんによ

ち

く

とは不変真如の理なり、「出」とは随縁真如の智なり。「俱く」

いちねん

しゆつ

さんぜん

うんぬん

とは一念なり、「出」とは三千なり云々。

い

じ

ほんじしやばせかい

とき

しも

また云わく、「時」とは、本時娑婆世界の時なり。下は

じっかいおんねん

まんだら

あらわ

もん

ゆえ

じ

まつぼう

十界宛然の曼陀羅を顕す文なり。その故は、「時」とは、末法

だいごじ

とき

が

しやくそん

ぎゆう

ぼさつ

しゆそう

第五時の時なり。「我」とは釈尊、「及」は菩薩、「衆僧」

にじよう

く

ろくどう

しゆつ

りようぜんじようど

れつしゆつ

は二乗、「俱」とは六道なり。「出」とは、靈山浄土に列出

りようぜん

ごほんぞん

にちれんとう

たぐ

するなり。「靈山」とは、御本尊ならびに日蓮等の類い

なんみょうほうれんげきょう とな たてまつ もの じゅうしよ と うんぬん
南無妙法蓮華經と唱え奉る者の住所を説くなり云々。

だいじゅうご しゅじょうけんこうじん にしゅけんしやうじん しゅじやう こうつ み
第十五 「衆生見劫尽○而衆見焼尽（衆生は劫尽くと見る

○しかも衆は焼け尽くと見る）」の事

おんぎくでん い ほんもんじゆりやう いちねんさんぜん じゆ もん
御義口伝に云わく、本門寿量の一念三千を頌する文な

り。「大火所焼時（大火に焼かるる時）」とは、実義には煩惱

の大火なり。「我此土安穩（我がこの土は安穩なり）」とは、

国土世間なり。「衆生所遊樂（衆生の遊樂する所なり）」

とは、衆生世間なり。「宝樹多華菓（宝樹は華菓多し）」と

は、五陰世間なり。これ即ち一念三千を分明に説かれた

り。

また云わく、上件かみくだんの文は十界もんじっかいなり。「大火だいか」とは、地獄界じごくかい

なり。「天鼓てんこ」とは、畜生ちくしようなり。「人にん」と「天てん」とは、人・

天てんの二界にかいなり。天てんと人にんと常に充滿つねじゅうまんするなり。「雨曼陀羅華うまんだらけ

(曼陀羅華まんだらけを雨ふらす)とは、声聞界しょうもんかいなり。「園林おんりん」とは、

縁覺界えんがくかいなり。菩薩界ぼさつかいとは、「及ぎゆう」の一字いちじなり。仏界ぶつかいとは、「散仏さんぶつ

なり。修羅しゆらと餓鬼界がきかいとは、「憂怖うふしよくのう諸苦惱によぜしつじゅうまん」如是うふ悉じゆうまん充滿く(憂怖おさ

諸もろもろの苦惱くのう、かくのごとき、ことごとく充滿じゆうまんす)の句くに撰おさ

むるなり。これらを「是諸罪衆生ぜしよざいしゆじよう(この諸もろもろの罪つみの衆生しゆじよう)」

と

と説かれたり。しかりといえども、この寿量品の説顯れ

じゆりようほん せつあらわ

そくかいけんがしん すなわ みなわ み み いちねんさんぜん

ては、「則皆見我身（則ち皆我が身を見る）」とて一念三千

いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの

なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者、

うんぬん

これなり云々。

だいじゅうろく がやくいせぶ われ よ ちち こと

第十六 「我亦為世父（我もまたこれ世の父なり）」の事

おんぎくでん い が しやくそん いっさいしゆじよう ちち

御義口伝に云わく、「我」とは釈尊、一切衆生の父な

しゆ し しん ほとけ やく きよう やく ほとけ やく

り。主・師・親において、仏に約し、經に約す。仏に約す

しやくもん ほとけ さんとく こんしさんがい いま さんがい もん

とは、迹門の仏の三徳は、「今此三界（今この三界）」の文

ほんもん ほとけ しゆ し しん さんとく しゆ とく がし

これなり。本門の仏の主・師・親の三徳は、主の徳は「我此

どあんのん わ ど あんのん もん し とく じょう
土安穩（我がこの土は安穩なり）」の文なり。師の徳は、「常

せつぼうきょうけ つね ほう と きょうけ もん しん とく
説法教化（常に法を説いて教化す）」の文なり。親の徳とは、

がやくい せぶ もん みょうらくだいし じゆりようほん
この「我亦為世父」の文これなり。妙楽大師は、寿量品の

もん し もの ふ ち おん ちくしろう しゃく
文を知らざる者は不知恩の畜生と釈したまえり。

きょう やく しょきょうちゅうおう しょきょう なか おう
経に約せば、「諸経中王（諸経の中の王なり）」は、

しゅ とく のうぐいつさいしゅじょう よ かつさいしゅじょう すく
主の徳なり。「能救一切衆生（能く一切衆生を救う）」は、

し とく うによだいぼんてんのう かつさいしゅじょうしぶ だいぼんてんのう
師の徳なり。「又如大梵天王、一切衆生之父（また大梵天王

いつさいしゅじょう ちち もん ちち とく いま
の一切衆生の父なるがごとし）」の文は、父の徳なり。今、

にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきょう とな たてまつ もの かつさいしゅじょう
日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、一切衆生

の父なり。無間地獄の苦を救う故なり云々。

ねはんぎよう

い

いっさいしゆじよう

い

う

涅槃経に云わく「一切衆生の異の苦を受くるは、こと

によらいひとり

く

うんぬん

にちれんい

いっさいしゆじよう

ごとくこれ如来一人の苦なり」云々。日蓮云わく、一切衆生

い

く

にちれんひとり

く

の異の苦を受くるは、ことごとくこれ日蓮一人の苦なるべ

し。

だいじゆうしち

ほういつじやくごよく

だ おあくどうちゆう

ほういつ

ごよく

第十七 「放逸著五欲 墮於惡道中 (放逸にして五欲に

じやく

あくどう

なか

お

こと

著し、悪道の中に墮つ)の事

おんぎくでん

い

ほういつ

ほうぼう

な

にゆう

御義口伝に云わく、「放逸」とは、謗法の名なり。「入

あびごく

あびごく

い

うたが

いま

にちれんとう

阿鼻獄 (阿鼻獄に入る)、疑いなきものなり。今、日蓮等

たぐ 類い、なんみょうほうれんげきょう とな たてまつ もの きょうもん
めんり むんぬん の類い、南無妙法蓮華経と唱え 奉る者は、この経文を
免離せり云々。

だいじゅうはち 第十八 「行道不行道（道を行じ道を行ぜず）」の事
ぎょうどう ふぎょうどう どう ぎょう どう ぎょう

おんぎくでん い 御義口伝に云わく、十界の衆生のことを説くなり。
じっかい しゅじょう と

ぎょうどう ししゅう ふぎょうどう ろくどう い ぎょう
「行道」は四聖、「不行道」は六道なり。また云わく、「行

どう は修羅・人・天、「不行道」は三悪道なり。詮ずると
どう しゆら にん てん ふぎょうどう さんあくどう せん
まっぼう い ほつけ ぎょうじゃ ぎょうどう

ころ、末法に入つては、法華の行者は「行道」なり、謗法
もの ふぎょうどう ほけきょう てんだい

の者は「不行道」なり。「道」とは、法華経なり。天台云わ
ぶつどう べつ こんきょう さ いま にちれんどう たぐ

く「仏道とは、別して今経を指す」。今、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう とな たてまつ

ぎようどう

とな

南無妙法蓮華經と唱え奉るは、「行道」なり。唱えざる

ふぎようどう

うんぬん

は、「不行道」なり云々。

だいじゆうく

まいじさせねん

みずか

ねん な

こと

第十九 「每自作是念（つねに自らこの念を作す）」の事

おんぎくでん

い

まい

さんぜ

じ

御義口伝に云わく、「毎」とは、三世なり。「自」とは、

べつ

しゃくそん

そう

じっかい

ぜねん

むさほんぬ

別しては釈尊、総じては十界なり。「是念」とは、無作本有

なんみようほうれんげきよう

いちねん

さ

さ

うさ

の南無妙法蓮華經の一念なり。「作」とは、この「作」は有作

さ

むさほんぬ

さ

うんぬん

の作にあらず、無作本有の作なり云々。

ひろ

じっかいほんぬ

やく

い

じ

ばんほうここ

広く十界本有に約して云わば、「自」とは、万法己々の

とうたい

ぜねん

じごく

かしゃく

おと

ほかいっさいしゆじよう

当体なり。「是念」とは、地獄の呵責の音、その外一切衆生

の念々、皆これ自受用報身の智なり。これを念とは云うな

り。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る念は、

大慈悲の念なり云々。

第二十 「得入無上道（無上道に入ることを得）」等の事

御義口伝に云わく、「無上道」とは、寿量品の無作の

三身なり。この外に「成就仏身（仏身を成就す）」これ無

し。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者は、

「成就仏身」疑いなきなり云々。

第二十一 自我偈の事

おんぎくでん い じ
御義口伝に云わく、「自」とは、九界なり。「我」とは、

ぶっしん

仏身なり。「偈」とは、ことわるなり。本有とことわりたる

げ

「偈」とは、ことわるなり。

ほんぬ

本有とことわりたる

げじゆ

ふか

あん

ことわ

よう

偈頌なり。深くこれを案ずべし。偈り様とは

なんみようほうれんげきよう

うんぬん

南無妙法蓮華経なり云々。

だいにじゆうに

じがげしじゆう

こと

第二十二 自我偈始終の事

おんぎくでん

い

じ

はじ

そくじようじゆぶっしん

御義口伝に云わく、「自」とは、始めなり。「速成就仏身

すみ

ぶっしん

じようじゆ

しん

お

しじゆう

(速やかに仏身を成就す)の「身」とは、終わりなり。始終、

じしん

なか

もんじ

じゆよう

じがげ

じじゆゆうしん

自身なり。中の文字は受用なり。よつて、自我偈は自受用身

ほうかい

じしん

ひら

ほうかいじじゆゆうしん

じがげ

なり。法界を自身と開き、法界自受用身なれば、自我偈に

あらずということなし。

ほしいままにもちいるみ

いちねんさんぜん

でんぎようい

いちねんさんぜん

自受用身とは、一念三千なり。伝教云わく「一念三千

そくじじゆゆうしん

じじゆゆうしん

そんぎよう

い

ほとけ

即自受用身。自受用身とは、尊形を出でたる仏なり。」

そんぎよう

い

ほとけ

むさ

さんじん

「尊形を出でたる仏」とは、無作の三身ということなり

うんぬん

いま

にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

もの

云々。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者、

うんぬん

これなり云々。

だいにじゆうさん

くおん

こと

第二十三 「久遠」の事

おんぎくでん

い

ほん

しよせん

くおんじつじよう

御義口伝に云わく、この品の所詮は「久遠実成」なり。

くおん

「久遠」とは、はたらかさず、つくろわず、もとのままとい

う義ぎなり。無作むさの三身さんじんなれば初はじめて成じようぜず、これ働はたらかさざ

さんじゆうにそうはちじつしゆこう　ぐそく　つくる

るなり。三十二相八十種好を具足せず、これ繕つくろわざるなり。

本有常住ほんぬじようじゆう　ほとけ　もとの仏くおんなれば、本もとのままなり。これを「久遠」と

云いうなり。「久遠くおん」とは、南無妙法蓮華経なんみようほうれんげきようなり。実まこと成まことにひらけたり、

無作むさと開あけたるなり云々うんぬん。

第二十四だいにじゆうし　この寿量品じゆりようほんの所化しよけの国土こくどと修行しゆぎようとの事こと

御義口伝おんぎくでん　いに云いわく、当品流布とうほんるふの国土こくどとは、日本国にほんこくなり。

総そうじては南閻浮提なんえんぶだい　しよけなり。所化しよけとは、日本国にほんこくの一切衆生いつさいしゆじようなり。

修行しゆぎようとは、「無疑日信むぎわっしん　うたが（疑いいなきを信しんと曰いう）」の信心しんじん

のことなり。授与の人とは、本化地涌の菩薩なり云々。
じゅよ ひと ほんげじゆ ぼさつ うんうん

第二十五 建立御本尊等の事

おんぎくでん

い

ほんぞん

えもん

によらいひみつ

御義口伝に云わく、この本尊の依文とは、「如来秘密・

じんずうしりき

もん

かい

じよう

え

さんがく

じゆりようほん

じ

神通之力」の文なり。戒・定・慧の三学は、寿量品の事の

さんだいひほう

にちれん

りようぜん

めんじゆくけつ

三大秘法これなり。日蓮たしかに靈山において面授口決せ

ほんぞん

ほけきよう

ぎようじゃ

いつしん

とうたい

うんぬん

しなり。本尊とは、法華經の行者の一身の当体なり云々。

だいにじゆうろく

じゆりようほん

たいごくしゆ

こと

第二十六 寿量品の対告衆の事

おんぎくでん

い

きようもん

みろくぼさつ

御義口伝に云わく、經文は「弥勒菩薩」なり。しかり

めつご

ほん

ゆえ

にほんこく

いっさいしゆじよう

といえども、滅後を本とする故に、日本国の一切衆生なり。

なか にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの
中にも、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者、

これなり。「弥勒」とは、末法の法華の行者のことなり。
みろく まっぼう ほっけ ぎようじゃ

「弥勒」をば「慈氏」と云う。法華の行者を指すなり。
みろく じし い ほっけ ぎようじゃ さ

章安大師云わく「彼がために悪を除くは、即ちこれ彼
しょうあんだいしい かれ すなわ かれ

が親なり」。これあに「弥勒菩薩」にあらずや云々。
おや みろくぼさつ うんぬん

第二十七 無作の三身の事 種子・尊形・三摩耶
だいにじゆうしち むさ さんじん こと しゆし そんぎよう さんまや

御義口伝に云わく、尊形とは、十界本有の形像なり。
おんぎくでん い そんぎよう じっかいほんぬ ぎようぞう

三摩耶とは、十界の所持の物なり。種子とは、信の一字な
さんまや じっかい しよじ もの しゆし しん いちじ

り。いわゆる南無妙法蓮華經改めざるを云うなり。三摩耶
なんみようほうれんげきようあらた い さんまや

とは、合掌がつしようなり。秘ひすべし、秘ひすべし云々。

ぶんべつくどくほんさんか だいじ
分別功德品三箇の大事

第一 其有衆生、聞仏寿命長遠如是、乃至能生一念信解、

所得功德、無有限量（それ衆生有つて、仏の寿命の長遠

なることかくのごとくなるを聞き、乃至能く一念の信解を

生ぜば、得るところの功德は、限量有ることなけん」の事

おんぎくでん い いちねんしんげ しん いちじ いっさい
御義口伝に云わく、「一念信解」の「信」の一字は、一切

ちえ じゆとく いんしゆ しん いちじ みようじそく
の智慧を受得するところの因種なり。「信」の一字は、名字即

の位くらゐなり。よつて、「信しん」の一字いちじは、最後品さいごほんの無明むみょうを切る利剣りけん

なり。「信しん」の一字いちじは、寿量品じゆりようほんの理頭本りけんほんを信しんずるなり。「解げ」

とは、事頭本じけんほんを解げするなり。この事じ・理りの頭本けんほんを一いち念ねんに信解しんげ

するなり。「二念いちねん」とは、無作本有むさほんぬの一いち念ねんなり。かくのごと

く信解しんげする人ひとの功德くどくは、限量有げんりようあることあるべからざるなり。

「信しん」のところに「解げ」あり、「解げ」のところに「信しん」あり。

しかりといえども、「信しん」をもつて成仏じやうぶつを決定けつじようするなり。今いま、

日蓮等にちれんとうの類たぐい、南無妙法蓮華經なんみようほうれんげきやうと唱となえ奉たてまつる者もの、これなり

云々うんぬん。

だいに ぜそくのうしんじゆ によぜ しよにんとう ちようじゆ しきようてん すなわ

第二 「是則能信受 如是諸人等 頂受此經典(これは則

よ しんじゆ しよにんとう きようてん ちようじゆ

ち能く信受せん。かくのごとき諸人等は、この經典を頂受

こと

す)の事

おんぎくでん い ほけきよう こうべ いただ みようもん

御義口伝に云わく、法華經を頭に頂くという明文な

によぜ しよにんとう もん ひろ いったいしゆじよう わた

り。「如是諸人等」の文は、広く一切衆生に亘るなり。し

さんぜじつぼう しよぶつ みようほうれんげきよう いただ う

かれば、三世十方の諸仏は、妙法蓮華經を頂き受けて

じようぶつ かみ じゆりようほん だいもく みようほうれんげきよう

成仏したもう。よつて、上の寿量品の題目を妙法蓮華經

だい つぎ によらい だい ひ うんぬん いま にちれんとう

と題して、次に如来と題したり。秘すべし云々。今、日蓮等

たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ ゆえ うんぬん

の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉るは、この故なり云々。

だいさん

ぶつしじゆうしじ

そくぜぶつじゆう

ぶつし

ち

じゆう

第三

「仏子住此地

則是仏受用

（仏子この地に住せば、

すなわ

ほとけ

じゆう

こと

則ちこれをば仏は受用したもう」の事

おんぎくでん

い

もん

じじゆう

みようもん

い

御義口伝に云わく、この文を自受用の明文と云えり。

しじ

むさ

さんじん

よ

ち

ぶつし

ほつけ

「此地」とは、無作の三身の依る地なり。「仏子」とは、法華

ぎようじや

ぶつし

ぼさつ

ほつけ

ぎようじや

ぼさつ

の行者なり。仏子は菩薩なり。法華の行者は菩薩なり。

じゆう

しんげ

ぎ

いま

にちれんとう

たぐ

「住」とは、信解の義なり。今、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

もの

みようほう

ち

じゆう

南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、妙法の地に住するな

ほとけ

じゆう

み

ふか

あん

うんぬん

り。仏の受用の身なり。深くこれを案ずべし云々。

ずいきほんにか だいじ
随喜品二箇の大事

だいいち

みようほうれんげきようずいきくどく

こと

第一 「妙法蓮華経随喜功德」の事

おんぎくでん

い

ずい

じ

り

ずいじゆん

い

御義口伝に云わく、「随」とは、事・理に随順するを云

き

じたとも

よろこ

じ

ごひやくじんでん

うなり。「喜」とは、自他共に喜ぶことなり。事とは、五百塵点

じけんぼん

ずいじゆん

り

りけんぼん

したが

せん

の事顕本に随順するなり。理とは、理顕本に随うなり。詮

じゆりようほん

ないしよう

ずいじゆん

ずい

い

ずるところ、寿量品の内証に随順するを、「随」とは云う

じたとも

ちえ

じひ

あ

き

なり。しかるに、自他共に智慧と慈悲と有るを、「喜」とは云

せん

いま

にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

うなり。詮ずるところ、今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経

とな

たてまつ

とき

かなら

むさ

さんじん

ほとけ

な

き

と唱え奉る時、必ず無作の三身の仏に成るを、「喜」と

は云いうなり。しかるあいだ、「随ずい」とは法ほうに約やくし、「喜き」と

ひと やく

ひと

ごひやくじんてん

こぶつ

しやくそん

ほう

は人に約やくするなり。人とは五百塵点の古仏たる釈尊、法と

じゆりようほん

なんみようほうれんげきよう

したが

よろこ

は寿量品の南無妙法蓮華経なり。これに随ずいい喜きぶを、

ずいき

い

そう

ずい

しん

いみよう

うんぬん

「随喜」とは云うなり。総じて「随」とは、信の異名なり云々。

しんじん

ずい

い

に

まき

ただ信心のことを、「随」と云うなり。されば、二の卷には

ずいじゆん しきよう

ひ こちぶん

きよう

ずいじゆん

おの

ちぶん

「随順此経 非己智分（この経に随順す。己が智分に

と

うんぬん

あらず）」と説かれたり云々。

だいに

く けむ しゆえ

う はつけ しこう

じようじゆうごく しゆつ

くち

いき

第二 「口氣無臭穢 優鉢華之香 常従其口出（口の気は

しゆえな

う はつけ

か

つね

くち

い

臭穢無くして、優鉢華の香は、常にその口より出ず）」の事

おんぎくでん

い

くけ

だいもく

むしゆえ

御義口伝に云わく、「口氣」とは、題目なり。「無臭穢」

みだとう

ごんきよう

ほうべん

むとくどう

おし

まじ

とは、弥陀等の権教・方便・無得道の教えを交えざるなり。

うはつけしこう

ほけきよう

まつぼう

いま

だいもく

「優鉢華之香」とは、法華経なり。末法の今は題目なり。

ほうべんぼん

にようどんぼつけ

うどんぼつけ

いちねん

方便品の「如優曇鉢華（優曇鉢華のごとき）」のことを、一念

さんぜん

い

あん

じよう

さんぜじようじゆう

三千と云えり。これを案ずべし。「常」とは、三世常住な

ごく

ほつけ

ぎようじゃ

くち

しゆつ

り。「其口」とは、法華の行者の口なり。「出」とは、

なんみようほうれんげきよう

いま

にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華経なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と

とな

たてまつ

じようじゆうごくしゆつ

うんぬん

唱え奉るは、「常従其口出」なり云々。

ほつしくどくほんしか だいじ
法師功德品四箇の大事

だいいち

ほつしくどく

こと

第一 「法師功德」の事

おんぎくでん

い

ほつし

ごしゆほつし

くどく

御義口伝に云わく、「法師」とは、五種法師なり。「功德」

ろつこんしようじよう

かほう

せん

いま

にちれんとう

とは、「六根清浄」の果報なり。詮ずるところ、今、日蓮等

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

もの

ろつこんしようじよう

の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、「六根清浄」

みようほうれんげきよう

ほつし

な

おお

さいわ

あ

なり。されば、妙法蓮華経の法師と成つて大いなる徳い有

く

さいわ

るなり。「功」も幸いということなり。または、悪を滅する

く

い

ぜん

しよう

とく

い

くどく

を「功」と云い、善を生ずるを「徳」と云うなり。「功德」

そくしんじようぶつ

ろつこんしようじよう

ほげきよう

せつもん

とは、即身成仏なり。また「六根清浄」なり。法華経の説文

しゅぎよう

ろっこんしようじよう

こころう

うんぬん

のごとく修行するを、「六根清浄」と意得べきなり云々。

だいに

ろっこんしようじよう

こと

第二 「六根清浄」の事

おんぎくでん

い

まなこ

くどく

ほっけふしん

もの

御義口伝に云わく、眼の功德とは、法華不信の者は

むけん

だざい

しん

もの

じようぶつ

み

まなこ

無間に墮在し、信ずる者は成仏なりと見るをもつて眼の

くどく

ほけきよう

たも

たてまつ

まなこ

はっぴやく

功德とするなり。法華経を持ち奉るところ、眼の八百の

くどく

う

まなこ

ほけきよう

しだいじようきようてん

しよぶつ

功德を得るなり。眼とは法華経なり。「此大乘經典、諸仏

げんもく

だいじようきようてん

しよぶつ

げんもく

いま

にちれんとう

眼目（この大乘經典は、諸仏の眼目なり）」と。今、日蓮等

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

もの

まなこ

くどく

う

の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は眼の功德を得る

うんぬん

に

び

ぜつ

しん

い

なり云々。耳・鼻・舌・身・意、またまたかくのごときな

うんぬん

り云々。

だいさん

うによじょうみようきよう

じょうみよう

かがみ

こと

第三 「又如淨明鏡（また淨明なる鏡のごとし）」の事

おんぎくでん

い

ほけきよう

かがみ

たと

と

御義口伝に云わく、法華經に鏡の譬えを説くこと、こ

みようもん

ろっこんしょうじよう

ひと

るり

みようきよう

の明文なり。六根清淨の人は「瑠璃」「明鏡」のごとく

さんぜんせかい

み

きようもん

いま

にちれんとう

たぐ

三千世界を見るといふ經文なり。今、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

もの

みようきよう

まんぞう

う

南無妙法蓮華經と唱え奉る者は、明鏡に万像を浮かぶる

ちけん

みようきよう

ほけきよう

べつ

がごとく知見するなり。この明鏡とは、法華經なり。別し

ほうとうほん

わ いっしん

みようきよう

せん

ては宝塔品なり。または我が一心の明鏡なり。詮ずるとこ

るり

みようきよう

ふた

たと

と

しんこんしょうじよう

ろ、瑠璃と明鏡との二つの譬えを説かれたり。身根清淨

のしも下しきしんなり。色ふ心に不二しやうじやうなれば、いとくずれも清ぶん浄とくの徳ぶん分なりなり。

「浄じやう」とは、不ふ浄じやうにたい対じやうしてい浄みやうと云いうなり。「明みやう」とは、無む明みやう

にたい対みやうしてと明きやうと説きやうくいっしんなり。「鏡きやう」とは、一いっ心しんなり。「浄じやう」は

仮け諦たい、「明みやう」は空くう諦たい、「鏡きやう」は中ちゆう道どうなり。「悉しつ見けん諸しよ色しき像ざう（こ

とじつごとく諸しよの色しき像ざうをみ見る）の「悉しつ」は、十じっ界かいなり。詮せんず

るところ、「浄じやう明みやう鏡きやう」とは、色しき心しんの二に法ぽう、妙みやう法ぽう蓮れん華げ経ぎやうの

体たいなり。「浄じやう明みやう鏡きやう」とは、信しん心じんなり云々。うんぬん

また三千さんぜん大千だいせん世界せかいを知ち見けんするとは、三さん世せ間けんのことなり。

第四 「是人ぜにん持じ此し経きやう 安住あんじゆう希け有う地じ（この人ひとはこの経きやうをもち、

けう ち あんじゆう こと
希有の地に安住す」の事

おんぎくでん い ぜにん にほんこく いっさいしゆじよう
御義口伝に云わく、「是人」とは、日本国の一切衆生の

なか ほつけ ぎようじゃ けうじ じゆりようほん じり
中には法華の行者なり。「希有地」とは、寿量品の事・理

けんぽん さ ふんべつほん ぶつせつけうほう ほとけ
の頭本を指すなり。これをまた分別品には「仏説希有法（仏

けう ほう と と べつ
は希有の法を説きたもう」と説かれたり。別しては

なんみようほうれんげきよう いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう
南無妙法蓮華経なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と

とな たてまつ もの けうじ まつぼうぐつう みようきよう ほんぞん
唱え奉る者の「希有地」とは、末法弘通の明鏡たる本尊

そう ほん ろつこんしやうじよう くだく じっしん そうじ
なり。総じては、この品の六根清浄の功德は、十信・相似

そく たいごうしゆ じようしやうじんぼさつ じっしん だいさんしん い
即なり。対告衆の「常精進菩薩」は十信の第三信と云え

まつぼう

ほけきよう

ぎようじや

さ

り。しかりといえども、末法においては法華經の行者を指

じようしようじんぼさつ

こころう

きよう

じしや

して「常精進菩薩」と心得べきなり。この經の持者は、

ぜそくしようじん

すなわ

しようじん

ゆえ

「是則精進（これは則ち精進なり）」の故なり。

じようふきようほんさんじゆうか

だいじ

常不輕品三十箇の大事

だいいち

じようふきよう

こと

第一 「常不輕」の事

おんぎくでん

い

じよう

じ

さんぜ

ふきよう

御義口伝に云わく、「常」の字は、三世の不輕のこと

ふきよう

いつさいしめじよう

ないしよう

ぐ

さんいん

なり。「不輕」とは、一切衆生の内証に具するところの三因

ぶつしよう

さ

ぶつしよう

ほつしよう

ほつしよう

仏性を指すなり。仏性とは、法性なり。法性とは、

みようほうれんげきよう

うんぬん

妙法蓮華経なり云々。

だいに

とくだいせいぼさつ

こと

第二 「得大勢菩薩」の事

おんぎくでん

い

とく

おうじん

だい

ほっしん

御義口伝に云わく、「得」とは応身なり、「大」とは法身

せい

ほうしん

とく

けたい

だい

なり、「勢」とは報身なり。また「得」とは仮諦なり、「大」

ちゅうどう

せい

くうたい

えんゆう

さんたい

さんじん

とは中道なり、「勢」とは空諦なり。円融の三諦・三身な

り。

だいさん

いおんのう

こと

第三 「威音王」の事

おんぎくでん

い

い

しきほう

おん

しんぼう

御義口伝に云わく、「威」とは色法なり、「音」とは心法

のう

しきしんふに

のう

い

まっぼう

い

なり、「王」とは色心不二を「王」と云うなり。末法に入つ

なんみようほうれんげきよう とな たてまつ

いおんのう

て南無妙法蓮華経と唱え奉る、これしかしながら「威音王」

うんぬん

ゆえ

おん

いっさいごんきよう

だいもくとう

い

なり云々。その故は、「音」とは一切権教の題目等なり。「威」

しゅだい

ごじ

のう

ほつけ

ぎようじゃ

うんぬん

ほつけ

とは首題の五字なり。「王」とは法華の行者なり云々。法華

だいもく

しし

ほ

よきよう

よじゆう

こえ

の題目は獅子の吼うるがごとく、余経は余獣の音のごとくな

しよきようちゆうおう

しよきよう

なか

おう

ゆえ

のう

い

り。「諸経中王（諸経の中の王なり）」の故に「王」と云う

いま

にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉るは、

いおんのうぶつ

うんぬん

「威音王仏」なり云々。

だいし

ぼんうしよけん

み

あ

こと

第四 「凡有所見（およそ見るところ有る）」の事

おんぎくでん

い

いま

にほんこく

いっさいしゆじよう

ほけきよう

御義口伝に云わく、今、日本国の一切衆生を法華経の

だいもく き ちけん うんぬん
題目の機なりと知見するなり云々。

だいご がじんきようによとう ふかんきようまん しよいしやが によとうかいぎようぼさつ
第五 「我深敬汝等、不敢輕慢。所以者何、汝等皆行菩薩

どう どうとくさぶつ われ ふか なんだち うやま きようまん ゆえん
道、当得作仏（我は深く汝等を敬い、あえて輕慢せず。所以

はいかん、汝等は皆菩薩の道を行じて、当に作仏すること

う こと
を得べければなり」の事

おんぎくでん い にじゅうしじ みようほう ごじ か
御義口伝に云わく、この二十四字と妙法の五字は替わ

れども、その意はこれ同じ。二十四字は略法華經なり。

だいりく たんぎようらいはい らいはい ぎよう こと
第六 「但行礼拝（ただ礼拝を行ずるのみ）」の事

おんぎくでん い らいはい がっしよう がっしよう
御義口伝に云わく、「礼拝」とは、合掌なり。「合掌」

ほけきょう

すなわ いちねんさんぜん

ゆえ

ふせんどくじゆ

とは、法華経なり。これ即ち一念三千なり。故に「不専読誦

きょうてん

たんぎょうらいはい

もつぱ

きょうてん

どくじゆ

らいはい

經典、但行礼拝（専らに經典を讀誦せずして、ただ礼拝

ぎょう

い

を行ずるのみ）と云うなり。

だいしち

ないしおんけん

ないしとお

み

こと

第七 「乃至遠見（乃至遠く見る）」の事

おんぎくでん

い

かみ

ほんうしよけん

み

御義口伝に云わく、上の「凡有所見（およそ見るとこ

あ

けん

ないしよう

ぐ

ぶつしよう

み

ろ有る）の「見」は、内証に具するところの仏性を見る

おんけん

けん

ししゆ

い

なり。これは理なり。「遠見」の「見」は、四衆と云うあい

じ

かみ

しんぼう

み

いま

しきぼう

み

しきぼう

だ、事なり。よつて、上は心法を見る、今は色法を見る。色法

ほんもん

かいご

しいちかいえ

しんぼう

み

しやくもん

こころ

は本門の開悟、四一開会なり。心法を見るは迹門の意、

また四一開会なり。し ち かい え「遠」の一字は、おん い ち じ寿量品の久遠なり。じ ゆ り よ う ほん く おん故ゆ え

に「故往礼拝こ お う ら い ば い（故に往つて礼拝す）ゆ え い ら い ば い」と云えり云々。い う ん ぬ ん

第八 「心不浄者しん ふ じ よ う し ゃ（心不浄なる者）こ こ ろ ふ じ よ う も の」の事こ と

御義口伝おん ぎ く で んに云わく、い 謗法ほう ぼうの者ものは色心しき しん二法に ぽう共に不浄ふ じ よ うなり。

まず心法しん ぽう不浄ふ じ よ うの文もんは、今いまこの「心不浄者しん ふ じ よ う し ゃ」なり。しん ふ じ よ うまた身不浄しん ふ じ よ う

の文もんは、譬喻品ひ ゆ ほんに「身常臭処しん じ よ う し ゅ し ょ 垢穢不浄く え ふ じ よ う（身は常に臭処み つね し ゅ し ょに

して、垢穢不浄く え ふ じ よ うなり）」と云えり。い ま今、日蓮等に ち れ ん と うの類た ぐい、

南無妙法蓮華經なん み よ う ほう れ ん げ き よ うと唱え奉とな た て ま つる者ものは、色心しき しん共に清浄し よ う じ よ うなり。

身浄しん じ よ うとは、法師功德品ほ う し く ど く ほんに云わく「若持法華經に や く じ ぽ け き よ う 其身甚ご しん じん

しょうじよう

ほけきよう たも

み

しょうじよう

清浄（もし法華経を持たば、その身は、はなはだ清浄な

もん

しんじよう

だいはほん

い

じようしんしんぎよう

じよう

り」の文なり。心浄とは、提婆品に云わく「浄心信敬（浄

しん しんぎよう

うんぬん

じよう

ほけきよう

しんじん

ふじよう

心に信敬す）云々。浄とは、法華経の信心なり。不浄と

ほうぼう

うんぬん

は、謗法なり云々。

だいく

ごん

ぜむちびく

むち

びく

い

こと

第九 「言、は無智比丘（「この無智の比丘」と言う）」の事

おんぎくでん

い

もん

ほけきよう

みようもん

じようまん

御義口伝に云わく、この文は法華経の明文なり。上慢

ししゆ

ふきようぼさつ

むちびく

めり

ほんうしよけん

の四衆、不軽菩薩を「無智比丘」と罵詈せり。「凡有所見（お

み

あ

ぼさつ

むち

よそ見るところ有る）」の菩薩を「無智」ということは、

だいろくてん

まおう

しよい

まっぼう

い

にちれんとう

たぐ

第六天の魔王の所為なり。末法に入つて日蓮等の類い、

なんみょうほうれんげきよう とな たてまつ もの むちびく ぼう

南無妙法蓮華經と唱え奉る者は、「無智比丘」と謗ぜられ

きようもん みょうきよう むち ほけきよう き

んこと、經文の明鏡なり。「無智」をもつて法華經の機と

さだ

定めたり。

だいじゆう もんごしよせつ かいしんぶくずいじゆう じよせつ き みなしんぶく

第十 「聞其所説、皆信伏随従（その所説を聞いて、皆信伏

ずいじゆう こと

随従す）」の事

おんぎくでん い もん みょうじそく しよせん

御義口伝に云わく、「聞」とは、名字即なり。所詮は、

にこうどくし し ぞく だいもく みな

「而強毒之（しかも強いてこれを毒す）」の題目なり。「皆」

じようまん ししゆとう しん むぎいわっしん うたが

とは、上慢の四衆等なり。「信」とは、「無疑曰信（疑いな

しん い みょうりよう ほっけ きぶく

きを信と曰う）「明了なり。」「伏」とは、法華に帰伏するな

り。「随」とは、心を法華經に移すなり。「從」とは、身を

この經に移すなり。詮ずるところ、今、日蓮等の類い、

南無妙法蓮華經と唱え奉る行者は、末法の不輕菩薩なり。

第十一 「於四衆中說法、心無所畏（四衆の中において法

を説くに、心に畏るところ無し）」の事

御義口伝に云わく、「四衆」とは、日本国の中的一切

衆生なり。「説法」とは、南無妙法蓮華經なり。「心無所畏」

とは、今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と呼ばわるところ

の折伏なり云々。

だいじゅうに

じょうふきようぼさつ きい にんこ

そくが しんぜ

じょうふきようぼさつ

第十二 「常不軽菩薩豈異人乎。則我身是（常不軽菩薩は

ことひと

すなわ

わ

み

こと

あに異人ならんや。則ち我が身これなり」の事

おんぎくでん

い

かこ

ふきようぼさつ

こんにち

しやくそん

御義口伝に云わく、過去の不軽菩薩は今日の釈尊なり。

しやくそん

じゅうりようほん

きようしゆ

じゅうりようほん

きようしゆ

われ

釈尊は寿量品の教主なり。寿量品の教主とは、我ら

ほけきよう

ぎようじや

われ

いま

にちれんとう

法華經の行者なり。さては我らがことなり。今、日蓮等の

たぐ

ふきよう

うんぬん

類いは、不軽なり云々。

だいじゅうさん

じょうふちぶつ

ふもんぼう

ふけんそう

つね

ほとけ

あ

第十三 「常不值仏、不聞法、不見僧（常に仏に値わず、

ほう

き

そう

み

こと

法を聞かず、僧を見ず」の事

おんぎくでん

い

もん

ふきようぼさつ

きようせん

御義口伝に云わく、この文は、不軽菩薩を軽賤するが

ゆえ さんぼう はいけん にひやくおくごう じごく お だいくのう
故に、三宝を拜見せざるごと二百億劫、地獄に堕ちて大苦惱
を受くと云えり。今、末法に入つて日蓮等の類い
なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの きようせん
南無妙法蓮華経と唱え奉る者を軽賤せんことは、彼に過
ぎたり。彼は千劫、これは「至無数劫（無数劫に至らん）」
なり。

まつぼう ほとけ ほんぷ ほんぷそう ほう
末法の「仏」とは、凡夫なり、凡夫僧なり。「法」とは、

だいもく そう われ きようじや ほとけ い
題目なり。「僧」とは、我ら行者なり。仏とも云われ、ま

ほんぷそう い ふか えんり さと な
た凡夫僧とも云わるるなり。「深く円理を覚る。これを名づ

ほとけ ゆえ えんり ほけきよう うんぬん
けて仏となす」の故なり。「円理」とは、法華経なり云々。

だいじゆうし

ひつぜざいい

ぶぐじようふきようぼさつ

つみ

お

お

第十四

「畢是罪已、復遇常不輕菩薩

（この罪を畢え已わ

じようふきようぼさつ

あ

こと

って、また常不輕菩薩に遇う」の事

おんぎくでん

い

ほつけひぼう

とが

あらた

しんぶく

御義口伝に云わく、もし法華誹謗の失を改めて信伏

ずいじゆう

あさ

むけん

お

せんぼうつよ

随従するとも、浅くあつては無間に墮つべきなり。先謗強

ゆえ

せんごうむけんじごく

お

のち

い

ごあ

きが故によるなり。千劫無間地獄に墮ちて、後に出ずる期有

にちれん

あ

ぶぐにちれん

って、また日蓮に値うべきなり。復遇日蓮なるべし。

だいじゆうし

おによらいめつご

によらいめつ

のち

とう

こと

第十五 「於如来滅後（如来滅して後において）」等の事

おんぎくでん

い

ふきようぼさつ

しゆぎよう

御義口伝に云わく、不輕菩薩の修行はかくのごとくな

ほとけ

めつご

ごしゆ

みようほうれんげきよう

しゆぎよう

み

り。仏の滅後に五種に妙法蓮華経を修行すべしと見え

り。正しく「是故（この故に）」より下の二十五字は、末法の

にちれんとう たぐ

日蓮等の類いのことなるべし。既に、「是故」とおさえて、

おによらいめつご

と

るつう

ほん

ゆえ

そう

「於如来滅後」と説かれたり。流通の品なるが故なり。総じ

るつう

みらいとうこん

ほけきよういちぶ

いちおう

ては、流通とは未来当今のためなり。法華経一部は、一往は

ざいせ

さいおう

まつぼうとうこん

ゆえ

在世のためなり、再往は末法当今のためなり。その故は、

みようほうれんげきよう

ごじ

さんぜ

しよぶつとも

ゆる

みらいめつご

もの

妙法蓮華経の五字は、三世の諸仏共に許して未来滅後の者

ほんぽん

ほうもん

だいまく

ゆう

たい

みようほう

まつぼう

のためなり。品々の法門は題目の用なり。体の妙法、末法

ゆう

なん

ゆう

ほんぽんべつ

ほうもん

ひ

の用たらば、何ぞ用の品々別ならんや。この法門、秘すべ

ひ

てんだい

こうい

ひさ

もく

うご

し、秘すべし。天台の「綱維を提ぐに目として動かざるこ

となきがごとし」等と釈するはこの意なり。妙楽大師は

りやく

きようだい

あ

げん

いちぶ

おさ

「略して経題を挙ぐるに、玄に一部を収む」と。これら

こころえ

もの

まつぼう

ぐつう

た

もの

を心得ざる者は、末法の弘通に足らざる者なり。

だいじゆうろく

ほん

とき

ふきようぼさつ

たい

こと

第十六 この品の時の不軽菩薩の体の事

おんぎくでん

い

ふきようぼさつ

じつかい

しゆじよう

御義口伝に云わく、「不軽菩薩」とは十界の衆生なり。

さんぜじようじゆう

らいはい

ぎよう

た

は

ごごん

三世常住の礼拝の行を立つるなり。吐くところの語言は

みようほう

おんじよう

ごくそつ

つえ

と

ざいにん

かしゃく

たい

妙法の音声なり。獄卒が杖を取って罪人を呵責するは体

らいはい

ふかんきようまん

きようまん

ざいにん

の礼拝なり、「不敢輕慢（あえて輕慢せず）」なり。罪人、

われ

せな

おも

ふきようぼさつ

かしゃく

しゃくぶく

我を責め成すと思えば、不軽菩薩を呵責するなり。折伏の

ぎよう

行これなり。

だいじゆうしち ふきようぼさつ らいはい じゆうしよ こと

第十七 不軽菩薩の礼拝の住所の事 これについて、十四

かしよ らいはい じゆうしよ こと あ

箇所の礼拝の住所の事これ有り

おんぎくでん い らいはい じゆうしよ

たほうとうちゆう らいはい

御義口伝に云わく、礼拝の住所とは、多宝塔中の礼拝

ゆえ とうば ごだい じよう

なり。その故は、塔婆とは五大の成ずるところなり、五大

ち すい か ふう くう

たほう とう い

とは地・水・火・風・空なり、これを多宝の塔とも云うな

ほうかいひろ ごだい す

り。法界広しといえども、この五大には過ぎざるなり。故に、

とうちゆう らいはい そうでん ひ うんぬん

塔中の礼拝と相伝するなり。秘すべし、秘すべし云々。

だいじゆうはち かい じ ご にゆう らいはい じゆうしよ こと

第十八 開・示・悟・入は礼拝の住所の事

おんぎくでん い かい じ ご にゆう しぶつちけん じゆうしよ
御義口伝に云わく、開・示・悟・入の四仏知見を住所

とするなり。しかるあいだ、方便品のこの文を礼拝の住所
ほうべんぼん もん らいはい じゆうしよ

と云うなり。これは「内に不軽の解を懐く」と釈せり。「解
うち ふきよう げ いた しゃく げ

とは、正因仏性を具足す」と釈するなり。「開仏知見
しょういんぶつしろう ぐそく しゃく かいぶつちけん

(仏知見を開く)とは、この仏性を開かしめんとて、仏
ぶつちけん ひら ぶつしろう ひら ほとけ

は出現したもうなり。
しゅつげん

第十九 「每自作是念(つねに自らこの念を作す)」の文は
だいじゅうく まいじさぜねん みずか ねん な もん

礼拝の住所の事
らいはい じゆうしよ こと

おんぎくでん い まい じ さんぜ ねん
御義口伝に云わく、「毎」の字は、三世なり。「念」と

いつさいしゆじよう ぶつしよう ねん

そくじようじゆ

は、一切衆生の仏性を念じたまいしなり。よつて「速成就

ぶつしん すみ ぶつしん じようじゆ かいとうさぶつ みなまさ さぶつ

仏身（速やかに仏身を成就す）」と「皆当作仏（皆当に作仏

おな いちもん そうでん

すべし）」とは同じきことなり。よつて、この一文を相伝せ

てんだいだいし かいさんけんいち かいごんけんおん しゃく ひ

り。天台大師は「開三頭一・開近頭遠」と釈せり。秘すべ

ひ うんぬん

し、秘すべし云々。

だいにじゆう がほんぎようぼさつどう われ もとぼさつ どう ぎよう もん

第二十 「我本行菩薩道（我は本菩薩の道を行ず）」の文は

らいはい じゆうしよ こと

礼拝の住所の事

おんぎくでん い が ほんいんみよう とき さ

御義口伝に云わく、「我」とは、本因妙の時を指すな

ほんぎようぼさつどう もん ふきようぼさつ らいはい

り。「本行菩薩道」の文は、不軽菩薩なり。これを礼拝の

じゆうしよ き

住所と指すなり。

だいにじゆういち しょうろうびようし らいはい じゆうしよ こと

第二十一 生老病死は礼拝の住所の事

おんぎくでん い いつさいしゅじよう しょうろうびようし えんり

御義口伝に云わく、一切衆生、生老病死を厭離せず、

むじようせんめつ とうたい まよ ごせ ぼだい かくち

無常遷滅の当体に迷うによつて、後世の菩提を覚知せざる

しめ とき ほんのうそくぼだい しょうじそくねはん おし とうたい

なり。これを示す時、煩惱即菩提・生死即涅槃と教うる当体

らいはい い さゆう りよう て ひら とき ほんのう しょうじ

を礼拝と云うなり。左右の両の手を開く時は、煩惱・生死・

じようまん ふきよう おのおのべつ らいはい とき りよう て がつ

上慢・不軽、各別なり。礼拝する時、両の手を合するは、

ほんのうそくぼだい しょうじそくねはん じようまん ししゆ そな

煩惱即菩提・生死即涅槃なり。上慢の四衆の具うるところ

ぶつしよう ふきよう そな ぶつしよう いっしゆ みようほう

の仏性も、不軽の具うるところの仏性も、一種の妙法な

らいはい うんぬん
りと礼拝するなり云々。

だいにじゆうに ほつしよう らいはい じゆうしよ こと
第二十二 法性は礼拝の住所の事

おんぎくでん い ふきようぼさつ ほつしようしんによ さんいんぶつしよう
御義口伝に云わく、不軽菩薩、法性真如の三因仏性た

なんみようほうれんげきよう にじゆうしじ あしだ むみよう じようまん し

る南無妙法蓮華經の二十四字に足立って、無明の上慢の四

しゆ はい しゆじよう うんざい ぶつしよう らいはい うんぬん

衆を拝するは、衆生に蘊在する仏性を礼拝するなり云々。

だいにじゆうさん むみよう らいはい じゆうしよ こと

第二十三 無明は礼拝の住所の事

おんぎくでん い じた きやくい た かれ じようまん

御義口伝に云わく、自他の隔意を立てて、彼は上慢の

ししゆ われ ふきよう い ふきよう ぜんにん じようまん あくにん ぜんあく

四衆、我は不軽と云い、不軽は善人、上慢は悪人と善悪を

た むみよう た らいはい ぎよう な とき ぜんあく

立つるは、無明なり。ここに立って礼拝の行を成す時、善悪

不二・邪正一如の南無妙法蓮華經と礼拝するなり云々。
ふに じゃしよういちによ なんみようほうれんげきよう らいはい うんぬん
だいにじゅうし れんげ にじ らいはい じゅうしよ こと

第二十四 蓮華の二字は礼拝の住所の事

御義口伝に云わく、蓮華とは因果の二法なり。悪因あ
おんぎくでん い れんげ いんが にほう あくいん
あつか かん ぜんいん ぜんか かん ないしよう なんだち

れば悪果を感じ、善因あれば善果を感じず。内証には汝等
さんいんぶつしょう ぜんいん じ あらわ とき ぜんか な かいとう

三因仏性の善因あり、事に顕す時は善果と成つて「皆当
さぶつ みなまさ さぶつ らいはい うんぬん

作仏（皆当に作仏すべし）「すべしと礼拝したもうなり云々。
だいにじゅうご じっぼうど らいはい じゅうしよ こと

第二十五 実報土は礼拝の住所の事

御義口伝に云わく、実報土は豎の時は菩薩の住所なり。
おんぎくでん い じっぼうど たて とき ぼさつ じゅうしよ

よつて、不軽菩薩の住所を実報土と定めて、ここに
ふきようぼさつ じゅうしよ じっぼうど さだ

らいはい ぎよう た じつぼうど らいはい じゆうしよ
礼拝の行を立てたもうあいだ、実報土は礼拝の住所なり
うんぬん
云々。

だいにじゆうろく じひ にじ らいはい じゆうしよ こと
第二十六 慈悲の二字は礼拝の住所の事

おんぎくでん い ふきようらいはい ぎよう かいとうさぶつ みなまさ
御義口伝に云わく、不軽礼拝の行は「皆当作仏（皆当に

さぶつ おし ゆえ じひ すで じようもく がしやく
作仏すべし）」と教うるが故に慈悲なり。既に杖木・瓦石を

ちようちやく に「ごうどくし し
もつて打擲すれども、「而強毒之（しかも強いてこれを毒

す）」するは、慈悲より起これり。「仏心とは、大慈悲心こ

と らいはい じゆうしよ じひ うんぬん
れなり」と説かれたれば、礼拝の住所は慈悲なり云々。

だいにじゆうしち らいはい じゆうしよ ぶんしんそく こと
第二十七 礼拝の住所は分真即の事

おんぎくでん い ぼさつ ぶんしんそく くらい ぎだ
御義口伝に云わく、菩薩は分真即の位と定むるなり。

くらい た りそく ほんぷ らいはい
この位に立って理即の凡夫を礼拝するなり。

りそく ほんぷ じゆき う
これによつて、理即の凡夫なるあいだ、この授記を受け

むちびく むち びく そし うんぬん
ずして「無智比丘（無智の比丘）」と謗りたり云々。

だいにじゆうはち くきようそく らいはい じゆうしよ こと
第二十八 究竟即は礼拝の住所の事

おんぎくでん い ほんうしよけん み あ
御義口伝に云わく、「凡有所見（およそ見るところ有る）」

けん ぶちちけん ぶちちけん じようまん ししゆ らいはい
の「見」は、仏知見なり。仏知見をもつて上慢の四衆を礼拝

くきようそく らいはい じゆうしよ さだ うんぬん
するあいだ、究竟即を礼拝の住所と定むるなり云々。

だいにじゆうく ほうかい らいはい じゆうしよ こと
第二十九 法界は礼拝の住所の事

おんぎくでん

い

ほうかい

た

らいはい

ほうかい

御義口伝に云わく、法界に立つて礼拝するなり。法界と

ひろ

せま

そう

ほう

しよほう

は広きにあらず、狭きにあらず。総じて、法とは諸法なり、

かい

きようがい

じごくかないないしぶつかい

おのおのさかい

のつと

界とは境界なり。地獄界乃至仏界、各々界を法るあいだ、

ふきようぼさつ

ふきようぼさつ

かい

のつと

じようまん

ししゆ

ししゆ

かい

不軽菩薩は不軽菩薩の界に法り、上慢の四衆は四衆の界

のつと

ほうかい

ほうかい

らいはい

じたふに

に法るなり。よつて、法界が法界を礼拝するなり。自他不二

らいはい

ゆえ

ふきようぼさつ

ししゆ

らいはい

じようまん

の礼拝なり。その故は、不軽菩薩の四衆を礼拝すれば、上慢

ししゆ

そな

ぶつしよう

ふきようぼさつ

らいはい

の四衆の具うるところの仏性もまた不軽菩薩を礼拝するな

かがみ

む

らいはい

とき

う

かげ

われ

らいはい

り。鏡に向かつて礼拝をなす時、浮かべる影また我を礼拝す

うんぬん

るなり云々。

だいさんじゅう らいはい じゅうしよ にんにくじ こと

第三十 礼拝の住所は忍辱地の事

おんぎくでん い すで じょうまん ししゆ めり しんに

御義口伝に云わく、既に、上慢の四衆、罵詈・瞋恚を

こもう じゆき そし ふしようしんに しんに

なして虚妄の授記と諍るといへども、「不生瞋恚（瞋恚を

しょう と にんにくじ じゅう らいはい ぎよう た

生ぜず」と説くあいだ、忍辱地に住して礼拝の行を立つ

うんぬん

るなり云々。

はじ ひと じゅうしよ よる ふ がくしや し のち

初めの一つの住所は、世流布の学者も知れり。後の

じゅうさんかしよ とうせい がくしや し うんぬん

十三箇所は、当世の学者知らざることなり云々。

いじよう じゅうしかじよう らいはい じゅうしよ うんぬん

已上、十四箇条の礼拝の住所なり云々。

じんりきほんはちか だいじ
神力品八箇の大事

だいいち

みようほうれんげきようによらいじんりき

こと

第一 「妙法蓮華経如来神力」の事

もんぐ

じゆう

い

じん

ふしき

な

りき

かんゆう

文句の十に云わく『神』は不測に名づけ、『力』は幹用

な

ふしき

すなわ

てんねん

たいふか

かんゆう

すなわ

てんぺん

りき

に名づく。不測は則ち天然の体深く、幹用は則ち転変の力

だい

なか

じんぼう

ふぞく

じっしゆ

だいいりき

げん

大なり。この中、深法を付嘱せんがために、十種の大力を現

ゆえ

じんりきほん

な

ず。故に『神力品』と名づく。

おんぎくでん

い

みようほうれんげきよう

しやくそん

みようほう

御義口伝に云わく、この「妙法蓮華経」は釈尊の妙法

すで

ほん

とき

じようぎようぼさつ

ふぞく

にはあらざるなり。既にこの品の時、上行菩薩に付嘱し

ゆえ

たもう故なり。

そう

みようほうれんげきよう

じようぎようぼさつ

ふぞく

総じて、妙法蓮華經を上行菩薩に付嘱したもうこと

ほうとうほん

とき ことお

じゆりようほん

とき ことあらわ

じんりき

は、宝塔品の時、事起こり、寿量品の時、事顕れ、神力・

ぞくるい

とき ことお

によらい

かみ じゆりようほん

によらい

嘱累の時、事竟わるなり。「如来」とは、上の寿量品の如来

じんりき

じっしゆ

じんりき

せん

なり。「神力」とは、十種の神力なり。詮ずるところ、

みようほうれんげきよう

ごじ

たましい

ちから

じんりき

かみ

妙法蓮華經の五字は神と力となり。「神力」とは、上の

じゆりようほん

とき

によらいひみつ

じんずうしりき

もん

おな

寿量品の時の「如来秘密・神通之力」の文と同じきなり。

いま にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉るところの

だいもく

じっしゆ

じんりき

ざいせ

めつご

わた

題目なり。この十種の神力は、在世・滅後に亘るなり。し

じっしゆとも

めつご

かぎ

こころう

かりといえども、十種共に滅後に限ると心得べきなり。

みようほうれんげきようによらい

じん

りき

また云わく、「妙法蓮華経如来」と「神」との「力」

ほん

こころう

うんぬん

によらい

いっさいしゆじよう

の「品」と心得べきなり云々。「如来」とは、一切衆生な

じゆりようほん

しやく

によらい

かみ しやく

り。寿量品のごとし。よつて、釈にも『如来』は上に釈

お

い

じん

さんのうしちしやとご

し畢わんぬ」と云えり。この「神」とは、山王七社等なり。

むね

あん

うんぬん

この旨これを案ずべきなり云々。

だいに

すいこうちようぜつ

こうちようぜつ

い

こと

第二 「出広長舌（広長舌を出だしたもう）」の事

おんぎくでん

い

こう

しやくもん

ちよう

ほんもん

御義口伝に云わく、「広」とは迹門、「長」とは本門、

ぜつ

ちゆうどうほつししよう

じつぼうかい

みようほう

くどく

「舌」とは中道法性なり。十法界は、妙法の功德なれば

こう

い

たて

たか

ちよう

い

こう

「広」と云うなり、豎に高ければ「長」と云うなり。「広」

さんぜんじんてん

このかた

みようほう

ちよう

ごひやくじんてん

とは三千塵点より已来の妙法、「長」とは五百塵点より

このかた

みようほう

おな

こうちようぜつ

うんぬん

已来の妙法、同じく「広長舌」なり云々。

だいさん

じつぼうせかい

しゅほうじゆげ

ししぎじよう

じつぼう

せかい

もろもろ

第三 「十方世界、衆宝樹下、師子座上（十方の世界の衆

ほうじゆ

もと

ししぎ

かみ

こと

の宝樹の下、師子座の上）の事

おんぎくでん

い

じつぼう

じつかい

しも

御義口伝に云わく、「十方」とは、十界なり。この下に

そうもくじようぶつ

ふんみよう

しし

し

しししよう

おいて、草木成仏、分明なり。「師子」とは、「師」は師匠、

し

でし

ざじよう

じやつこうど

じつかいそくほんぬ

「子」は弟子なり。「座上」とは、寂光土なり。十界即本有の

じやつこうど

うんぬん

寂光国土なり云々。

だいし

まんひやくせんざい

ひやくせんさい

み

こと

第四 「満百千歳（百千歳を満たす）の事

おんぎくでん い まん ほうかい ひやく ひやつかい
御義口伝に云わく、「満」とは法界なり、「百」は百界

なり、「千」は千如なり。一念三千を、「満百千歳」と説く
せん せんによ いちねんさんぜん まんひやくせんざい と
うんぬん いちじ いちねん まんひやくせんざい

なり云々。一時も一念も「満百千歳」にして、十種の神力
げん じっしゆ じんりき じっかい じんりき じっしゆ じんりき
を現ずるなり。十種の神力とは、十界の神力なり。十界の

各々の神力は、一種の南無妙法蓮華経なり云々。
おのおの じんりき いっしゆ なんみようほうれんげきよう うんぬん
だいご じかいろくしゅしんどう ごちゆうしゅじよう しゅほうじゅげ ち みなろくしゅ

第五 「地皆六種震動。其中衆生○衆宝樹下（地は皆六種
しんどう なか しゅじよう しゅ ほうじゆ もと こと
に震動す。その中の衆生○衆の宝樹の下）」の事
おんぎくでん い じ こくどせけん ごちゆう

御義口伝に云わく、「地」とは、国土世間なり。「其中
しゅじよう しゅじようせけん しゅほうじゅげ ごおんせけん
衆生」とは、衆生世間なり。「衆宝樹下」とは、五陰世間な

いちねんさんぜんぶんみよう
うんぬん
り。一念三千分明なり云々。

だいろく しゃば ぜちゆううぶつ みようしゃかむにぶつ しゃば なか

第六 「娑婆、是中有仏、名釈迦牟尼仏（娑婆、この中に

ほとけいま しゃかむにぶつ な こと

仏有し、釈迦牟尼仏と名づけたてまつる」の事

おんぎくでん い ほんげぐつう みようほうれんげきよう だいにんにく

御義口伝に云わく、本化弘通の妙法蓮華經を大忍辱の

ちから ぐつう しゃば い にんにく

力をもつて弘通するを、「娑婆」と云うなり。「忍辱」は、

じやつこうど になんく こころ しゃかむにぶつ しゃば

寂光土なり。この忍辱の心を、「釈迦牟尼仏」といえり。「娑婆」

かんにんせかい い うんぬん

とは、堪忍世界と云うなり云々。

だいしち しにんぎようせけん のうめつしゆじようあん ひと せけん ぎよう

第七 「斯人行世間 能滅衆生闇（この人は世間に行じ

よ しゆじよう やみ めつ こと

て、能く衆生の闇を滅す」の事

おんぎくでん

い

しにん

じようぎようぼさつ

せけん

御義口伝に云わく、「斯人」とは、上行菩薩なり。「世間」

だいにほんこく

しゅじようあん

ほうぼう

だいいじゅうびよう

とは、大日本国なり。「衆生闇」とは、謗法の大重病な

のうめつ

たい

なんみようほうれんげきよう

いま

にちれんとう

り。「能滅」の体とは、南無妙法蓮華経なり。今、日蓮等の

たぐ

うんぬん

類い、これなり云々。

だいはち

ひつきようじゅういちじよう

ぜにん おぶつどう

けつじようむうぎ

ひつきよう

第八 「畢竟住一乗〇是人於仏道 決定無有疑（畢竟し

いちじよう

じゅう

ひと

ぶつどう

けつじよう

うたが

て一乗に住す〇この人は仏道において、決定して疑いあ

こと

ることなけん」の事

おんぎくでん

い

ひつきよう

こうせん るふ

御義口伝に云わく、「畢竟」とは広宣流布なり。

じゅういちじよう

なんみようほうれんげきよう

いっぼう

じゅう

「住一乗」とは、南無妙法蓮華経の一法に住すべきもの

ぜにん

みょうじそく

ほんぷ

ぶつどう

くきょうそく

なり。「是人」とは名字即の凡夫なり。「仏道」とは究竟即な

ぎ

こんほんぎわく

むみょう

さ

まつぽうとうこん

り。「疑」とは根本疑惑の無明を指すなり。末法当今は、こ

きょう

じゆじ

いちぎょう

じょうぶつ

さだ

の経を受持する一行ばかりにして成仏すべしと定むる

うんぬん

なり云々。

ぞくるいほんさんか

だいじ

嘱累品三箇の大事

だいいち

じゅうほうぎ

き

ほうざ

た

第一 「従法座起（法座より起つ）」の事

おんぎくでん

い

き

とうちゆう

ざ

た

とうげ

御義口伝に云わく、「起」とは、塔中の座を起つて塔外

ぎしき

さんま

ふぞくあ

さんま

ふぞく

しんく

の儀式なり。三摩の付嘱有るなり。三摩の付嘱とは、身・口・

い さんごう さんたい さんがん ふぞく
意の三業、三諦、三観と付嘱したもうことなり云々。
うんぬん

だいに によらい ぜいつさいしゅじょう しだいせしゅ によらい いつさいしゅじょう
第二 「如来は一切衆生之大施主（如来はこれ一切衆生の

だいせしゅ こと
大施主なり）」の事

おんぎくでん い によらい ほんぼうふ しぎ によらい
御義口伝に云わく、「如来」とは本法不思議の如来なれ

ほけきよう ぎようじゃ さ だいせしゅ せ
ば、この法華經の行者を指すべきなり。「大施主」の「施」

まつぼうとうこんるふ なんみようほうれんげきよう しゅ じようぎようぼさつ
とは末法当今流布の南無妙法蓮華經、「主」とは上行菩薩

こころう とうほん しやくもん
のことと心得べきなり。しかりといえども、当品は迹門

ふぞく ほん じようぎようぼさつ はじめ ふぞく
付嘱の品なり。上行菩薩を首として付嘱したもうあいだ、

じようぎようぼさつ ごほんい み うんぬん
上行菩薩の御本意と見たるなり云々。

だいさん

によせせんちよく

とうぐぶぎよう

せそん

ちよく

まさ

第三 「如世尊勅、当具奉行（世尊の勅のごとく、当につ

ぶぎよう

こと

ぶさに奉行すべし」の事

おんぎくでん

い

もろもろ

ぼさつとう

せいごん

もん

しよてん

御義口伝に云わく、諸の菩薩等の誓言の文なり。諸天

ぜんじん

ぼさつとう

にちれんとう

たぐ

かんぎよう

もん

善神・菩薩等を日蓮等の類い諫曉するは、この文によるな

うんぬん

り云々。

やくおうほんろつか

だいじ

薬王品六箇の大事

だいいち

ふによじゆじしほけきよう

ないしいちしくげ

ほけきよう

ない

第一 「不如受持此法華経、乃至一四句偈（この法華経の乃

しいちしくげ

じゆじ

こと

至一四句偈を受持するにはしかず」の事

おんぎくでん

い

ほけきよう

いつきようにじゅうはつぽん

御義口伝に云わく、「法華経」とは、一経二十八品な

いちしくげ

だいまく

ごじ

こころう

うんぬん

り。「二四句偈」とは、題目の五字と心得べきなり云々。

だいに

じゅうゆ

こと

第二 十喩の事

おんぎくでん

い

じゅうゆ

じっかい

さん

御義口伝に云わく、十喩とは、十界なり。この「山」

もと

じごくかい

ふく

せんるこうが

がき

ちくしよう

せつ

の下に地獄界を含めり。「川流江河」に餓鬼・畜生を撰せ

にちがつ

もと

しゆら

おさ

たいしゃく

ぼんでん

てんかい

り。「日月」の下に修羅を収めたり。「帝釈・梵天」は、天界

ほんぷにん

にんげん

しょうもん

しこうしか

なり。「凡夫人」とは、人間なり。声聞とは、「四向四果の

あらかん

えんがく

びやくしぶつちゆう

びやくしぶつ

なか

と

阿羅漢」なり。縁覚とは、「辟支仏中（辟支仏の中）」と説か

ぼさつ

ぼさつ くだい

ぼさつ

くだい

い

れたり。菩薩は、「菩薩為第一（菩薩はこれ第一なり）」と云

ぶっかい

によぶつ いしよほうおう

ほとけ

しよほう

おう

えり。仏界とは、「如仏為諸法王（仏はこれ諸法の王なる

み

じっかい

じゅうゆ

あ

きようそう

がごとし）」と見えたり。この十界を十喩と挙げて教相を

ふんべつ

みようほうれんげきよう

おいちぶつじよう

いちぶつじよう

分別して、さて妙法蓮華経の「於一仏乘（一仏乘におい

ふんべつせつさん

ふんべつ

さん

と

とき

て）」より「分別説三（分別して三を説きたもう）」する時、

あ

いちねんさんぜん

ほうもん

いちねん

かくのごとく挙げたり。よつて一念三千の法門なり。一念

さんぜん

ばつく よらく

三千は抜苦与楽なり。

だいさん

りいっさいく

いっさいびようつう

のうげいっさいしようじしばく

いっさい

く

第三 「離一切苦・一切病痛、能解一切生死之縛（一切の苦・

いっさい

びようつう

はな

よ

いっさい

しようじ

ばく

と

こと

一切の病痛を離れ、能く一切の生死の縛を解く）」の事

おんぎくでん

い

ほっけ

こころ

ほんのうそくぼだい

しようじそく

御義口伝に云わく、法華の心は煩惱即菩提・生死即

ねはん

涅槃なり。「離」り「解」げの二字は、この説相せつそうに背そむくなり。し

ほんもんじゆりよう

かるに「離」りの字をば「明らむ」とよむなり。本門寿量の

えげんあ

み

ほんらいほんぬ

びようつう

くのう

あき

慧眼開けて見れば、本来本有の病痛・苦惱なりと明らめた

じじゆゆうほうしん

ちえ

われ

しやうじ

り。よつて、自受用報身の智慧なり。「解」げとは、我らが生死

いまはじ

しやうじ

ほんらいほんぬ

しやうじ

しかく

は今始まりたる生死にあらず、本来本有の生死なり。始覚の

しばくと

うんぬん

り

げ

にじ

なんみやうほうれんげきやう

思縛解くるなり云々。「離」り「解」げの二字は南無妙法蓮華経な

うんぬん

り云々。

だいし

かふのうしやう

すいふのうひやう

ひ

や

あた

みず

第四 「火不能焼、水不能漂（火も焼くこと能わず、水も

ただよ

あた

こと

漂わすこと能わず)の事

おんぎくでん い
御義口伝に云わく、「火」かとは、阿鼻あびの炎ほのおなり。「水」すい

ぐれん こおり
とは、紅蓮の氷なり。今、日蓮等の類いまま にちれんとう たぐい、南無妙法蓮華經なんみょうほうれんげきょう

とな たてまつ もの
と唱え奉る者は、かくのごとくなるべし云々。うんぬん

だいご しょよおんてき かいしつざいめつ しょよ おんてき ざいめつ
第五 「諸余怨敵、皆悉摧滅（諸余の怨敵は、みな摧滅す）」

の事 こと

おんぎくでん い おんてき ねんぶつ ぜん しんごんとう
御義口伝に云わく、「怨敵」おんてきとは、念仏・禅・真言等の

ほうぼう ひと ざいめつ ほんげ しゃくぶつ ごんもん り は
謗法の人なり。「摧滅」ざいめつとは、「法華の折伏は権門の理を破

いま にちれんとう たぐ なんみょうほうれんげきょう とな たてまつ
す」なり。今、日蓮等の類いまま にちれんとう たぐい、南無妙法蓮華經と唱え奉る、

うんぬん
これなり云々。

だいろく

にやくにん うびよう

とくもんぜきよう

びようそくししようめつ

ふろうふし

第六 「若人有病、得聞是経、病即消滅、不老不死（も

ひとやまいあ

きようき

え

やまい すなわ

し人病有らんに、この経を聞くことを得ば、病は即ち

しようめつ

ふろうふし

こと

消滅して、不老不死ならん」の事

もんぐ

じゆう

い

かん

げ

文句の十に云わく「これすべからく観もて解すべきな

り」。

おんぎくでん

い

にやくにん

かみぶつか

しもじごく

御義口伝に云わく、「若人」とは、上仏果より下地獄の

ざいにん

おさ

びよう

さんどく

ぼんのう

罪人までこれを撰むべきなり。「病」とは、三毒の煩惱な

ぶつぼさつ

あ

ふろう

しゃくそん

り。仏菩薩においてもまたこれ有るなり。「不老」は釈尊、

ふし

じゆ

たぐ

めつごとうこん

しゆじよう

「不死」は地涌の類いたり。これは滅後当今の衆生のため

とに説かれたり。しかれば、「病」とは謗法なり。この經を
じゆじ たてまつ もの びようそくしやうめつ うたが いま にちれん
受持し奉る者は、「病即消滅」疑いなきなり。今、日蓮
とう たぐ なんみやうほうれんげきやう とな たてまつ もの うんぬん
等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者、これなり云々。

みやうおんぼんさんか だいじ
妙音品三箇の大事

だいいち みやうおんぼさつ こと
第一 「妙音菩薩」の事

おんぎくでん い みやうおんぼさつ じっかい しゆじやう
御義口伝に云わく、「妙音菩薩」とは、十界の衆生な

り。妙とは、不思議なり。「音」とは、一切衆生の吐く
みやう ふしぎ おん いっさいしゆじやう は

ところの語言音声、妙法の音声なり。三世常住の妙音
おんじやう みやうほう おんじやう さんぜじやうじゆう みやうおん

なり。所用しよゆうに随したがつて諸事しよじを弁べんずるは、慈悲じひなり。これを

「菩薩ぼさつ」と云いうなり。また云いわく、「妙音みょうおん」とは、今いま、日蓮にちれん

とう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ まつぽうとうこん

等の類れいい、南無妙法蓮華經なんみょうほうれんげきようと唱となえ奉たてまつることは、末法当今の

ふしぎ おんじよう ゆえ ほんのうそくぼだい しょうじそくねはん

不思議ふしぎの音声おんじようなり。その故ゆえは、煩惱ぼんのう即菩提そくぼだい・生死しょうじ即涅槃そくねはんの

みようおん うんぬん

妙音みょうおんなり云々。

だいに にくけい びやくごう こと

第二だいに 「肉髻にくけい」 「白毫びやくごう」の事こと

おんぎくでん い ふた そうごう こうじゆん しちよう

御義口伝おんぎくでんに云いわく、この二つの相好ふたは「孝順師長こうじゆん しちよう」

しちよう こうじゆん お ほけきよう たも たてまつ

(師長しちように孝順こうじゆんす)「より起おここれり。法華經ほけきようを持ち奉たてまつるをも

いっさい こうよう さいちよう い びやくごう

つて一切いっさいの孝養こうようの最頂さいちようとせり。また云いわく、この「白毫びやくごう」

とは父の姪なり、「肉髻」とは母の姪なり。赤白二諦、今經ちち いん にくけい はは いん しゃくびやくにたい こんきよう

に来つて「肉髻」「白毫」の相と顕れたり。また云わく、きた にくけい びやくごう そう あらわ い

「肉髻」は随縁真如の智なり、「白毫」は不變真如の理なにくけい ずいえんしんによ ち びやくごう ふへんしんによ り

り。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉るは、いま にちれんとう たぐ なんみやうほうれんげきよう とな たてまつ

これらの相好を具足するなり。我らが生の始めは赤色のそうごう ぐそく われ しょう はじ しゃくしき

肉髻なり。死して後の白骨は白毫相なり。生の始めのにくけい し のち はっこつ びやくごうそう しょう はじ

赤色は随縁真如の智なり、死して後の白骨は不變真如の理しゃくしき ずいえんしんによ ち し のち はっこつ ふへんしんによ り

なり。秘すべし、秘すべし云々。ひ うんぬん

第三 「八万四千七宝鉢（八万四千の七宝の鉢）」の事だいさん ぼちまんしせんしつぽうはち ぼちまんしせん しつぽう はち こと

おんぎくでん い もん みようおんぼさつ うんらいおんのうぶつ
御義口伝に云わく、この文は妙音菩薩、雲雷音王仏に

たてまつ

くよう

はち

いま

にちれんとう

たぐ

奉るところの供養の鉢なり。今、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

もの

はちまんしせん

はち

さんぜ

南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、八万四千の鉢を三世の

しよぶつ

くよう

たてまつ

はちまんしせん

われ

はちまんしせん

諸仏に供養し奉るなり。「八万四千」とは、我らが八万四千

じんろう

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

はちまん

の塵勞なり。南無妙法蓮華経と唱え奉るところにて八万

しせん

ほうもん

あらわ

ほけきよう

もんじ

かいけつにきよう

がつ

四千の法門と顕るるなり。法華経の文字は、開結二経を合

はちまんしせん

しては八万四千なり。

い

はち

はつく

し

しろうろうびようし

また云わく、「八」とは、八苦なり。「四」とは、生老病死

しつぽう

ずじよう

しちけつ

はち

ちき

なり。「七宝」とは、頭上の七穴なり。「鉢」とは、智器な

みょうぼう ちすい じゆじ
り。妙法の智水を受持するをもつて、はち「鉢」とは心得こころうべき
なり云々。うんぬん

ふもんぼんご か だいじ
普門品五箇の大事

だいいち むじん にぼさつ こと
第一 「無尽意菩薩」の事

おんぎくでん い むじん に えんゆう さんたい
御義口伝に云わく、「無尽意」とは、円融の三諦なり。

む くうたい じん けたい い ちゆうどう かんぜおん
「無」とは空諦、「尽」とは假諦、「意」とは中道なり。「観世音」

かん くうたい ぜ けたい おん ちゆうどう
とは、「観」は空諦、「世」は假諦、「音」は中道なり。

みょうほうれんげきょう みょう くうたい ほうれんげ けたい
「妙法蓮華經」とは、「妙」とは空諦、「法蓮華」とは假諦、

きよう

ちゆうどう

さんたいほつししよう

みようり

さんたい

かんぜおん

「経」とは中道なり。三諦法性の妙理を、三諦の「観世音」

さんたい

むじんに

たい

と

いま

にちれんとう

と三諦の「無尽意」に対して説きたもうなり。今、日蓮等の

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

もの

まつぼう

むじんに

類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、末法の「無尽意」

せん

む

われ

し

そう

じん

なり。詮ずるところ、「無」とは、我らが死の相なり。「尽」

われ

ししよう

そう

い

われ

みようこん

とは、我らが生の相なり。「意」とは、我らが命根なり。

いっさい

ほうもん

きようちみようごうとう

ほうもん

い

しかるあいだ、一切の法門、境智冥合等の法門、「意」

いちじ

しようにゆう

い

ちゆうどうほつししよう

の一字にこれを撰入す。この「意」とは、中道法性な

ほつししよう

なんみようほうれんげきよう

い

ごじ

り。法性とは、南無妙法蓮華経なり。よつて、「意」の五字

われ

たいない

ごい

なか

だいがばん

ぎよう

なり。我らが胎内の五位の中には第五番の形なり。その故

われ

たいない

ごい

なか

だいがばん

ぎよう

ゆえ

だいごばん

すがた

ごりん

ごりん

すなわ

みようほうとう

ごじ

は、第五番の姿は五輪なり。五輪は即ち妙法等の五字な

ごじ

いじ

ぶつ

みようほう

ごじ

り。この五字、また「意」の字なり。仏意とは、妙法の五字

べつ

な

ほとけ

ごころ

ほけきよう

なり。このこと別にこれ無し。仏の意とは、法華経なり。

じゆりようほん

ぜごころうやく

よ

ろうやく

さんぜ

これを寿量品にして「是好良薬（この好き良薬）」とて、三世

しよぶつ

この

ろうやく

と

しんらさんぜん

しよほう

い

の諸仏の好みの良薬と説かれたり。森羅三千の諸法は、「意」

いちじ

す

ほとけ

ごころ

しん

しんじん

の一字には過ぎざるなり。この仏の意を信ずるを、信心と

もう

ごころ

うふんべつ

みようほう

ぜんたい

は申すなり。されば、心は有分別なり。ともに妙法の全体

うんぬん

なり云々。

だいに

かんのんみよう

こと

第二 「観音妙」の事

おんぎくでん い みようほう ほんご さだるま い
御義口伝に云わく、「妙法」の梵語は「薩達摩」と云う

なり。「薩」さとは、「妙」みようと翻ず。この「薩」ほんの字は、かんの
観音の

種子なり。よつて、「観音と法華とは、眼目の異名なり」と
しゅじ かんのん ほつけ げんもく いみよう

釈せり。今、末法に入つて、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經
しゃく いま まつほう い にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう

と唱え奉ることとは、観音の利益より天地雲泥せり。
とな たてまつ かんのん りやく てんちうんदै

詮ずるところ、「観」かんとは、円観なり。「世」ぜとは、不思議
せん かん えんかん ぜ ふしぎ

なり。「音」おんとは、仏機なり。「観」かんとは、法界の異名なり。
おん ぶつき かん ほうかい いみよう

既に円観なるが故なり。諸法実相の「観世音」なれば、地獄・
すで えんかん ゆえ しよほうじつそう かんぜおん じごく

餓鬼・畜生等の界々を不思議世界と知見するなり。「音」
がき ちくしようとう かいがい ふしぎせかい ちけん おん

しよほうじつそう

しゅじよう

じつそう

ほとけ

とは、諸法実相なれば、衆生として実相の仏にあらずと

じゆりようほん

とき

じっかいほんぬ

と

むさ

さんじん

いうことなし。寿量品の時は十界本有と説いて無作の三身

かんのんすで

ほげきよう

りようじゆ

きようじゆじ

なり。観音既に法華経を頂受せり。しかれば、この経受持

ぎようじゃ

かんぜおん

りやく

すぐ

うんぬん

の行者は、観世音の利益より勝れたり云々。

だいさん

ねんねんもつしようぎ

ねんねん

うたが

しよう

第三 「念々勿生疑（念々に疑いを生ずることなかれ）」

こと

の事

おんぎくでん

い

ねんねん

ひと

ねん

ろくぼん

御義口伝に云わく、「念々」とは、一つの念は六凡なり、

ひと

ねん

ししよう

ろくぼんししよう

りやく

ほごこ

ぎしん

一つの念は四聖なり。六凡四聖の利益を施すなり。疑心を

しよう

うんぬん

生ずることなかれ云々。

また云わく、い「念々」ねんねんとは、前念ぜんねん・後念ごねんなり。また云わ

みようほう ねん うたが しょう うんぬん さんぜ

く、妙法を念ずるに、疑うたがを生しょうずべからず云々。また三世

じようじゆう ねんねん かみ もん ぜ こしゆじゆう

常住の「念々」なり。これによつて、上の文に「是故衆生

ねん ゆえ しゆじゆう ねん いま にちれんとう たぐ

念ねん（この故に衆生は念ず）と。今、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう とな たてまつ ねんねんもつしやうぎ しんじん じゆう

南無妙法蓮華経と唱え奉たてまつつて、「念々勿生疑」の信心に住

ぼんのうそくぼだい しやうじそくねはん うたが

すべきなり。煩惱即菩提・生死即涅槃、疑うたがいあるべからざ

うんぬん

るなり云々。

だいし に ぐりやうがん こと

第四 二求両願の事

おんぎくでん い に ぐ ぐなん おのこ もと

御義口伝に云わく、「二求」とは、「求男（男を求む）」

ぐによ めのこ もと

ぐによ

せけん

かほう

ぐなん

「求女（女を求む）」なり。「求女」とは世間の果報、「求男」

しゅつせ かほう

げんせあんのん

ぐによ

とく

とは出世の果報なり。よつて、「現世安穩」は、「求女」の徳

ごしやうぜんしよ

のち

ぜんしよ

しやう

ぐなん

とく

なり。「後生善処（後に善処に生ず）」は、「求男」の徳な

ぐによ

りゆうによ

じやうぶつ

しやうじそくねはん

あらわ

ぐなん

り。「求女」は、竜女が成仏、生死即涅槃を躰すなり。「求男」

だいば

じやうぶつ

ぼんのうそくぼだい

あらわ

われ

そくしんじやうぶつ

は、提婆が成仏、煩惱即菩提を躰すなり。我らが即身成仏

あらわ

いま

にちれんとう

たぐ

なんみやうほうれんげきやう

とな

たてまつ

を躰すなり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉

ぎやうじや

ぐなん

ぐによ

まんぞく

ふぼ

じやうぶつけつじやう

る行者は、「求男」「求女」を満足して、父母の成仏決定

うんぬん

するなり云々。

だいご

さんじゆうさんしん

りやく

こと

第五 三十三身の利益の事

おんぎくでん

い

さんじゅう

さんぜん

ほうもん

さん

御義口伝に云わく、「三十」とは、三千の法門なり。「三

身

さんたい

ほうもん

うんぬん

い

さんじゅうさんしん

身」とは、三諦の法門なり云々。また云わく、「三十三身」

じっかい

さんじん

ぐ

じっかい

さんじゅう

もと

さんじん

とは、十界に三身ずつ具すれば十界には三十、本の三身を

くわ

さんじゅうさんしん

せん

さん

さんごう

加うれば三十三身なり。詮ずるところ、「三」とは、三業な

じゅう

「じっかい

さん

さんどく

しん

り。「十」とは、十界なり。「三」とは、三毒なり。「身」

いっさい しゅじょう

み

いま

にちれん どう

たぐ

とは、一切衆生の身なり。今、日蓮等の類い、

なんみょうほうれんげきょう

とな

たてまつ

もの

さんじゅうさんしん

りやく

南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、「三十三身」の利益な

うんぬん

り云々。

だらにほんろつか だいじ
陀羅尼品六箇の大事

だいいち だらに こと

第一 「陀羅尼」の事

おんぎくでん い だらに なんみようほうれんげきよう

御義口伝に云わく、「陀羅尼」とは、南無妙法蓮華経な

ゆえ だらに しようぶつ みつご だいもく ごじ さんぜ

り。その故は、陀羅尼は諸仏の密語なり。題目の五字は、三世

しようぶつ ひみつ みつご いま にちれん とう たぐ

の諸仏の秘密の密語なり。今、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう とな たてまつ だらに ぐつう

南無妙法蓮華経と唱え奉るは、「陀羅尼」を弘通するなり。

あく す ぜん たも ゆえ うんぬん

「悪を捨て善を持つ」の故なり云々。

だいに あに まに こと

第二 「安爾、曼爾」の事

おんぎくでん い あに し まに かん

御義口伝に云わく、「安爾」とは止なり、「曼爾」とは観

なり。この「安爾」あに「曼爾」まにより止觀の二法を釈し出だせしかん にほう しゃく い

り。よつて、この呪は藥王菩薩の呪なり。じゆ やくおうぼさつ じゆ藥王菩薩は天台のやくおうぼさつ てんだい

本地なり。「安爾」あには、我らが心法なり、妙なり。「曼爾」まに

は、我らが色法なり、法なり。色心妙法と呪する時は、われ しきほう ほう じゆ とき

即身成仏なり云々。そくしんじようぶつ うんぬん

第三 「鬼子母神」の事だいさん きしもじん こと

御義口伝に云わく、「鬼」おんぎくでん い きとは父なり、「子」ちち しとは十羅刹女じゆうらせつによ

なり、「母」もとは伽利帝母なり。逆次に次第する時は、「神」か りていも ぎやくじ しだい とき じん

とは九識なり、「母」くしき もとは八識へ出ずる無明なり、「子」はっしき い むみよう しと

は七識・六識なり、「鬼」とは五識なり。流転門の時は悪鬼

なり、還滅門の時は善鬼なり。よつて、十界互具・百界千如

の一念三千を、「鬼子母神」「十羅刹女」と云うなり。三宝荒神

とは、十羅刹女のことなり。いわゆる、飢渴神・貪欲神・障礙

神なり。今、法華經の行者は、三毒即三徳と転ずるが故に、

三宝荒神にあらざるなり。荒神とは、法華不信の人なり。

法華經の行者の前にては守護神なり云々。

第四 「受持法華名者、福不可量（法華の名を受持せん者、

福は量るべからず）」の事

おんぎくでん い ほっけみよう だいもく しゃ

御義口伝に云わく、「法華名」と云うは、題目なり。「者」

い にほんこく いっさいしゅじよう なか ほけきよう ぎようじや

と云うは、日本国の一切衆生の中には法華經の行者なり。

い しゃ じ なんによ なか べつ によん ほ

また云わく、「者」の字は、男女の中には別して女人を讚め

によん さ しゃ い じゅうらせつによ べつ によん

たり。女人を指して「者」と云うなり。十羅刹女は別して女人

ほん れい りゆうによ どだつくしゅじよう く しゅじよう

を本とせり。例せば、竜女が「度脱苦衆生（苦の衆生を

どだつ によん く しゅじよう やくおうほん

度脱せん）」とて、女人を苦の衆生と云うがごとし。薬王品

ぜきようてんしゃ きようてん もの しゃ おな

の「是經典者（この經典の者）」の「者」と同じことなり

うんぬん

云々。

だいご こうだいによ こと

第五 「皐諦女」の事

おんぎくでん い こうだいによ ほんじ もんじゆぼさつ
御義口伝に云わく、「皐諦女」は、本地は文殊菩薩なり。

さんかい ところ ほけきよう ぎようじゃ しゆご
山海いかなる処にても法華経の行者を守護すべしという

きようもん くあくいちぜん こうだいによ いちぜん さだ
経文なり。九悪一善とて、「皐諦女」をば一善と定めたり。

じゆうあく ほんのう とき ちゆうとう こうだいによ あ ぎやくじ しだい
十悪の煩惱の時は、偷盗に皐諦女は当たれり。逆次に次第

うんぬん
するなり云々。

だいろく ごばんじんじゆ こと
第六 五番神呪の事

おんぎくでん い ごばんじんじゆ われ いっしん みよう
御義口伝に云わく、五番神呪とは、我らが一身なり。妙

じゆうらせつによ ほう じこくてんのう れん ぞうちようてんのう
とは十羅刹女なり、法とは持国天王なり、蓮とは増長天王

け こうもくてんのう きよう びしゃもんでんのう
なり、華とは広目天王なり、経とは毘沙門天王なり。この

みようほう ごとじ ごとばんじんじゆ ごとばんじんじゆ われ いっしん
妙法の五字は、五番神呪なり。五番神呪は、我らが一身な
り。

じゆうらせつによ じゆ みよう いちじ じゆうくく なら きようもん
十羅刹女の呪は、妙の一字を十九句に並べたり。経文

ねいじようが ずじよう わ こうべ うえ のほ もん
には「寧上我頭上（むしろ我が頭の上にも上るとも）」の文

じこくてん ほう いちじ くく なら きようもん
これなり。持国天は、法の一字を九句に並べたり。経文に

しじゆうにおく い し しょうろうびようし じゆう
は「四十二億」と云えり。「四」とは生老病死、「十」と

じっかい に めいご じこく えほう な ほう じっかい
は十界、「二」とは迷悟なり。持国は依報の名なり。法は十界

ぞうちようてん れん いちじ じゆうさんく なら きようもん
なり。増長天は、蓮の一字を十三句に並べたり。経文に

やくかいずいぎ みなずいき い ずいき ことば
は「亦皆随喜（また皆随喜す）」と云えり。「随喜」の言は

ぶっかい やく こうもくてん け いちじ しじゅうさんく なら
仏界に約せり。広目天は、華の一字を四十三句に並べたり。

きようもん おしよしゆじよう たしよにようやく もろもろ しゆじよう

経文には「於諸衆生、多所饒益（諸の衆生において、

にようやく おお い びしやもんでん きよう いちじ

饒益するところ多し）」と云えり。毘沙門天は、経の一字

ろっく なら きようもん じ ぜ きようしや きよう たも

を六句に並べたり。経文には「持是経者（この経を持た

もの とう もん うんぬん

ん者）」等の文これなり云々。

ごんのうほんさんか だいじ

嚴王品三箇の大事

だいいち みようしようごんのう こと

第一 「妙莊嚴王」の事

もんぐ じゆう い みようしようごん

文句の十に云わく『妙莊嚴』とは、妙法の功德も

くどく

て諸根を莊嚴するなり。」

しよこん

しやうこん

おんぎくでん

い

みよう

みようほう

くどく

しよこん

御義口伝に云わく、「妙」とは妙法の功德なり。「諸根」

ろつこん

みようほう

くどく

ろつこん

しやうこん

とは六根なり。この妙法の功德をもつて六根を莊嚴すべ

な

せん

みよう

くうたい

しやうこん

き名なり。詮ずるところ、「妙」とは空諦なり、「莊嚴」

けたい

のう

ちゆうどう

いま

にちれんとう

たぐ

とは仮諦なり、「王」とは中道なり。今、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

もの

みようしやうこんのう

南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、ことごとく「妙莊嚴王」

なり云々。

だいに

ぶもくく

う

き

あな

こと

第二 「浮木孔（浮き木の孔）」の事

おんぎくでん

い

く

しやうく

だいく

ふた

御義口伝に云わく、「孔」とは、小孔・大孔の二つこれ

あり。小孔とは四十余年の経教なり、大孔とは法華経の
題目なり。

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉るは、

大孔なり。一切衆生は一眼の亀なり。梅檀の「浮木」とは、

法華経なり。生死の大海に南無妙法蓮華経の大孔ある「浮木」

は、法華経にこれ在り云々。

第三 当品は邪見即ち正の事

御義口伝に云わく、嚴王の邪見、三人の教化により功德

を得て、邪を改めて正とせり。止の一に「辺邪、皆中正

なり」と云うはこれなり。今、日本国の一切衆生は、邪見いにして嚴王なり。日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱えごんのおうににちれんとうしてたぐ奉る者は、三人のごとし。終に、「畢竟住一乘（畢竟なんみようほうれんげきようして一乘に住す）」して、邪見即ち正なるべし云々。とな

ふげんぼんろつか だいじ
普賢品六箇の大事

だいいち こと
第一 「普賢菩薩」の事

もんぐ じゆう い かんぼつ ことば
文句の十に云わく『勸発』とは、恋法の辞なり。
おんぎくでん い かんぼつ かん けた ぼつ
御義口伝に云わく、「勸発」とは、「勸」は化他、「発」

じぎよう

ふ

しよほうじつそう

しやくもん

ふへんしんによ

り

は自行なり。「普」とは、諸法実相、迹門の不変真如の理な

げん

ちえ

ぎ

ほんもん

ずいえんしんによ

ち

り。「賢」とは、智慧の義なり、本門の随縁真如の智なり。

きようまつ

きた

ほんじやくにもん

れんぼう

しかるあいだ、経末に来て本迹二門を恋法したまえり。

せん

いま にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

詮ずるところ、今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉

もの

ふげんぼさつ

しゆご

うんぬん

る者は、普賢菩薩の守護なり云々。

だいに

にやくほけきようぎようえんぶだい

ほけきよう

えんぶだい

おこな

第二 「若法華経行閻浮提（もし法華経の閻浮提に行わ

こと

るるは）の事

おんぎくでん

い

ほけきよう

えんぶだい

ぎよう

御義口伝に云わく、この法華経を閻浮提に行ずること

ふげんぼさつ

いじん

ちから

よ

は、普賢菩薩の威神の力に依るなり。

きょう こうせんる ふ

この経の広宣流布することは、

ふげんぼさつ しゆい

普賢菩薩の守護なるべ

うんぬん

きなり云々。

だいさん

はちまんしせんてんによ

はちまんしせん

てんによ

こと

第三 「八万四千天女（八万四千の天女）」の事

おんぎくでん い

はちまんしせん

じんろうもん

すなわ

御義口伝に云わく、八万四千の塵劳門なり。これ即ち

ぼんのうそくぼだい

しょうじそくねはん

しっぽうかん

しっぽう

かんむり

煩惱即菩提・生死即涅槃なり。「七宝冠（七宝の冠）」と

ずじょう

しちけつ

いま

にちれんとう

たぐ

なんみょうほうれんげきょう

は、頭上の七穴なり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と

とな たてまつ

もの

うんぬん

唱え奉る者、これなり云々。

だいし

ぜにんみようじゅう

いせんぶつじゆしゆ

ひと

みようじゅう

せんぶつ

第四 「是人命終、為千仏授手（この人は命終して、千仏

みて

さず

う

こと

の手を授くるを為）」の事

おんぎくでん い ほっけふしん ひと みようじゆう ととき じごく

御義口伝に云わく、法華不信の人は、命終の時、地獄

だざい きよう い にやくにんふしん きぼうしきよう そくだん

に墮在すべし。経に云わく「若人不信 毀謗此経 即断

いっさい せけんぶつしゆ ごにんみようじゆう にゆうあびごく ひとしん

一切 世間仏種 其人命終 入阿鼻獄 (もし人信ぜずし

きよう きぼう すなわ いっさいせけん ぶつしゆ だん

て、この経を毀謗せば、即ち一切世間の仏種を断ぜん。

ひと みようじゆう あびごく い ほけきよう ぎようじや

その人は命終して、阿鼻獄に入らん)。法華経の行者は、

みようじゆう じようぶつ ぜにんみようじゆう いせんぶつじゆしゆ もん

命終して成仏すべし。「是人命終、為千仏授手」の文こ

せんぶつ せんによ ほうもん ほうぼう ひと ごくそつらいごう

れなり。「千仏」とは千如の法門なり。謗法の人は獄卒来迎

ほけきよう ぎようじや せんぶつらいごう いま にちれんとう

し、法華経の行者は千仏来迎したもうべし。今、日蓮等の

たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの せんぶつ らいごううたが

類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、千仏の来迎疑い

なきものなり云々。
うんぬん

だいご えんぶだいない こうりようる ふ えんぶだい うち ひろ るふ

第五 「閻浮提内、 広令流布 (閻浮提の内に、 広く流布せ

しむ)の事
こと

おんぎくでん い うち じ とう せい ぼく さんぽう

御義口伝に云わく、この「内」の字は、東・西・北の三方

きら もん こうりようる ふ ほけきよう なんえんぶだい

を嫌える文なり。「広令流布」とは、法華経は南閻浮提ば

るふ きようもん うち じ

かりに流布すべしという経文なり。この「内」の字、これ

あん いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ

を案ずべし。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉

もの ふか おも うんぬん

る者は、深くこれを思うべきなり云々。

だいりく しにん ふく とうけいどうじよう ひと ひさ まさ

第六 「此人不久当詣道場 (この人は久しからずして当に

道場どうじょうに詣いたるべし」の事こと

御義口伝おんぎくでんに云いわく、「此人しにん」とは、法華經ほけきょうの行者ぎようじやなり。

法華經ほけきょうを持ち奉たてまつる処ところを、「当詣道場とうけいどうじょう」と云いうなり。ここ

を去さつてかいしこいに行いくにはあらざるなり。「道場どうじょう」とは、十界じっかい

の衆生しゆじょうの住所じゆうじよを云いうなり。今いま、日蓮等にちれんとうの類たぐい、

南無妙法蓮華經なんみやうほうれんげきょうと唱となえ奉たてまつる者ものの住所じゆうじよは、山谷曠野せんごくこうや、皆みな、

寂光土じやくこうどなり。これいを「道場どうじょう」と云いうなり。「この因易いんかわるこ

となゆえきが故ゆえに、『直至じきし（直ただちに至いたる）』と云いう」の釈しゃく、これ

を思おもうべし。

この品の時、最上第一の相伝あり。釈尊、八箇年の

ほけきよう はちじ とど まつだい しゅじよう ゆず はちじ

法華経を八字に留めて末代の衆生に譲りたもうなり。八字

とうきおんごう とうによきようぶつ まさ た とお むか

とは「当起遠迎、当如敬仏（当に起つて遠く迎うべきこと、

まさ ほとけ うやま もん もん

当に仏を敬うがごとくすべし）」の文なり。この文までに

きよう お とう じ みらい とうきおんごう

て経は終わるなり。「当」の字は未来なり。「当起遠迎」と

かなら ほとけ ほけきよう ぎようじや うやま

は、必ず仏のごとくに法華経の行者を敬うべしという

きようもん ほっしほん お しきようがんきようじによぶつ きようかん

経文なり。法師品には「於此経巻敬視如仏（この経巻に

うやま み ほとけ い はちねん

おいて敬い視ること仏のごとし）」と云えり。八年の

ごせつぼう くちびら なんむみやうほうれんげきようほうべんぼん しよぶつち え お

御説法の口開きは南無妙法蓮華経方便品の「諸仏智慧」、終

とうきおんごう

とうによきようぶつ

はちじ

はちじ

わりは「当起遠迎、当如敬仏」の八字なり。ただこの八字

ほつけいちぶ

ようろ

もんぐ

じゆう

い

をもつて、法華一部の要路とせり。されば、文句の十に云

とうきおんごう

とうによきようぶつ

しん

もの

くどく

わく『当起遠迎、当如敬仏』よりは、その信ずる者の功德

けつ

の

ほつけいちぶ

しん

いちじ

もと

を結することを述ぶ」。法華一部は、「信」の一字をもつて本

うんぬん

とせり云々。

たず

い

いま

ほけきよう

じよほん

はじめ

によ

尋ねて云わく、今の法華経において、序品には首に「如」

じ

お

お

ふげんぼん

きよ

じ

お

らじゆうさんぞう

の字を置き、終わりの普賢品には「去」の字を置く。羅什三蔵

しんじ

ひようじ

ほうもん

の心地、いかなる表事の法門ぞや。

こた

い

こんきよう

ほつたい

じつそう

くおん

にぎ

答えて云わく、今経の法体は、実相と久遠との二義を

しようたい

はじめ

によ

じ

じつそう

あらわ

もつて正体となすなり。始めの「如」の字は実相を表し、

お

きよ

じ

くおん

あらわ

ゆえ

じつそう

終わりの「去」の字は久遠を表すなり。その故は、実相は

り

くおん

じ

り

き

くう

によ

き

理なり、久遠は事なり。理は空の義なり、空は如の義なり。

によ

り

くう

あいはい

くう

によ

き

これによつて、「如」をば理・空に相配するなり。釈に云わ

によ

ふい

な

すなわ

くう

き

くおん

じ

く「如」は不異に名づく。即ち空の義なり。久遠は事な

ゆえ

ほんもんじゆりよう

こころ

じえん

さんぜん

しょうい

り。その故は、本門寿量の心は、事円の三千をもつて正意

きよ

くおん

あ

となすなり。「去」は久遠に当たるなり。

こ

かい

ぎ

によ

くう

き

かい

ふんべつ

こころ

「去」は開の義、「如」は合の義なり。開は分別の心な

くう

むふんべつ

こころ

かいくう

しょう

ぶつ

はいとう

とき

り、合は無分別の意なり。この開合を生・仏に配当する時

は、合ごうは仏界ぶつがい、開かいは衆生しゆじようなり。序品じよほんの始めはじめに「如によ」の字じを

顯あらわしたるは、生仏しようぶつ不二ふにの義ぎなり。迹門しやくもんは不二ふにの分ぶんなり、

不ふ變へん真しん如によなるが故ゆえなり。この「如によ是ぜ我が聞もん」(かくのごときを我われ

聞ききき)の「如によ」をば、不ふ變へん真しん如によの「如によ」と習ならうなり。空くう假け

中ちゆうの三諦さんたいには、「如によ」は空くう、「是ぜ」は中ちゆう、「我聞がもん」は假諦けたい。

迹門しやくもんは空くうを面おもてとなす、故ゆえに不二ふにの上かみの而に二になり。しかる

あいだ、而に二にの義ぎを顯あらわす時とき、同聞衆どうもんしゆを別べつに列つらぬるなり。さ

て、本門ほんもんの終おわりの「去こ」は、随縁真如ずいえんしんによにして而に二にの分ぶんな

り。よつて「去こ」の字じを置おくなり。「作礼而さらいに去こ」(礼らいを作なして

去りにき)の「去」は、随縁真如の如と約束するなり。本門
は而二の上の不二なり。「而二にして不二なり」「常に同じ
く常に別なることは、古今法爾なり」の釈、これを思うべ
し。

この「去」の字は、彼の「五千起去」の「去」と習う
なり。その故は、五千とは五住の煩惱と相伝するあいだ、
五住の煩惱が己心の仏を礼して去るといふ義なり。

「如」「去」の二字は、生死の二法なり。伝教云わく
『去』は無來の如来、無去の円去なり』等云々。「如」の字

は「一切法はこれ心なり」の義、「去」の字は「ただ心の

いっさいほう

ぎ

いっさいほう

こころ

みこれ一切法なり」の義なり。「一切法はこれ心なり」は、

しやくもん

ふへんしんによ

こころ

いっさいほう

迹門の不變真如なり。「ただ心のみこれ一切法なり」は、

ほんもん

ずいえんしんによ

ほうかい

いっしん

ちぢ

本門の隨縁真如なり。しかるあいだ、法界を一心に縮むる

によ

ほうかい

ひら

ほうかい

いっしん

さんたいさん

は、「如」の義なり。法界に開くは、「去」の義なり。三諦三

がん

くけつそうじょう

こころおな

うんぬん

觀の口決相承と意同じ云々。

いちぎ

い

によ

じつ

こ

そう

じつ

しん

一義に云わく、「如」は実なり、「去」は相なり。実は心

のう

そう

しんじゆ

しよほう

こ

じつそう

によ

王、相は心数なり。また、諸法は「去」なり、実相は「如」

こんきやういちぶ

しじゆう

しよほうじつそう

しじ

なら

なり。今經一部の始終、諸法実相の四字に習うとは、これ

なり。しゃく い 釈しゃくに云いわく「今こんきよう経きんぎようは何なにをもつて体たいとなすや。諸しよほう法ぽうなり。じつそう 釈しゃくに云いわく「今こんきよう経きんぎようは何なにをもつて体たいとなすや。諸しよほう法ぽうなり。じつそう 釈しゃくに云いわく「今こんきよう経きんぎようは何なにをもつて体たいとなすや。諸しよほう法ぽうなり。」

実相じつそうをもつて体たいとなす。

今いま一いち重じゆう立たうち入いつて日蓮にちれんが修行しゆぎように配当はいとうせば、「如によ」とは

「如説修行によせつしゆぎよう（説せつのごとく修行しゆぎようす）」の「如によ」なり。その故ゆえ

は、結要けつちよう五字ごじの付嘱ふぞくを宣のべたもう時とき、宝塔品ほうとうほんに事起ことおこり、

「声徹下方しやうてつげほう（声こえは下方げほうに徹てつす）」し「近令有在こんりやううざい（近ちかく在ある

有あらしむ）」「遠令有在おんりやううざい（遠とおく在ある有あらしむ）」と云いつて、

「有在うざい」の二に字じをもつて本化ほんげ・迹化しやつけの付嘱ふぞくを宣のぶるなり。

よつて、本門ほんもんの密序みつじよと習ならうなり。

にぶつびようぎ

ふんじん

しよぶつあつ

せこうろうやく

さて、二仏並座し分身の諸仏集まつて「是好良薬（こ

よ ろうやく

みようほうれんげきよう

と あらわ

しやくそんじつしゆ

じんりき

の好き良薬」の妙法蓮華経を説き顕し、釈尊十種の神力

げん

しく

むす

じようぎようぼさつ

ふぞく

ふぞく

を現じて四句に結び、上行菩薩に付嘱したもう。その付嘱

みようほう

しゆだい

そうべつ

ふぞく

とうちゆう

とうげ

おも

とは、妙法の首題なり。総別の付嘱、塔中・塔外これを思

ゆじゆつ

じゆりよう

ことあらわ

じんりき

ぞくるい

うべし。これによつて、涌出・寿量に事顕れ、神力・嘱累

ことお

みようほうとう

ごじ

まつほう

びやくほうおんもつ

に事竟わるなり。この妙法等の五字を、末法・白法隱没の

とき

じようぎようぼさつごしゆつせ

ごしゆ

しゆぎよう

なか

ししゆ

時、上行菩薩御出世あつて、五種の修行の中には、四種

りやく

じゆじ

いちぎよう

じようぶつ

きようもん

を略してただ受持の一行にして成仏すべしと、経文に

まのあた

あ

じんりきほん

い

おがめつどご

親りこれ在り。それとは、神力品に云わく「於我滅度後

おうじゆじ しきよう

ぜにんおぶつどう

けつじようむうぎ

われめつど

のち

応受持斯經

是人於仏道

決定無有疑

(我滅度して後に

まさ

きよう

じゆじ

ひと

ぶつどう

において、まさ 応にこの經を受持すべし。この人は仏道において、

けつじよう

うたが

うんぬん

もんめいはく

決定して疑いあることなけん) 云々。この文明白なり。

もん

ほとけ

えこう

もん

なら

よつて、この文をば、もん 仏の回向の文と習うなり。

きよう

じゆじ

たてまつ

しんじ

によせつ

さるあいだ、この經を受持し奉る心地は、「如説

しゆぎよう

によ

によ

しんじ

みようほうとう

ごじ

修行」の「如」なり。この「如」の心地に妙法等の五字を

じゆじ

たてまつ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

受持し奉り、南無妙法蓮華經と唱え奉れば、たちまち

むみよう

ぼんのう

やまい

さ

みようかく

ごつか

はだえ

無明・煩惱の病をことごとく去つて、妙覚・極果の膚を

みが

あらわ

ゆえ

こ

じ

お

むす

瑩くことを顕すが故に、さて「去」の字を終わりに結ぶな

り。よつて、かみ上に「受持仏語じゆじぶつご（仏語を受持す）」と説けり。と

ぼんのう 煩悩・悪覚の魔王も「諸法実相しよほうじつそう」の光に照らされて、「一心いっしん

いちねんほうかい 一念法界に遍し」と観達せらる。しかるあいだ、還つて己かえ

あまね 心しんの仏を礼するが故に、「作礼而去さらいにこ」とは説きたもうなり。と

「彼々三千、互いに遍することまたしかり」の釈、これをしやく

おも 思ふべし。秘すべし、秘すべし。唯授一人の相承なり。口外こうがい

すべからず。しかれば、この「去」の字は、「不去而去ふこにこ（去ら

ずして去る）」の「去」と相伝するをもつて至極となすなりしごく

云々。うんぬん

云々。

むりようぎきようろつか だいじ

無量義經六箇の大事

だいいち

むりようぎきようとくぎようほんだいいち

こと

第一 「無量義經徳行品第一」の事

おんぎくでん

い

むりようぎ

さんじ

ほん

しゃく

かんじん

御義口伝に云わく、「無量義」の三字を、本・迹・観心

はい

こと

はじ

む

じ

しゃくもん

ゆえ

りえん

に配する事。初めの「無」の字は迹門なり。その故は、理円

おもて

ふへんしんによ

むね

だん

しゃくもん

むじよう

ししようぞく

を面とし、不変真如の旨を談ず。迹門は無常の摂属なり。

じようじゆう

だん

ぜほうじゆうほうい

せけんそうじようじゆう

常住を談ぜず。ただし、「是法住法位 世間相常住」(こ

ほう

ほうい

じゆう

せけん

そう

じようじゆう

あ

の法は法位に住して、世間の相は常住なり」と明かせ

り じようじゆう

じ じようじゆう

ども、これは理の常住にして、事の常住にあらず。理の

り じようじゆう

じ じようじゆう

り

じようじゆう そう だん
常住の相を談ずるなり。空は無の義なり。ただし、この無
だん む む
は断無の無にあらず。相即の上の空なるところを、無と云い、
そうそく かみ くう
くう い えん かみ
空と云うなり。円の上にてこれを沙汰するなり。本門の事の
じようじゆう む さ さんじん たい
常住、無作の三身に対して、迹門を無常と云うなり。守護
しよう う い ほうぶつ むちゆう ごんか む さ さんじん かくぜん
章には「有為の報仏は夢中の権果、無作の三身は覚前の
じつぶつ うんぬん いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな
実仏なり」云々。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え
たてまつ もの む さ さんじん かくぜん じつぶつ うんぬん
奉る者は、無作の三身、覚前の実仏なり云々。

第二 「量」の字の事
だいに りよう じ こと

おんぎくでん い
御義口伝に云わく、「量」の字を本門に配当すること
りよう じ ほんもん はいとう

は、「量」とは懸り撰むる義なり。本門の心は無作の三身

だん

むさ

さんじん

ほとけ

うえ

を談ず。この無作の三身とは、仏の上ばかりにしてこれを

い

しんらばんぼう

じじゆゆうしん

じたいけんしょう

だん

ゆえ

云わず。森羅方法を自受用身の自体顕照と談ずるが故に、

しやくもん

ふへんしんによ

りえん

あ

あらた

迹門にして不変真如の理円を明かすところを改めずして、

おの

とうたい

むさ

さんじん

さた

ほんもん

じえん

さんぜん

己が当体、無作の三身と沙汰するが、本門の事円の三千の

こころ

意なり。

すなわ

おうばいとური

ここ

とうたい

あらた

むさ

これ即ち桜梅桃李の己々の当体を改めずして無作の

さんじん

かいけん

すなわ

りょう

ぎ

いま

にちれんとう

三身と開見すれば、これ即ち「量」の義なり。今、日蓮等

たぐ

なんみょうほうれんげきよう

とな

たてまつ

もの

むさ

さんじん

ほん

の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、無作の三身の本

しゆ うんぬん
主なり云々。

だいさん ぎ じ こと

第三 「義」の字の事

おんぎくでん い

御義口伝に云わく、「義」とは、観心なり。その故は、

かんじん ぎ ちえ

もん きようそう ぎ かんじん

文は教相、義は観心なり。所説の文字を心地に沙汰するを、

しよせつ もんじ しんじ さた

「義」と云うなり。なかんずく、「無量義」は、一法より無量

の義を出生すと談ず。能生は「義」、所生は「無量」な

ぎ しゆつしよう だん のうしよう ぎ しょしよう むりよう

り。これは無量義経の能生・所生なり。法華経と無量義経

とを相對する能・所にあらざるなり。「無相不相、名為実相

（相無く相ならざるを、名づけて実相となす）」の理より

あいな あい な じつそう

（相無く相ならざるを、名づけて実相となす）」の理より

ばんぼう かいしゆつ い みなもと じつそう ゆえ かんじん い
万法を開出すと云う。源が実相なるが故に、観心と云う
なり。

むりようぎ さんじ しゃくもん ほんもん かんじん
かくのごとく「無量義」の三字を、迹門・本門・観心に
はいとう ほっけ みようほう とう だい いま むりようぎ
配当することは、法華の「妙法」等の題と今の「無量義」
だい いったいふに じよ しよう そうじよう こころ そうでん
の題と一体不二の序・正なりと、相承の心を相伝せんが
ためなり。

だいし しよ いちじ こと
第四 「処」の一字の事

おんぎくでん い しょ いちじ ほけきよう さんぞうきよう
御義口伝に云わく、「処」の一字は、法華経なり。三蔵教
つうぎよう む じ おさ べつきよう りよう じ おさ
と通教とは「無」の字に摂め、別教は「量」の字に摂め、

えんぎよう

ぎじおさ

にぜんしきようしゆしよう

円教は「義」の字に撰むるなり。この爾前の四教を所生と

定め、さて序分のこの経を能生と定めたり。能生をしば

らく「処」と云い、所生を「無量義」と定めたり。よつて、

ごんぎよう あいたい むりようぎしよ さた うんぬん

権教に相對して「無量義処」を沙汰するなり云々。

だいご むりようぎしよ こと

第五 「無量義処」の事

おんぎくでん い ほけきようはつかん しよ むりようぎきよう

御義口伝に云わく、法華経八卷は「処」なり、無量義経

は「無量義」なり。無量義は三諦・三觀・三身・三乘・三業

なり。法華経に「於一仏乘分別説三（一仏乘において分別

して三を説きたもう）」と説いて、法華のための序分と成る

さん と さん と

は「無量義」なり。無量義は三諦・三觀・三身・三乘・三業

なり。法華経に「於一仏乘分別説三（一仏乘において分別

して三を説きたもう）」と説いて、法華のための序分と成る

さん と さん と

なり。ここをもつて隔別の三諦は無得道、円融の三諦は

とくどう

さだ

ゆえ

しじゅうよねん

みけんしんじつ

しじゅうよねん

得道と定むるが故に、「四十余年、未顕真実（四十余年には

しんじつ

あらわ

は

うんぬん

いまだ真実を顕さず」と破したまえり云々。

だいろく

むりようぎしよ

こと

第六 「無量義処」の事

おんぎくでん

い

むりようぎしよ

いちねんさんぜん

御義口伝に云わく、「無量義処」とは、一念三千なり。

じっかいのおのおの

むりよう

ことわりい

とうたい

じっそう

いちり

十界各々、無量に義処たり。この当体そのまま実相の一理

ほか

な

しよほうじっそう

と

より外はこれ無きを、「諸法実相」と説かれたり。そのため

じよ

ゆえ

いちねんさんぜん

じよ

むりようぎしよ

い

の序なるが故に、一念三千の序として「無量義処」と云う

しよ

いちねん

むりようぎ

さんぜん

われ

しゅじよう

ちようせき

なり。「処」は一念、「無量義」は三千なり。我ら衆生、朝夕

は ごんご えしようにほうとも むりよう ことわ

吐くところの言語も、依正二法共に無量に義りたり。これ

みようほうれんげきよう い

を妙法蓮華経とは云うなり。しかるあいだ、法華のための

じよぶん かいきよう うんぬん

序分、開経なり云々。

ふげんぎようご か だいじ

普賢経五箇の大事

だいいち ふげんぎよう こと

第一 「普賢経」の事

だいごう い ぶつせつかんふげんぼさつぎようほうぎよう うんぬん

題号に云わく、「仏説観普賢菩薩行法経」云々。

おんぎくでん い ほけきよう じっかいぐ さんぜんぐそく

御義口伝に云わく、この法華経は十界互具・三千具足の

ほったい さんぜん じっかい ふげん ほうかい

法体なれば、三千・十界ことごとく「普賢」なり。法界一法

も ぎ な ゆえ ふげん

として漏るる義これ無し。故に「普賢」なり。

みょうほう じっかい れんげ じっかい

えしやう にほう

妙法の十界、蓮華の十界なれば、依正の二法ことごと

ほけきやう

けつ おさ

きやう

ふげんきやう

く法華経なりと結し納めたる経なれば、この「普賢経」を

けつきやう

結経とは云うなり。

じっかい

みょうほうれんげきやう

けつ

あ

うんぬん

しかれば、十界を妙法蓮華経と結し合わせたり云々。

だいに

ふだんぼんのう

ふり

ごよく

ぼんのう

だん

ごよく

はな

第二 「不断煩惱、不離五欲（煩惱を断ぜず、五欲を離れず）」

こと

の事

おんぎくでん

い

もん

ぼんのうそくぼだい

しやうじそくねはん

御義口伝に云わく、この文は煩惱即菩提・生死即涅槃を

と

説かれたり。

ほつけ

ぎやうじや

とんよく

とんよく

しんに

しんに

法華の行者は、貪欲は貪欲のまま、瞋恚は瞋恚のまま、

ぐち ぐち ぶんげんぼさつ ぎょうほう こころ
愚癡は愚癡のまま、普賢菩薩の行法なりと心得べきなり

うんぬん
云々。

だいさん ろくねん こと ねんぶつ ねんぼう ねんそう ねんかい ねんせ ねんてん
第三 六念の事 「念仏」「念法」「念僧」「念戒」「念施」「念天」

おんぎくでん い ねんぶつ ほとけ ねん
御義口伝に云わく、「念仏（仏を念ず）」とは、「唯我一人」

どうし ねんぼう ほう ねん めつご だいもく ごじ
の導師なり。「念法（法を念ず）」とは、滅後は題目の五字な

ねんそう そう ねん まっぼう ほんぷそう ねんかい
り。「念僧（僧を念ず）」とは、末法にては凡夫僧なり。「念戒

かい ねん ぜみようじかい かい たも な
（戒を念ず）」とは、「是名持戒（これを戒を持つと名づく）」

ねんせ せ ねん いっさいしゆじよう だいもく じゆよ
なり。「念施（施を念ず）」とは、一切衆生に題目を授与す

ねんてん てん ねん しょてんちゆうや じよういほうこ
るなり。「念天（天を念ず）」とは、「諸天昼夜、常為法故、

にえごし しよてん ちゆうや つね ほう ゆえ

而衛護之（諸天は昼夜に、常に法のための故に、しかもこ

えご こころ まつぼうとうこん ぎようじゃ かみ

れを衛護す）の意なり。末法当今の行者の上なり。これ

おも うんぬん

を思うべきなり云々。

だいし いっさいごうしようかい かいじゆうもうぞうしよう にやくよくさんげしや たんざし

第四 「一切業障海 皆徒妄想生 若欲懺悔者 端坐思

じつそう しゆざいによそうろ えにちのうしようじよ いっさい ごうしようかい みなもうそう

実相 衆罪如霜露 慧日能消除（一切の業障海は、皆妄想

しやう ざんげ ほつ たんざ じつそう おも

より生ず。もし懺悔せんと欲せば、端坐して実相を思え。

しゆざい そうろ えにち よ しやうじよ こと

衆罪は霜露のごとく、慧日は能く消除す」の事

おんぎくでん い しゆざい ろつこん ごうしやうふ

御義口伝に云わく、「衆罪」とは、六根において業障降

くだ そうろ えにち

り下ることは霜露のごとし。しかりといえども、「慧日」を

もつて能く消除すと云えり。よ しょうじよ「慧日」えにちとは、末法当今、日蓮まつぼうとうこん にちれん

の弘むるところの南無妙法蓮華経なり。ひろ なんみようほうれんげきよう「慧日」えにちとは、仏にほとけ

約し、法に約するなり。やく ほう やく釈尊をば慧日大聖尊と申すなり。しゃくそん えにちだいしようそん もう

法華経を「又如日天子能除諸闇ほけきよう うによいってんしのうじよしよあん にってんし よ もろもろ やみ

を除くがごとし」と説かれたり。のぞ と末法の導師を「如日月まつぼう どうし によにちがつ

光明こうみよう にちがつ こうみよう（日月の光明のごとし）」等と説かれたり。とう と

第五「正法治国、不邪枉人民だいがい しょうほうじこく ふじゃおうにんみん しょうほう くに おさ にんみん

を邪枉せず」の事じゃおう こと

御義口伝に云わく、おんぎくでん い まつぼう しょうほう なんみようほうれんげきよう末法の正法とは南無妙法蓮華経な

り。この五字は一切衆生をたばらかさぬ秘法なり。

しょうほう てんかいちどう しんこう

正法を天下一同に信仰せば、この国安穩ならん。され

げんぎ い ほう すなわ てんかたいへい

ば、玄義に云わく「もしこの法によらば、則ち天下泰平な

ほう ほけきよう しんこう

らん」。「この法」とは、法華経なり。法華経を信仰せば、天下

あんぜん うたが うんぬん

安全たらんこと疑いあるべからざるなり云々。

いじよう にひやくさんじゆういちかじよう だいじ

已上、二百三十一箇条の大事

にじゆうはつぽん いちもん

二十八品に一文ずつの大事

だいじ

あ

合わせて二十八箇条の大事、

にじゆうはつかじよう

だいじ

秘ひすべし云々
うんぬん

じよほん

序品

じっかい

十界なり

しかく

始覚

於無漏実相

心已得通達

むろじつそう

お

こころ

すで

つうだつ

え

(無漏実相ニ於イテ 心ニ已ニ通達スルコトヲ得タリ)

みようほう

ふへん

ずいえん

妙法

不変

随縁

もん

わ

こころもと

かく

はじ

さと

じようぶつ

この文は、我が心本より覚なりと始めて覚るを、成仏と

い
云うなり。いわゆる、
南無妙法蓮華經と始めて覚る題目な
り。

ほうべんぼん
方便品

しんたい
真諦

ぞくたい
俗諦

是法住法位 世間相常住

こ ほうい ほうじゆう せけん そうじょうじゆう
(是ノ法位ニ法住シテ 世間ノ相常住ナリ)

しやくもん
迹門

ほんもん
本門

もん
この文は、
しゅじょう ところ ほんらいほとけ と じょうじゆう
衆生の心は本来仏なりと説くを常住と云

うなり。ばんぼう 万法は元より覚もとの体かくなり。たい

譬喩品 ひゆほん

受持じゆじの人 ひと 大白牛車 だいびやくごしや 凡夫即極 ぼんぶそくごく

乘此宝乘 直至道場

こ (此ノ宝乘ニ乗ジテ ほうじよう 直チニ道場ニ至ル) じよう ただ どうじよう いた

題目 だいもく 極果の処なり ごくか ところ

この文は、自身もんの仏乘じしんを悟つて自身ぶつじようの宮殿さとに入るなり。じしん きゆうでん い

いわゆる、南無妙法蓮華經と唱え奉るは、自身なんみようほうれんげきようの宮殿となに入るなり。たてまつ じしん きゆうでん い

るなり。

しんげほん
信解品

いちねんさんぜん
一念三千

無上宝珠 不求自得

むじょう ほうしゆ もと ぎ
（無上ノ宝珠 求メ不ルニ自ズカラ得タリ）
おの え

だいもく
題目

もん
この文は、
むし しきしん もと
「無始の色心は、
もと
本よりこれ理性にして、
りしやう

みやうきやう みやうち
妙境・妙智
なれば、
こしん ほか じつそう もと
己心より外に実相を求むべからず。

い^{なんみ}わゆる、南無妙法蓮華経は「不^ふ求自得^{ぐじとく}（求^{もと}めざるに自^{おの}ずから得^えたり）」なり。

やくそうゆほん
薬草喻品

さんぜ だいもく いっさいしゆじよう
三世 題目 一切衆生

又諸仏子 専心仏道 常行慈悲 自知作仏

またもろもろ ぶっし ところ ぶつどう もっぱ つね じひ ぎよう
(又諸ノ仏子 心ヲ仏道ニ専ラニシ 常ニ慈悲ヲ行

みずか さぶつ し
ジ 自ラ作仏スト知ル)

この文は、^{もん} 当^{とうらい}来の成^{じようぶつ}仏^{けんねん}顕然なり。いわゆる

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華経なり。

じゆきほん

授記品

じつかいじつそう

ほとけ

さんぜじようじゆう

ほんのうそくぼだい

しやうじそくねはん

十界実相の仏

三世常住

煩惱即菩提

生死即涅槃

於諸仏所

常修梵行

於無量劫

奉持仏法

しよぶつ

みもと

お

つね

ぼんぎよう

しゆ

むりようこう

お

(諸仏ノ所ニ於イテ

常ニ梵行ヲ修シ

無量劫ニ於イテ

ほとけ

ほう

たも

たてまつ

仏ト法トヲ持チ奉ル)

いっさい

ごうしやう

一切の業障

もん

じよう

い

むりようこう

い

すなわ

ほんぬしよぐ

この文に、「常」と云い、「無量劫」と云う。

即ち本有所具

みようほう

の妙法なり。

いわゆる南無妙法蓮華経なり。

なんみようほうれんげきよう

けじようゆほん

化城喩品

さんぜんじんてん

三千塵点

観彼久遠 猶如今日

か くおん み

なお こんにち ごと

(彼ノ久遠ヲ観ルニ 猶シ今日ノ如シ)

ざいせ

在世

もん

がんじよ

いちねんいつぽうかい

ほか

ろくどうししよ

この文は、元初の一念一法界より外に、さらに六道四聖と

あ

て有るべからざるなり。

いわゆる、

南無妙法蓮華経は三世

なんみやうほうれんげきよ

さんぜ

いちねん

こんにち

まつぽう

さ

こんにち

い

一念なり。「今日」とは、末法を指して「今日」と云うなり。

ごひやくほん

五百品

にほんこく いっさいしゆじょう

だいもく

ごほんぞん

しんぽう

しきほう

ほんのうそく

日本国の一切衆生

題目・御本尊

心法

色法

煩惱即

ぼだい しょうじそくねはん

菩提・生死即涅槃

貧人見此珠 其心大歡喜

びん

ひと

こ

たま

み

そ

こころ

おお

かんぎ

(貧ナル人

此ノ珠ヲ見テ

其ノ心

大イニ歡喜ス)

しんじん

信心ノカタチ

もん

はじ

わ

こころほんらい

ほとけ

し

すなわ

この文は、始めて我が心本来の仏なりと知るを、即ち

だいかんぎ

な

なんみやうほうれんげきやう

かんぎ

なか

「大歡喜」と名づく。いわゆる、南無妙法蓮華経は歡喜の中

だいかんき
の大歡喜なり。

にんきほん

人記品

いちぶ

一部

だいもく

題目

安住於仏道 以求無上道

おぶつどう

あんじゆう

もつ

むじよう

どう

もと

(於仏道ニ安住シテ 以テ無上ノ道ヲ求ム)

こう

りやく

よう

広・略 要

もん

ほんらいそうそく

さんじん

みょうり

はじ

かくち

この文は、本来相即の三身の妙理を初めて覚知するを、

ぐむじようどう

むじようどう

もと

い

「求無上道 (無上道を求む)」とは云うなり。いわゆる

なんみょうほうれんげきよう

南無妙法蓮華経なり。

ほっしほん

法師品

じゃつこう

寂光

当知如是人 自在所欲生

し まさ か ごと ひと

しよう

ほっ

ところ

じざい

(知ル当ニ是クノ如キ人ハ

生ゼント欲スル

所ニ自在ナ

リ)

この文は、我らが一念の妄心の外に仏心無し。九界の生死

もん

われ

いちねん

もうしん

ほか

ぶっしん

くかい

しょうじ

しんによ

すなわ

じざい

なんみょうほうれんげきよう

が真如なれば、即ち「自在」なり。いわゆる、南無妙法蓮華經

とな

たてまつ

すなわ

じざい

と唱え奉るは、即ち「自在」なり。

ほうとうほん

宝塔品

じゆじ

受持なり

則為疾得 無上仏道

すなわ

こ

と

むじよう

ぶつどう

え

(則ち為レ疾ク 無上ノ仏道ヲ得ツト)

ぼんぷそくごく

凡夫即極なり

もん

じ

すなわ

えんとん

みようかい

この文は、「持」とは即ち円頓の妙戒なれば、「等・妙

とう

みよう

の二覚にかく いちねんは一念かいごの開悟しつとく「なれば、疾得と う（疾く得）」と云いうな
り。いわゆる、南無妙法蓮華経なんみょうほうれんげきようと唱となえ奉たてまつるは、「疾得しつとく」な
り。

提婆品だいばほん

忽然之間 変成男子

こつねんのあいだ 忽然之間二 へん 変ジテ男子ト成ルなんし な

この文の心もんは、三惑こころの全体さんわくは三諦ぜんたいと悟さんたいるを、さと「変へん」と説とく

なり。いわゆる、南無妙法蓮華經と唱え奉るは、三惑即三徳なり。とく

かんじほん
勸持品

しきぼう しんぼう
色法・心法

我不愛身命 但惜無上道

われしんみよう あい ず
（我身命ヲ愛セ不シテ 但無上ノ道ヲ惜シム）
ただむじよう どう お

もん しきしん げんけ
この文は、色心は幻化にして、四大・五陰は元より悪習
しだい ごおん もと あくしゆう

なり。しかるに、ほんがくしんによ 本覚真如は常住なり。じょうじゅう いわゆる
なんみょうほうれんげきょう 南無妙法蓮華経なり。

あんらくぎようほん
安樂行品

一切諸法 空無所有 無有常住 亦無起滅
いっさい しよほう くう しよあ な じょうじゅうあ
(一切ノ諸法ハ 空ニシテ所有ル無シ 常住有ルコト無
またきめつ な
シ 亦起滅スルコト無シ)

この文は、元より常住の妙法なる故に、六道の生滅は
本来不生と談ず。故に「無起滅（起滅することなし）」なり。
いわゆる、南無妙法蓮華経は、本来無起滅なり云々。

涌出品

昼夜常精進 為求仏道故

（昼夜二常二精進ス 仏道ヲ求メンガ為ノ故ナリ）

この文は、一念に億劫の辛勞を尽くせば、本来無作の三身
念々に起こるなり。いわゆる南無妙法蓮華経は精進行なり。

寿量品

如来如実知見三界之相 無有生死

(如来ハ実ノ如ク三界之相ヲ知見シタモウ 生死有ルコト

無シ)

この文は、万法を無作の三身と見るを、「如実知見（実の
ごごとく知見したもう）」と云う。無作の覚体なれば、何によ
つて生死有りと云わんか。

ふんべつくだくほん
分別功德品

持此一心福 願求無上道
（此ノ一心ノ福ヲ持つて 無上ノ道ヲ願イ求メタル）

この文は、一切の万行万善は、ただ一心本覚の三身を顕もん いたつさい まんぎようまんぜん いっしんほんがく さんじん あらわ
さんがためなり。善悪一如なれば、「一心福（一心の福）」ぜんあくいちちによ いっしんふく いっしん ふく
とは云うなり。いわゆる、南無妙法蓮華経は「一心福」ななんみようほうれんげきよう いっしんふく
り。

随喜功德品ずいきくどくほん

言此経深妙 千万劫難遇

（言いワク此こノ経きようハ深妙じんみようニシテ 千万劫せんまんごうニモ遇あイタテマツ

ルコト難シかた）

この文は、一切即妙法なれば、一心の源底を顕すこと甚

みようむ げ

妙無外なり。いわゆる、南無妙法蓮華経は不思議なり。

なんみようほうれんげきよう ふしぎ

法師功德品

静散

入禅出禅者 聞香悉能知

(禅ニ入り禅ヲ出ズル者ヲバ 香ヲ聞イデ 悉ク能ク知ル)

不変 死 随縁 生 十界

この文は、一心静なる時は「入禅(禅に入る)」、一心散乱

する時は「出禅しゅつぜん（禅を出いず）」、静散じょうさん即ち本覚ほんがくと知るを、
「悉ことごとく知る」とは云いうなり。いわゆる、南無妙法蓮華経は
「入禅にゆうぜん」「出禅しゅつぜん」なり云々。
うんぬん

ふきようほん
不軽品

応当一心 広説此経 世々値仏 疾成仏道

いっしん

ひろ

こ

きよう

と

まさ

せぜ

あ

（一心ニ 広ク此ノ経ヲ説ク応当ニ 世々仏ニ値アイタ

と

ふつごう

じよう

テマツリ 疾ク仏道ヲ成ズ

この文は、法界、皆、本来三諦一心に具わることを顕せ
ば、己心の念々に仏に値うことを、即ち「世々値仏（世々
に仏に値いたてまつる）」と云うなり。いわゆる
南無妙法蓮華経これなり。

神力品

元品の無明を断破す

是人於仏道 決定無有疑

こ ひとぶつどう

お

けつじょううたが

あな

(是ノ人仏道ニ於イテ 決定疑イルコト有無ケン)

じゅうによぜ

十如是

もん

じっかいおのおの

ほんぬ

ほんがく

じゅうによぜ

じごく

この文は、十界各々、本有・本覚の十如是なれば、地獄も

ぶっかい

いちによ

じょうぶつけつじょう

仏界も一如なれば、成仏決定するなり。いわゆる、

なんみょうほうれんげきょう

じゅじ

うんぬん

南無妙法蓮華経の受持なり云々。

ぞくるいほん

嘱累品

信如来智慧者 当演说此法华经

（如来ノ智慧ヲ信ズル者ニハ 此ノ法华经ヲ演说ス当ニ）

この文は、釈迦如来の悟りのごとく、一切衆生の悟りと
不同有ることなし。故に、如来の智慧を信ずるは即ち妙法
なり。

いわゆる、南無妙法蓮華经の智慧なり云々。

やくおうほん
薬王品

是真精進 是名真法供養如来

こ しん しょうじん

(是レ真ノ精進ナリ

こ しんぽう

是レヲ真法モテ如来ヲ供養シタテ

によらい くよう

マツルト名なブク)

もん

しきこうちゆうどう

かんねんおこた

この文は、色香中道の観念懈ることなし。これを即ち

すなわ

しんぽうくようによらい

しんぽう

によらい

くよう

「真法供養如来 (真法もて如来を供養したてまつる)」と名

な

づくるなり。

なんみょうほうれんげきよう

ゆいういちじよう

いちじよう

いわゆる、南無妙法蓮華経は「唯有一乗 (ただ一乗の

み有りあ」の故ゆえに、「真法しんぽう」なり。世間せけんも出世しゅつせも純じゆん一実相いちじつそうなり云々うんぬん。

妙音品みょうおんぼん

久遠くおん 寂光土じやつこうど

身不動搖 而入三昧

(身動搖みどうようセ不ずシテ 而しかるにさんまい三昧いニ入ル)

この文もんは、即ち久遠くおんを悟さとるを、「身不動搖しんふどうよう(身動搖みどうようせず)」と云いうなり。惑障わくしょうを尽つくくさずして寂光じやつこうに入るいるを「三昧さんまい」

とは云いうなり。

なんみやうほうれんげきやう

さんまい

うんぬん

いわゆる、南無妙法蓮華經の「三昧」なり云々。

ふもんぼん

普門品

ふくち

福智

慈眼視衆生 福聚海無量

じげん

しゅじやう

み

ふくじゆ

うみむりやう

(慈眼モテ衆生ヲ視タモウ 福聚ノ海無量ナリ)

もん

ほうかい

えしやう

みやうほう

ゆえ

びやうどういつし

じひ

この文は、法界の依正は妙法なる故に、平等一子の慈悲

なり。
依正・福智共に「無量」なり。

えしやう

ふくちとも

むりやう

なんみやうほうれんげきやう

ふくち

にほう

うんぬん

いわゆる、南無妙法蓮華経は福智の二法なり云々。

陀羅尼品

だらにほん

未来に顕る

みらい

あらわ

修行是経者 令得安穩

こ

きやう

しゆぎやう

ひと

あんのん

え

し

(是ノ経ヲ修行スル者ハ 安穩ナルコトヲ得セ令メン)

現在に顕る

げんざい

あらわ

この文は、五種の妙行を修すれば、悟りの道に入って嶮

もん

ごしゆ

みやうぎやう

しゆ

さと

どう

い

けん

路ろに入いらざるなり。これ「安穩あんのん」といいうことなり。

いいわゆる、南無妙法蓮華經は即すなわち「安穩あんのん」なり云々。
なんみやうほうれんげきやう

巖王品ごんのうほん

宿福深厚 生値う仏法

（宿むかしノ福深厚ニシテ 生うマレテぶつぽう仏法ニ値あエリ）

この文もんは、一い句も妙法みやうほうに結縁けちえんすれば、億劫おくごうにも失うせずし

て大乗だいじようの無価むげの宝珠ほうしゆを研みがき顕あらわすを、
「生値しようちぶつぽう仏法う（生まれ

仏法ぶつぽうに値あえり）」と云いうなり。

いなんみわゆる、南無妙法蓮華經なんみようほうれんげきようの「仏法ぶつぽう」なり。

勸発品かんぼつぽん

是人命終こ 為千仏授手ひと みようじゆう 令不恐怖せんぶつみて 不墮惡趣う

（是ノ人ハ命終シテ 千仏手ヲ授ケテ 恐怖セ不くふ 惡趣あくしゆ

二墮おチ不ぎラ令しメタモウコトヲ為う）

もん

みようほう

さと

ぶんだん

みすなわ

じょうじゃつこう

あらわ

この文は、妙法を悟れば分段の身即ち常寂光と顕る

みようじゆう

い

せんぶつ

せんによ

みて

るを、「命終」と云うなり。「千仏」とは千如、「御手」と

せんによぐそく

ゆえ

ふだあくしゆ

あくしゆ

お

は千如具足なり。故に「不墮悪趣（悪趣に墮ちず）」なり。

なんみようほうれんげきよう

みて

いわゆる、南無妙法蓮華経の「御手」なり。

いじよう

ほんぼん

べつでんお

已上、品々の別伝畢わんぬ。

いち

にじゆうはつぼん

なんみようほうれんげきよう

こと

一、二十八品ことごとく南無妙法蓮華経の事

疏しよの十じゆうに云いわく「総そうじて一経いつきようを結けつするに、ただ四よつつ

あるのみ。その枢柄すうへいを撮とつてこれを授与じゆよす」。

御義口伝おんぎくでんに云いわく、「一経いつきよう」とは、本迹ほんじゃく二十八品はつぽんなり。

「ただ四よつつ」とは、名みよう・用ゆう・体たい・宗しゆうの四よつつなり。「枢柄すうへい」

とは、ただ題目だいもくの五字ごじなり。「授与じゆよす」とは、上行じようぎよう菩薩ぼさつに

授与じゆよするなり。「これ」とは、妙法蓮華經みようほうれんげきようなり云々。この釈しゃく、

分明ふんみようなり。

今いま、日蓮等にちれんとうの弘通ぐつうの南無妙法蓮華經なんみようほうれんげきようは、体たいなり、心こころな

にじゅうはつぽん

ゆう

にじゅうはつぽん

じよぎよう

だいもく

しよぎよう

り。二十八品は用なり。二十八品は助行なり、題目は正行

しよぎよう

じよぎよう

おわ

うんぬん

なり。正行に助行を撰むべきなり云々。

いち

むりようぎきよう

こと

一、無量義経の事

おんぎくでん

い

みようほう

じよぶん

むりようぎきよう

御義口伝に云わく、妙法の序分は無量義経なれば、

じっかい

みようほうれんげきよう

じよぶん

十界ことごとく妙法蓮華経の序分なり。

いち

じよほん

一、序品

おんぎくでん

い

によぜがもん

われき

御義口伝に云わく、「如是我聞（かくのごときを我聞き

しじ

よよ

こころう

いつきよう

むりよう

ぎ

し

き）」の四字を能く能く心得れば、一経の無量の義は知ら

やす

じっかいご

さんぜんぐそく

みよう

き

しよもん

れ易きなり。十界互具・三千具足の妙と聞くなり。この所聞

みょうほうれんげ き ゆえ みょうほう ほうかい ごぐ さんぜん
は妙法蓮華と聞く故に、妙法の法界は互具にして三千
しようじよう しじ いっきよう しじゆう わた

清浄なり。この四字をもつて一經の始終に亘るなり。

にじゆうはつぽん もんもんくく ぎり わ み かみ ほうもん き
二十八品の文々句々の義理、我が身の上の法門と聞くを、

によぜがもん い
「如是我聞」とは云うなり。その聞き物は南無妙法蓮華經な

り。

されば、「皆成仏道（皆仏道を成ず）」と云うなり。
かいじようぶつどう みなぶつどう じよう い

この「皆成」の二字は、十界三千に亘るべきなり。妙法の
かいじよう ゆえ じっかいさんぜん わた みょうほう

皆成なるが故なり。

また「仏」とは、我が一心なり。これまた十界三千の心々
ぶつ わ いっしん じっかいさんぜん しんしん

どう

のうつう

な

ゆえ

じっかい

しんしん

つう

なり。「道」とは、能通に名づくるが故に、十界の心々に通

とき

かいじょうぶつどう

あらわ

かいじょうぶつどう

ずるなり。この時、「皆成仏道」と顕るるなり。「皆成仏道」

ほう

なんみようほうれんげきよう

の法は、南無妙法蓮華経なり。

いち

ほうべんぼん

一、方便品

おんぎくでん

い

ほん

じゅうによぜ

と

御義口伝に云わく、この品には十如是を説く。この

じゅうによぜ

じっかい

ほうべん

じっかいさんぜん

すで

十如是とは十界なり。この「方便」とは十界三千なり。既に

みようほうれんげきよう

いただ

ゆえ

じっぼうぶつどちゆう

ゆいういちじようほう

「妙法蓮華経」を頂くが故に、「十方仏土中 唯一乘法

じっぼう

ぶつど

なか

いちじよう

ほう

あ

（十方の仏土の中には、ただ一乗の法のみ有り）なり。

みようほう

ほうべん

れんげ

ほうべん

ひみよう

しようじよう

妙法の方便、蓮華の方便なれば、秘妙なり、清浄なり。

みようほう ごじ くしき ほうべん はつしきいげ くしき さと

妙法の五字は九識、方便は八識已下なり。九識は悟りなり、

はつしきいげ まよ みようほうれんげきようほうべんぼん だい

八識已下は迷いなり。「妙法蓮華経方便品」と題したれば、

めいごふに しんらさんぜん しよほう みようほうれんげきようほうべん

迷悟不二なり。森羅三千の諸法、この妙法蓮華経方便にあ

らずということなきなり。

ほん ぎるいどう さんぜん るい

「品」は「義類同」なり。「義」とは三千なり、「類」

ごぐ いちねん いちねんさんぜん さ

とは互具なり、「同」とは一念なり。この一念三千を指して

ほん い いちねんさんぜん さんぶつがつてん

「品」と云うなり。この一念三千を三仏合点したまえり。

ほんほん だい なんみようほうれんげきよう しん いちねん さんぜん

よつて、品々に題せり。南無妙法蓮華経の信の一念より三千

ぐそく き うんぬん

具足と聞こえたり云々。

いち ひゆほん

一、譬喩品

おんぎくでん い

ほん だいびやくごしや

むみょうちわく

御義口伝に云わく、この品の大白牛車とは、「無明癡惑、

もと

ほつしよう

みようあんいつたい

ぎ

すなわ

さんぜん

本よりこれ法性なり」の明闇一体の義なり。即ち三千

ぐそく

いちじよう

くるま

みようあんいつたい

さんぜん

具足の一乗をかかげたる車なれば、明闇一体にして三千

ぐそく

ぎ

あらわ

ほうかい

へんまん

いつぼう

具足の義を顕すなり。法界に遍満したれども一法なるを、

いちじよう

い

いちじよう

しよじようぐそく

いちじよう

一乗と云うなり。この一乗とは諸乗具足の一乗なり。

しよほうぐそく

いつぼう

ゆえ

ひと

びやくご

びやくご

ひと

諸法具足の一法なり。故に一つの白牛なり。また白牛は一つ

むりよう

びやくご

いつさいしゆじよう

たい

だいびやくごしや

なりといえども、無量の白牛なり。一切衆生の体、大白牛車

ゆえ

みようほう

だいびやくごしや

みようほう

じっかい

なるが故なり。しかれば、妙法の大白牛車に妙法の十界

さんぜん しゅじょうじょう

三千の衆生乗じたり。

れんげ だいびやくごしや

蓮華の大白牛車なれば、十界三千の衆生も蓮華にして

じっかいさんぜん

しゅじょう

れんげ

しょうじょう

なんみょうほうれんげきょう

ほったい

清浄なり。南無妙法蓮華經の法体、かくのごとし。

いち しんげほん

一、信解品

おんぎくでん

い

しんげ

ちゅうこん

しだいしやうもん

御義口伝に云わく、この「信解」は、中根の四大声聞

りょうげ かぎ

みょうほう

しんげ

ゆえ

じっかいさんぜん

の領解に限るにあらず。妙法の信解なるが故に、十界三千

しんげ

れんげ

しんげ

ゆえ

じっかいさんぜん

しょうじょう

しん

の信解なり。蓮華の信解なるが故に、十界三千の清浄の信

げ

しんげ

たい

なんみょうほうれんげきょう

うんぬん

解なり。この信解の体とは、南無妙法蓮華經これなり云々。

いち やくそうゆほん

一、薬草喩品

おんぎくでん

い

みようほう

やくそう

じっかいさんぜん

御義口伝に云わく、妙法の薬草なれば、十界三千の

どくそう

れんげ

やくそう

ほんらいししょうじょう

しょうじょう

毒草は蓮華の薬草なれば、本来清浄なり。清浄なれば

ほとけ

ほとけ

せつぼう

なんみようほうれんげきょう

うんぬん

仏なり。この仏の説法とは、南無妙法蓮華経なり云々。

ほん

しゅ

そう

たい

しょう

しゅ

じ

されば、この品には「種・相・体・性」の「種」の字に、

しゅるいしゅ

そうたいしゅ

ふた

かいえ

あ

そうたいしゅ

さんどくすなわ

種類種・相對種の二つの開会これ有り。相對種とは、三毒即

さんどく

しゅるいしゅ

はじ

しゅ

じ

じっかいさんぜん

るい

ち三徳なり。種類種とは、始めの種の字は十界三千なり。類

ごご

しも

しゅ

じ

なんみようほうれんげきょう

しゅるいしゅ

とは互具なり。下の種の字は、南無妙法蓮華経なり、種類種

なり。

じっかいさんぜん

そうもくおのおの

なんみようほうれんげきょう

十界三千の草木各々なれども、ただ南無妙法蓮華経の

いっしゆ

どくそつう

どく

しようじよう

そつうもく

やくそつう

一種なり。毒草の毒もなきなり。清浄の草木にして薬草な

うんぬん

り云々。

いち じゆきほん

一、授記品

おんぎくでん

い

じっかいここ

とうたい

ごんご

みよほうれんげ

御義口伝に云わく、十界己々の当体の言語は、妙法蓮華

じゆき

しようじよう

じゆき

しようじよう

じゆき

の授記なれば、清浄の授記なり。清浄の授記なれば、

じっかいさんぜん

ほとけ

十界三千の仏なり。ここをもつて、仏なれば、

なんみよほうれんげきよ

じゆき

うんぬん

南無妙法蓮華経と授記するなり云々。

いち けじよゆほん

一、化城喩品

おんぎくでん

い

みよほう

けじよ

じっかいどうじ

御義口伝に云わく、妙法の化城なれば、十界同時に

むじよう

れんげ

けじよう

じっかいさんぜん

かいらく

無常なり。蓮華の化城なれば、十界三千の開落なり。

じようじゆう

むじよう

みようほうれんげきよう

ぜんたい

常住・無常ともに妙法蓮華経の全体なり。

けじよう ほうしよ

しやうじ ほんぬ

しやうじ ほんぬ

たい

化城宝処は生死本有なり。生死本有の体とは

なんみようほうれんげきよう

しやく い

き

ほっしよう

き めつ

南無妙法蓮華経なり。釈に云わく「起はこれ法性の起、滅

ほっしよう めつ

はこれ法性の滅」。

いち ごひやくほん

一、五百品

おんぎくでん い

ほん

ごひやく

でし

じゆきさぶつ

御義口伝に云わく、この品には、五百の弟子、授記作仏

げんもん み

みようほう

ごひやく

すと現文に見えたり。しかりといえども、妙法の五百なれ

じっかいさんぜん

みなごひやく

でし

れんげ

でし

ば、十界三千、皆五百の弟子なり。蓮華の弟子なれば、ま

しようじよう

た清浄なり。

せん

じっかいさんぜん

なんみようほうれんげきよう

でし

詮ずるところ、十界三千、南無妙法蓮華経の弟子にあ

きよう

じゆき

うんぬん

らずということなし。この経の授記これなり云々。

いち じんきほん

一、人記品

おんぎくでん

い

ほん

がく

むがく

しようじやきた

御義口伝に云わく、この品には学・無学の聖者来つて

じようぶつ

すで

みようほうちようだい

がく

むがく

じっかいご

成仏するなり。既に妙法頂戴の学・無学なれば、十界互

ぐ さんぜんぐそく

がく むがく

みようほう

がく

むがく

ゆえ

具・三千具足の学・無学なり。妙法の学・無学なるが故に、

ふしぎ

じっかい

ほんのう

つ

れんげ

がく

むがく

不思議の十界に煩惱いまだ尽くさざるなり。蓮華の学・無学

じっかいさんぜん

しようじよう

かいらく

がく

むがく

なにも

なれば、十界三千、清浄の開落なり。この学・無学は何物

ぞや。

学がくとは法ほうなり、無学むがくとは妙みょうなり。いわゆる南無妙法蓮華經なんみょうほうれんげきょう

なり云々。
うんぬん

一、法師品
いち ほっしほん

御義口伝おんぎくでんに云いわく、妙法みょうほうの法師ほっしなれば、十界じっかいは皆妙法みなみょうほう

受持じゅじの一句一偈いっくいちげの法師ほっしなり。蓮華れんげの法師ほっしなれば、十界じっかい三千は

清浄しょうじょうの法師ほっしなり。十界じっかいの衆生しゅじょうの色法しきほうは能持のうじの人ひとなり。

十界じっかいの心性しんしやうは所持しよじの法ほうなり。よつて、色心しきしん共に法師ほっしにして、

自行じぎやう・化他けたを顕あらわすなり。いわゆる南無妙法蓮華經なんみょうほうれんげきょうの法師ほっしな

ゆるが故なり云々。
ゆえ うんぬん

一、宝塔品
いち ほうとうほん

御義口伝に云わく、この「宝塔」は宝浄世界より涌現す
おんぎくでん い ほうとう ほうじょうせかい ゆげん

るなり。その宝浄世界の仏とは、事相の義をばしばらくこ
お しょうどう かんじん とき はは たいない ゆえ ふぼ

れを置く、証道・観心の時は母の胎内これなり。故に、父母
ほうとうぞうさく ばんしょう

は宝塔造作の番匠なり。

宝塔とは、我らが五輪・五大なり。しかるに、託胎の胎
ほうとう われ ごりん ごだい たくたい たい

を宝浄世界と云う。故に、出胎するところを「涌現」と云
ほうじょうせかい い ゆえ しゅつたい ゆげん い

うなり。およそ衆生の涌現は地輪より出現するなり。故に
しゅじょう ゆげん じりん しゅつげん ゆえ

じゆうじゆじゆつ ち ゆじゆつ
「從地涌出（地より涌出す）」と云うなり。

みようほう ほうじようせかい じっかい しゆじよう たいない みな

妙法の宝浄世界なれば、十界の衆生の胎内は皆これ

ほうじようせかい れんげ ほうじよう じっかい たいない

宝浄世界なり。蓮華の宝浄なれば、十界の胎内ことごとく

むくしようじよう せかい みようほう じりん じっかい わた

無垢清浄の世界なり。妙法の地輪なれば、十界に亘るな

れんげ ち しようじようじ みようほう ほうじよう

り。蓮華の地なれば、清浄地なり。妙法の宝浄なれば、我

しんたい しようじよう ほうとう みようほうれんげ ゆじゆつ じっかい

らが身体は清浄の宝塔なり。妙法蓮華の涌出なれば、十界

しゆつたい さんもん ほんらいしようじよう ほうとう

の出胎の産門、本来清浄の宝塔なり。

ほうかい とうば じつぽうかいすなわ とうば みようほう にぶつ

法界の塔婆にして十法界即ち塔婆なり。妙法の二仏

じっかいさんぜん みなきようち にぶつ みようほう いちぎ さんぜん

なれば、十界三千、皆境智の二仏なり。妙法的一座には三千

の心性しんしやう、皆もつて二尊にそんの所座しよざなり。妙法蓮華二仏一座なれ

ば、不思議ふしぎなり、清淨しやうじやうなり。

妙法蓮華の見なれば、十界じっかいの衆生しゆじやう、三千さんぜんの群類ぐんるい、皆自身みなじしん

の塔婆とうばを見るなり。十界じっかい不同ふどうなれども、己おのれが身みを見るは、

三千具足さんぜんぐそくの塔とうを見るなり。己心こしんを見るは、三千具足さんぜんぐそくの仏ほとけを

見るなり。分身ふんじんとは、父母ふぼより相續そうぞくする分身ふんじんの意こころなり。

迷まよう時は流轉るとんの分身ふんじんなり、悟さとる時は果中かちゆうの分身ふんじんなり。

さて、分身ふんじんの起おこるところを習ならうには地獄じごくを習ならうなり。

かかる宝塔ほうとうも妙法蓮華經みやうほうれんげきやうの五字ごじより外ほかはこれ無なきなり。

みようほうれんげきよう

み

ほうとうすなわ

いつさいしゆじよう

いつさいしゆじようすなわ

妙法蓮華經を見れば、宝塔即ち一切衆生、一切衆生即ち

なんみようほうれんげきよう

ぜんたい

うんぬん

南無妙法蓮華經の全体なり云々。

いち だいばほん

一、提婆品

おんぎくでん

い

ほん

しゃくそん

ほんし

だいばだつ

御義口伝に云わく、この品には、釈尊の本師・提婆達

た じようぶつ

もんじゆしりきようけ

りゆうによ

じようぶつ

と

多の成仏と、文殊師利教化の竜女の成仏とを説くなり。

みようほうれんげきよう

だいば

りゆうによ

じつかいさんぜん

これまた妙法蓮華經の提婆・竜女なれば、十界三千、

みな じようだつ

りゆうによ

ほうかい

しゆじよう

ぎやく

へん

じようだつ

皆、調達・竜女なり。法界の衆生の逆の辺は調達なり。

ほうかい

とんよく

しんに

ぐち

かた

りゆうによ

じようだつ

法界の貪欲・瞋恚・愚癡の方はことごとく竜女なり。調達

しゆとく

ぎやくざい

いつさいしゆじよう

ししようとく

ぎやくざい

いつさいしゆじよう

は修徳の逆罪、一切衆生は性徳の逆罪なり。一切衆生

しょうとく てんのうによらい じょうだつ しゅとく てんのうによらい りゅうによ

は性徳の天王如来、調達は修徳の天王如来なり。竜女は

しゅとく りゅうによ いっさいしゅじょう しょうとく りゅうによ

修徳の竜女、一切衆生は性徳の竜女なり。

せん しゃくそん もんじゆ だいば りゅうによ ひと たね

詮ずるところ、釈尊も文殊も、提婆も竜女も、一つ種

みょうほうれんげきよう くろう ほんらいじょうぶつ

の妙法蓮華経の功能なれば、本来成仏なり。よつて、

なんみょうほうれんげきよう とな たてまつ とき じつかいどうじ じょうぶつ

南無妙法蓮華経と唱え奉る時は、十界同時に成仏するな

みょうほうれんげきよう だいばだつた い じつかいさんぜん

り。これを妙法蓮華経の提婆達多と云うなり。十界三千、

りゅうによ むくせかい りゅうによ

竜女なれば、無垢世界にあらずということなし。竜女が

いっしん ほんらいじょうぶつ なんみょうほうれんげきよう どうたい うんぬん

一身も本来成仏にして、南無妙法蓮華経の当体なり云々。

いち かんじほん

一、勸持品

おんぎくでん い ほん い も やしゆ き べつ じ つかい
御義口伝に云わく、この品の姨母・耶輸の記別は、十界

どうじ じ ゆき み ようほう い も み ようほう や しゆ ゆ え
同時の授記なり。妙法の姨母、妙法の耶輸なるが故なり。

じつかい し ゆじよう しん しよう た も き よう たい
十界の衆生の心性は、持つところの経の体なり。これ即

かんじ る つう しん しよう た も き よう かん じ
ち勸持の流通なり。心性たる持つところの経を勸持して

じぎよう け た おも む
自行・化他に趣くなり。

い も や しゆ に よにん じ ょうぶつ に まん だい じ なん し
姨母・耶輸は女人の成仏なり、二万の居士は男子の

る つう もん いん しょう い ったい なん みようほう れん げきよう とう たい
流通なり。この文、陰陽一体にして南無妙法蓮華経の当体な

うん ぬん
り云々。

いち あん らくぎようほん
一、安樂行品

おんぎくでん

い

みようほう

あんらくぎよう

じっかいさんぜん

御義口伝に云わく、妙法の安楽行なれば、十界三千こ

あんらくぎよう

じじゆゆう

とうたい

しん

く

い

せいがん

とごとく安楽行なり、自受用の当体なり。身・口・意・誓願

あんらくぎよう

れんげ

あんらくぎよう

さんぜんじっかい

ことごとく安楽行なり。蓮華の安楽行なれば、三千十界、

しょうじよう

しゆぎよう

しよほうじつそう

あんらくぎよう

清浄の修行なり。諸法実相なれば、安楽行にあらざる

ほんもん

こころ

じっかい

しきしん

ほんらいほんぬ

しんじつ

ことなし。本門の意は、十界の色心は本来本有として真実

あんらくぎよう

の安楽行なり。

あんらくぎよう

たい

安楽行の体とは、いわゆる上行所伝の

なんみようほうれんげきよう

うんぬん

りようぜんじようど

あんらく

ぎようけい

南無妙法蓮華経これなり云々。靈山浄土に安楽に行詣す

うんぬん

べきなり云々。

いち ゆじゆつぽん

一、涌出品

おんぎくでん い

ほん しゃくもんるつう のち ほんもんかいけん

御義口伝に云わく、この品は迹門流通の後、本門開顕

じよぶん

ゆえ

ほんじ

むさ

さんじん

あらわ

の序分なり。故に、まず本地の無作の三身を顕さんがため

しゃくそん

そな

ぼさつ

ゆえ

ほんじ

ほんげ

に、釈尊の具うるところの菩薩なるが故に、本地の本化の

でし め

みようほう

じゆうじ

じっかい

だいち

弟子を召すなり。これまた妙法の従地なれば、十界の大地

みようほう

ゆじゆつ

じっかいみなゆじゆつ

じっかい

なり。妙法の涌出なれば、十界皆涌出するなり。十界は

みようほう

ぼさつ

みな

にようやくうじようかい

じ ひじんじゆう

だいじ

妙法の菩薩なれば、皆、饒益有情界の慈悲深重の居士な

れんげ だいち

じっかい

だいち

じっかい

ゆじゆつ

ぼさつ

り。蓮華の大地なれば、十界の大地も十界の涌出の菩薩も

ほんらいししようじよう

本来清浄なり。

せん

ごとう

やく

とき

じゅうじ

じっかい

詮ずるところ、悟道に約する時は、「従地」とは、十界

しゅじよう

だいしゅ

しよう

ところ

ゆじゅつ

じっかい

しゅじよう

の衆生の大種の生ずる所なり。「涌出」とは、十界の衆生

しゅつたい

そう

ぼさつ

じっかい

しゅじよう

ほんぬ

じひ

の出胎の相なり。菩薩とは、十界の衆生の本有の慈悲な

ぼさつ

ほんぼう

みようほうれんげきよう

ふぞく

じゅうじ

り。この菩薩に本法の妙法蓮華経を付嘱せんがために従地

ゆじゅつ

涌出するなり。

にちれんとう

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

もの

じゅうじ

日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者は、従地

ゆじゅつ

ぼさつ

ほか

もと

うんぬん

涌出の菩薩なり。外に求むることなかれ云々。

いち

じゅりようほん

一、寿量品

おんぎくでん

い

じゅりようほん

じっかい

しゅじよう

ほんみよう

御義口伝に云わく、寿量品とは、十界の衆生の本命

なり。この品を本門と云うことは、本に入る門ということなり。ほん ほんもん い
なり。凡夫の血肉の色心を本有と談ずるが故に、本門とは云ほんぶ けつにく しきしん ほんぬ だん ゆえ ほんもん い
うなり。この重に至らざるを始覚と云い、迹門と云うなり。じゅう いた しかく い しゃくもん い
これを悟るを本覚と云い、本門と云うなり。いわゆる、さと ほんがく い ほんもん い
なんみようほうれんげきよう いっさいしゆじよう ほんぬ ざいしよ
南無妙法蓮華経は一切衆生の本有の在所なり。ここをもつ
て、経に「我実成仏已来（我は実に成仏してより已来）」きよう がじつじようぶついらい われ じつ じようぶつ このかた
とは云うなり云々。い うんぬん

一、分別品
いち ふんべつほん

御義口伝に云わく、この品は上の品の時、本地の無作の
おんぎくでん い ほん かみ ほん とき ほんじ むさ

さんじんによらい じゆ き ゆえ こんぽん かみ むさ さんじん

三身如来の寿を聞くが故に、今品にして上の無作の三身を

しんげ くだく ふんべつ くだく じっかい

信解するなり。その功德を分別するなり。功德とは、十界

ここ とうたい さんどく ほんのう ほん とき みようほう

己々の当体の三毒の煩惱を、この品の時、そのまま妙法の

くだく ふんべつ くだく ほんぬ

功德なりと分別するなり。その功德とは、本有の

なんみようほうれんげきよう うんぬん

南無妙法蓮華経これなり云々。

いち ずいきほん

一、随喜品

おんぎくでん い みようほう くだく ずいきき と

御義口伝に云わく、妙法の功德を随喜することを説く

ごじつてんでん ごと みようほう ごと じつ

なり。「五十展転」とは、「五」とは妙法の五字なり、「十」

じっかい しゆじよう てんでん いちねんさんぜん きようそう

とは十界の衆生なり、「展転」とは一念三千なり。教相の

とき だいごじゅうにん ずいき くどく きょうりよう ごじゅうにん
時は「第五十人」の随喜の功徳を校量せり。五十人とは、

いっさいしゆじよう

みようほう

ごじゅうにん

みようほうれんげきよう

てんでん

一切衆生のことなり。妙法の五十人、妙法蓮華経を展転

ゆえ

なんみようほうれんげきよう

てんでん

するが故なり。いわゆる、南無妙法蓮華経を展転するなり

うんぬん

云々。

いち ほっしくどくほん

一、法師功徳品

おんぎくでん

い

むさ

さんじん

によらい

じゆ

ふんべつ

御義口伝に云わく、無作の三身も、如来の寿も、分別

くどく

ずいき

わ

み

かみ

功徳も、随喜も、我が身の上のことなり。しかれば、父母

しよしよ

ろつこん

しようじよ

じざいむげ

みようほう

ろつこん

所生の六根は清浄にして自在無礙なり。妙法の六根な

じっかいさんぜん

ろつこん

みなしようじよ

れんげ

そな

れば、十界三千の六根は皆清浄なり。蓮華の具うるとこ

ろっこん

まった ふじよう

ろっこん

ろの六根なれば、全く不浄にあらざるなり。この六根にて

なんみようほうれんげきよう

けんもん かくち

とき

ほんらいほんぬ

ろっこん

南無妙法蓮華経と見聞覚知する時は、本来本有の六根

しょうじよう

うんぬん

清浄なり云々。

いち ふきようほん

一、不軽品

おんぎくでん い

ぼさつ

らいはい

ぎよう

いっさい

御義口伝に云わく、この菩薩の礼拝の行とは、一切

しゅじよう

じたいちねん

らいはい

ふぼかぼく

にくしん

衆生のことなり。自他一念の礼拝なり。父母果縛の肉身を

みようほうれんげきよう

らいはい

ぶっしよう

ぶっしん

しゅじよう

とうたい

妙法蓮華経と礼拝するなり。仏性も仏身も衆生の当体の

しきしん

ただ

らいはい

ぎよう

かいたうさぶつ

色心なれば、直ちに礼拝を行ずるなり。よつて「皆当作仏

みなまさ

さぶつ

しじ

なんみようほうれんげきよう

しゅし

(皆当に作仏すべし)の四字は、南無妙法蓮華経の種子に

よ
依るなり。

いち じんりきほん

一、神力品

おんぎくでん

い

じっしゆ

じんりき

げん

じようぎようぼさつ

御義口伝に云わく、十種の神力を現じて上行菩薩に

みようほうれんげきよう

ごじ

ふぞく

じんりき

じっかい

妙法蓮華經の五字を付嘱したもう。この「神力」とは、十界

さんぜん

しゆじよう

じんりき

ほんぷ

たい

じんりき

さんぜ

しよぶつ

三千の衆生の神力なり。凡夫は、体の神力、三世の諸仏は、

ゆう

じんりき

じん

しんぼう

りき

しきほう

りき

用の神力なり。「神」とは心法、「力」とは色法なり。「力」

ほう

じん

みよう

みようほう

じんりき

じっかい

は法、「神」は妙なり。妙法の神力なれば、十界ことごと

じんりき

れんげ

じんりき

じっかいししようじよう

じんりき

そう

く神力なり。蓮華の神力なれば、十界清浄の神力なり。総

さんぜ

しよぶつ

じんりき

ほん

つ

じて三世の諸仏の神力とは、この品に尽くせり。

しやくそんしゆつせ じんりき ほんい ほん じんりき

釈尊出世の神力の本意もこの品の神力なり。いわゆる、

みようほうれんげきよう じんりき じついかいじよう じつかみなじよう だん

妙法蓮華經の神力なり。「十界皆成（十界皆成ず）」と談

ほか しょぶつ じんりき あ いっさい ほうもん

ずるより外の諸仏の神力はこれ有るべからず。一切の法門、

じんりき うんぬん

神力にあらずということなし云々。

いち ぞくるいほん

一、囑累品

おんぎくでん い ほん まちようふぞく と

御義口伝に云わく、この品には摩頂付囑を説いてこの

みようほう めつご とど じついかい ぼさつ みようほう ふぞく

妙法を滅後に留めたもうなり。これまた妙法の付囑なれ

じつかいさんぜん みなふぞく ぼさつ

ば、十界三千は皆付囑の菩薩なり。

み な のうけ しょけ そな

また三たび摩ずることは、能化・所化の具うるところ

の三観・三身の御手をもつて、所化の頂上に明珠を譲り

与えたる心なり。およそ頂上の明珠は、覚悟の知見な

り。頂上の明珠とは、南無妙法蓮華經これなり云々。

一、薬王品

御義口伝に云わく、この品は薬王菩薩、仏の滅後にお

いて法華を弘通するなり。詮ずるところ、焼身・焼臂とは、

焼は照の義なり、照は智慧の義なり。智能く煩惱の身・

生死の臂を焼くなり。天台大師も本地は薬王菩薩なり。能説

に約する時は釈迦なり。衆生の重病を消除する方は、薬

おう やくしによらい

りもつ

かた

やくおう

い

じご

王・薬師如来なり。また、利物の方にて薬王と云う、自悟の

かた やくし い

やくおう

やくし よ

い

とき てんだい

方にては薬師と云う。この薬王・薬師、世に出ずる時は天台

だいし

やくおう

めつご

ぐつう

やくしによらい

ぞうほうざんじ

りやく

大師なり。薬王も滅後に弘通し、薬師如来も像法暫時の利益

うじよう

とき

しんたい

あらわ

な

ぎ

あらわ

有情なり。時をもつて身体を顕し、名をもつて義を顕す

ほとけあらわ

やくおうぼさつ

しかん

いちねんさんぜん

ことを、仏顕したもうなり。薬王菩薩は止観の一念三千の

ほうもん

ひろ

いちねんさんぜん

法門を弘めたもう。その一念三千とは、いわゆる

なんみようほうれんげきよう

うんぬん

南無妙法蓮華経これなり云々。

いち みようおんぼん

一、妙音品

おんぎくでん い

ぼさつ

ほっけぐつう

ぼさつ

御義口伝に云わく、この菩薩は法華弘通の菩薩なり。故

ゆえ

さんじゅうししん

げん

じっかいごぐ

あらわ

りやく

せつぼう

に、三十四身を現じて十界互具を顕したまい、利益・説法

みょうほう

みょうおん

じっかい

おんじょう

みな

するなり。これまた妙法の妙音なれば、十界の音声は皆

みょうおん

じっかい

さんじゅうししん

げん

妙音なり。また十界ことごとく三十四身の現ずるところの

みょうおん

れんげ

みょうおん

じっかいさんぜん

おんじょう

妙音なり。また蓮華の妙音なれば、十界三千の音声は、

みな むせん

しょうじょう

じかくだいし

みょうおん

しゅつせ

皆、無染・清浄なり。されば、慈覚大師をば妙音の出世

なら

とうけつ

とき

いんじょう

みょうおん

つた

と習うなり。これによつて、唐決の時、引声の妙音をば伝

ゆえあ

ほつけ

ひぼう

だいにちきょう

えたまえり。いかなる故有つて、法華を誹謗して、大日経

とう

おと

い

うんぬん

ほうかい

おんじょう

等に劣りたりと云うや云々。いわゆる、法界の音声、

なんみょうほうれんげきょう

おんじょう

うんぬん

南無妙法蓮華経の音声にあらずといふことなし云々。

いち かんのおんぼん

一、観音品

おんぎくでん い

ほん じんじん ひほん

そくさいえんめい

御義口伝に云わく、この品は甚深の秘品なり。息災延命

ほん

とうずおうきよう な

ほ

しきい

の品なり。当途王経と名づく。されば、この品について職位

ほうもん

つ

なら

てんだい

さんだいぶ

ほか

かんのんげん

法門を継ぐぞと習うなり。天台も二大部の外に観音玄とい

しよ

つく

しよあんだいし

りようかん

しよ

つく

よ

よ

う疏を作り、章安大師は両巻の疏を作りたまえり。能く能

ひほん

かんのん

ほっけ

げんもく

いみよう

い

くの秘品なり。「観音と法華とは、眼目の異名なり」と云つ

かんのんすなわ

ほっけ

たい

なんみようほうれんげきよう

て、観音即ち法華の体なり。いわゆる、南無妙法蓮華経の

たい

うんぬん

体なり云々。

いち

だらにほん

一、陀羅尼品

おんぎくでん い ほん にしよう にてんのう じゅうらせつによ
御義口伝に云わく、この品は、一聖・二天王・十羅刹女、

だらに と じきようしや おうご じゅうほう
陀羅尼を説いて持経者を擁護したもうなり。いわゆる妙法

だらに しんごん じっかい ごごんおんじよう みなだらに
陀羅尼の真言なれば、十界の語言音声、皆陀羅尼なり。さ

でんぎようだいしい みようほう しんごん たきよう と ふげん
れば、伝教大師云わく「妙法の真言は他経に説かず。普賢

じようご たきよう と だらに なんみようほうれんげきよう ゆう
の常護は他経に説かず」。陀羅尼とは、南無妙法蓮華経の用

ごじ なか みよう いちじ だらに と い
なり。この五字の中には、妙の一字より陀羅尼を説き出だ

うんぬん
すなり云々。

いち ごんのうほん
一、嚴王品

おんぎくでん い ほん にし きようけ ちち
御義口伝に云わく、この品は、二子の教化によつて、父

みょうしようごんのう じゃけん ひるがえ しようけん じゅう しゃらじゅおうぶつ
の妙莊嚴王は邪見を翻し、正見に住して、沙羅樹王なと成るなり。

しゃらじゅおう ぼんご じじょうこう い
「沙羅樹王」とは梵語なり、ここには「熾盛光」と云う。

いっさいしゅじょう みな しじょうこう しゅっしょう いっさいしゅじょう
一切衆生は皆これ熾盛光より出生したる一切衆生なり。

ゆえ じっかい しゅじょう ちち ほっけ こころ じじゅうゆうち
この故に、十界の衆生の父なり。法華の心にては自受用智

こつねんかき ぶんしようしゃたく こつねん ひ お しゃたく
なり。「忽然火起、焚焼舎宅（忽然に火は起こって、舎宅を

ぶんしよう ぼんのう いちねん ひ お めいご
焚焼す）」とは、これなり。煩惱の一念の火起こって迷悟

ふに しゃたく や じゃけん じゃけん
不二の舎宅を焼くなり。邪見とはこれなり。この邪見を

じゃけんすなわ しょう て なんみょうほうれんげきょう ちえ
「邪見即ち正」と照らしたるは、南無妙法蓮華經の智慧な

り。いわゆる六凡ろくぼんは父ちちなり、四聖ししやうは子こなり。四聖ししやうは正見ししやうけん、
ろくぼん じゃけん ゆえ ろくどう しゆじやう みな わ ふぼ
六凡ろくぼんは邪見じゃけん。故ゆえに、「六道ろくどうの衆生しゆじやうは皆みなこれ我が父母わふぼなり」
とは、これなり云々。うんぬん

一、勸発品いち かんぼつぽん

御義口伝おんぎくでんに云いわく、この品ほんは再演法華さいえんほつけなり。本迹二門ほんじやくにもん

の極理ごくり、この品ほんに至極しごくするなり。慈覺大師じかくだいし云いわく「十界じっかいの

衆生しゆじやうは発心修行ほつしんしゆぎやうす」と釈しゃくしたもうは、この品ほんのことなり。

詮せんずるところ、この品ほんと序品じよほんとは生死しやうじの二法にほうなり。序品じよほんは我われ

ら衆生しゆじやうの生しやうなり。この品ほんは一切衆生いっさいしゆじやうの死しなり。生死しやうじ一念いちねん

みょうほうれんげきよう

い

ほんほん

はじ

だいごう

なるを妙法蓮華経と云うなり。品々において初めの題号は

しょう なた お なた し なた ほかきよう しょうじしやうじ

生の方、終わりの方は死の方なり。この法華経は生死生死

ねぐ

と転りたり。

しょう ゆえ はじ によぜがもん

生の故に始めに「如是我聞（かくのごときを我聞きき）」

お によ しょう ぎ し ゆえ お さらいにこ

と置く。「如」は生の義なり。死の故に終わりに「作礼而去

らい な さ けつ こ し ぎ

（礼を作して去りにき）」と結したり。「去」は死の義なり。

さらい ことば じやうし あいだ な な われ

「作礼」の言は、生死の間に成しと成すところの我ら

しゆじやう しよさ しょうし さいきょう みやうほうれんげきよう らい

衆生の所作なり。この所作とは、妙法蓮華経なり。「礼」

ふらん ぎ ほうかいみやうほう さらん てんだいだいし

とは不乱の義なり。法界妙法なれば、不乱なり。天台大師

い たい じ らい くん らい ほう おのおの おや おや
云わく「体の字は礼と訓ず。礼は法なり。各々その親を親と

おのおの こ こ しゅつせ ほつたい
し、各々その子を子とす。出世の法体も、またかくのごと

たい みようほうれんげきよう たいげんぎ しゃく
し。「体」とは、妙法蓮華經のことなり。まず体玄義を釈

たい じっかい いたい ほけきよう たい
するなり。「体」とは十界の異体なり。これを法華經の体と

さいらいにこ と ほうかい せんそうばんぼく
せり。これらを「作礼而去」とは説かれたり。法界の千草万木、

じごく がきとう かい しょうじつそう さいらい
地獄・餓鬼等、いずれの界も諸法実相の「作礼」にあらず

すなわ ぶんぼさつ ふ ほうかい
ということなし。これ即ち「普賢菩薩」なり。「普」とは法界、

げん さいらいにこ すなわ みようほうれんげきよう
「賢」とは「作礼而去」なり。これ即ち妙法蓮華經なり。

ほんぼん はじ ごじ だい お
ここをもつて品々の初めにも五字を題し、終わりにも

五ご字じをもつて結けつし、前ぜん後ご・中ちゅう間かん、南なん無み妙みょう法ほう蓮れん華げ經きょうの七しち字じなり。

末まつ法ぼう弘ぐつう通ようの要い法ちだん、たあだこの一いち段だんにのみこれ有あるなり。

これらこころの心うしなを失ようつて要ほう法むすに結むすばずんば、末まつ法ぼう弘ぐつう通ほうの法ほうに

は足たらざるものなり。あにちれんまつさえ日ほんい蓮うしなが本うしな意うしなを失うしなうべし。

日にちれん蓮でが弟しだん子な檀べつ那さい、別かくの才む覚やく無やく益やくなり。

妙みょう樂らく、釈しゃくして云いわく「子こ、父ちちの法ほうを弘ひろむ。世せ界かいの益やく有あ

り」。「子こ」とは地じ涌ゆの菩ぼ薩さつなり、「父ちち」とは釈しゃく尊そんなり、「世せ界かい」

とは日本にほん国こくなり、「益やく」とは成じょう仏ぶつなり、「法ほう」とは

なんみょうほうれんげきよう

いま

ちち

南無妙法蓮華経なり。今またもつてかくのごとし。「父」と

にちれん

こ

にちれん

でしだんな

せかい

にほん

は日蓮なり、「子」とは日蓮が弟子檀那なり、「世界」とは日本

こく

やく

じゆじ

じようぶつ

ほう

じようぎよう

国なり、「益」とは受持し成仏するなり、「法」とは上行

しよでん

だいもく

所伝の題目なり。

おんぎくでんまきげ

御義口伝卷下

こうあんがんねんつちのえとらしようがつついたち

弘安元年 戊寅 正月 一日

しつぴつ

執筆

にっこう

日興

御義口伝

おんぎくでん

終

しゆう